

ソードアート・オンライン00—A wakening of
the Trailblazer—

~YASU~

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

残酷な描写は保険

SAO編あらすじ

約10000人のプレイヤーがゲームに監禁される。脱出方法は100層まであるステージを全てクリアすること。そのうえゲーム内でHPが0になる、ゲーム機（ナーヴィア）を強制的に外されるなどと現実でも死んでしまうという恐怖のデスマム、その名はソードアート・オンライン

そのゲームに聖永 刹那という少年も巻き込まれる、彼はゲームから脱出するために……自分自身が変わるために……今剣を握る

A L O 編

2025年1月。SAO事件から2ヶ月が立ち刹那、和人もリハビリをしながら生活をしてきた。しかし未だにSAOからの「未帰還者」として最愛の人明日奈を初め300人のプレイヤーが原因不明で眠ったままであった。ある日、エギルから渡された情報でアルヴヘイム・オンラインというVRMMORPGにて明日奈らしき姿を発見、写真を見せられた。和人と刹那はアスナなのか、そうであれば助ける為にALOへと再び「キリト」、「セツナ」としてフルダイブをした。しかしそこは剣の世界であったSAOとは全く違う種族同士が争い、魔法が支配する妖精の国であった……

G G O 編

2025年12月。SAO事件から1年がたったある日、セツナは総務省仮想課菊岡誠二郎から奇妙な依頼を受ける

それは銃と鋼鉄のVRMMOガンゲイルイ・オンライン（GGO）突如発生した怪現象、死銃（デス・ガン）の事件の捜査であった。漆黒の銃を持つ謎のアバターに撃たれたプレイヤーは実際に現実世界でもく死に至る。依頼を断りきれなかったセツナは疑問を抱きつつもGGOへとログインし、狙撃ライフルヘカートIIを持つシノンとかつてライフルの国際大会で優勝するほどの凄腕の青年、ロックオンと出会う。シノンや

ロックオンの力を借りて死銃に接触すべくGGO最強者決定バトルロワイヤル大会<
<バレット・オブ・バレット>>へと参加するが……

目次

アインクラッド編

第一話	介入―はじまり―	1
第二話	絶望―デスゲーム―	6
第三話	武器―相棒―	12
第四話	始動―出会い―	16
第五話	一步―兆し―	21
第六話	遭遇―はじまり―	35
第七話	温度―温もり―	41
第八話	雪崩―アヴァランチ―	53
キャラクター&武器紹介	―	66

第九話 紅蓮―TRANS―AM―

第十話	告白―プロポーズ―	92
第十一話	星屑―スターバーストス	104
トリーム―	―	104
第十二話	記憶―思い出―	129
第十三話	終末―結末―	150
フェアリィダンス編	―	176
第十四話	現実―はじまり―	176
第十五話	失敗―やらかし―	183

		第十六話	大空―飛翔―	194
		第十七話	世界樹―目的地―	
	217	第十八話	戦闘―キリト―	230
		第十九話	戦闘―セツナ―	245
		第二十話	真実―現実―	262
		第二十一話	妹と恋人―直葉と明日	
		奈―		281
	317	第二十二話	帰還―ただいま―	
		キャラ説明&用語		337
		ファントム・バレット編		
第二十三話		銃世界―GGO―		
	426	第三十話	死闘―その2―	441
	417	第二十九話	死闘―その1―	
		第二十八話	開幕―BOB本戦―	
	386	第二十七話	記憶―カコ―	401
		第二十六話	引き金―おもい―	
		第二十五話	開幕―BOB(予選)―	371
		パ―		356
		第二十四話	狙撃手たち―スナイ	
	342			

457 第三十二話

邂逅
——
死銃—デス・ガン—

452

アインクラッド編

第一話 介入―はじまり―

アインクラッド編

俺の名前は聖永 刹那、俺は一年前に両親を事故で無くしてから学校にもろくに行かず、引きこもり気味になってしまった。

人生に絶望していた時に出会ったのがVRMMO、俺はそれに没頭していた。とあるゲームではそれを極めし称号として『ガンダム』という名も貰った。

今はそんなことどうでもいい、それよりも今はナーヴギアという五感全てを使いゲームを体感出来るという素晴らしい新作VRMMO「ソードアート・オンライン」の発売ということだ。

俺も開店1時間前には店に行ったんだが、先客はかなりいた、まあここ数日話題になつてたから仕方がない。

やっとの思いで購入し家に帰った、家の台所を見ると妹からの書き置き「部活行つてきます」とのことらしい。妹は聖永 麗菜、双子だ。彼女は俺とは違い明るく活発な性

格だ、いつも俺に突っかかってくる。

自室に行きサービス開始の時間になる、俺は頭にナーヴギアを装着し、ベッドに横になる。

「リンク・スタート！」

しばらくすると初期設定画面が出てくる、よくわからなかったため髪型しかいじつてない

「名前は…セツナ…」

名前の入力まで終わると目の前が真っ白になった。

次に目を開けたときには始まりの街にいた、なんとも不思議な感覚だ……ほんとにここはゲームの中なのか？

手を握ったり開いたりしてるとどこからか声が出た。

「おーい！その色黒の兄ちゃん！」

と声をかけてきたものがいたので振り向くとそこには俺と同年代くらいのやつとバングナをつけた男がいた

「お前さんも見た感じこのゲーム初めてつばいじゃねえか！俺もそうなんだがよ、このあとコイツからいろいろ教えてもらうんだ、お前もどうだ？」

「ああ、よろしく頼む」

「おう！俺の名前はクライン、よろしくな！」

「俺はキリト、よろしく」

バンダナ男、同年代くらいはやつと順番に自己紹介をはじめた。

「俺はセツナ、よろしく頼む」

各々が自己紹介を終えたあとフィールドに向かいキリトのレクチャーが始まる

内容はソードスキルについてだ。

「こうやってタメをつくるようにして……」

キリトは手本を見せてくれた、その手際はなかなかのものだ。

「なるほど……タメか……」

「なかなか簡単そうだな」

ちやうどフィールドにフレンジーボアがいたので俺は試しにソードスキルを使ってみる

「タメをつくるように……」

すると剣が発光し、その勢いでフレンジーボアを切った。

ソードスキルというのは簡単にいうと必殺技みたいなものらしい、実に気持ちがいいものだ。

俺がフレンジーボアを相手にしてる時にクラインも同じくソードスキルを試そうと
していたらしい

結果は失敗だったらしいがな……

それからしばらく練習をしているとクラインも様になってきたようだ

「おお！もうこんな時間じゃねえか！」

数時間レベリングをしているとクラインが突然叫び出す……うるさいやつだ……

「俺、頼んでたピザがそろそろ来る時間なんだよ！悪いな、一応フレンジ登録しておくか
？なんかあつたら頼もしいしな」

俺はキリト、クラインをフレンジ登録した。

「俺も一回やめようと思う、そろそろ食事の時間だからな……キリトはどうする？」
「俺はまだ続けるよ……」

「……そうか……じゃあ二人ともまた……」

「おう！またな！」

「うん……また……」

……なぜそんな悲しそうな顔をするんだ……？

そう思いながらメニューを開く

「…………なぜだ…？なぜログアウトボタンがない……」

メニューのどこを見てもログアウトボタンがない…バグか…？

「おいおい、なに言ってるんだよログアウトボタンならここに……あれ？」

「どうやら俺だけじゃないらしい……サービス初日だからこのぐらいのバグはあるものなのか？いや、だがログアウトボタンが無くなるバグなんて…」

「GMコールとかしてみたのか？」

「今からしてみる」

キリトの提案でGMコールしてみるが

「おかしい……繋がらない……どうなっているんだ…？」

そんなことを言っているといつの間にか俺たち3人は始まりの街へと戻ってきてしまった。

第二話 絶望—デスゲーム—

俺とキリト、クラインは始まりの街へと強制転移された。

周りを見渡してみるとほぼ全プレイヤーがいるのではないかと思うくらいの人が集まっていた。

「何が起こるってんだよ…?」

「さっきのバグについてじゃないか?」

キリトとクラインが話をしていると上空に warning と表示され、赤い液体のようなモノからローブを被った何かが現れた。こんなことが出来るのは運営以外いるはずがない…やはりログアウトボタンのバグについての説明か?

「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ。もつとわかり易く言うところの世界で唯一の神だ。プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかし、これはゲームの不具合ではない。繰り返す。不具合ではなく、これは『ソードアート・オンライン』本来の仕様である。」

赤いローブの何か、いや茅場晶彦が喋り出した…不具合ではない…? 本来の仕様

……?こいつ……何を言ってる……

「諸君は自発的にログアウトすることはできない。また、外部の人間の手によるナーヴギアの停止、あるいは解除もあり得ない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる。残念ながら、現時点でプレイヤーの家族、友人などが警告を無視し、ナーヴギアを強制的に解除しようと試みた例が少なからずあり、その結果、213名のプレイヤーがこのアインクラッドおよび現実世界からも永久退場している。」

茅場晶彦がいくつかのウィンドウを出す、それより俺たちは受け止めなければならなかった、これが……茅場晶彦が言っていることが真実であると……

「御覧の通り、多数の死者が出たことを含め、あらゆるメディアがこの状況を繰り返し報道している。よって、すでにナーヴギアが強制的に解除される危険は低くなったと言ってよからう。諸君らは安心してゲーム攻略に励んでほしい。しかし、十分に留意してもらいたい。今後ゲームにおいてあらゆる蘇生手段は機能しない。HPヒットポイントが0ゼロになった瞬間、諸君らのアバターは永久に消滅し、同時に、諸君らの脳はナーヴギアによって破壊される」

次々と驚愕の事実が告げられる……周りでは泣き叫ぶ者、腰を抜かしてる者……無理もない……この状況では……俺も心が挫けそうだ……

「諸君らが解放される条件はただ一つ。このゲームをクリアすれば良い。現在君たちがいるのはアインクラッドの最下層、第1層である。各フロアの迷宮区を攻略し、フロアボスを倒せば上の階に進める。第100層にいる最終ボスを倒せばクリアだ。」

聞いた話によるとβテストでは2か月で第9層までが限界だったらしい。全100層を攻略するとなれば、普通に考えれば1年10ヶ月。だが、HPが0になれば死ぬというシステムが枷になって攻略が遅れることは必然だ

「それでは最後に、諸君らのアイテムストレージに私からのプレゼントを用意してある。確認してくれたまえ」

皆一斉にメニューウィンドを出してアイテムストレージを確認する。そこに表示されたのは手鏡だった。

オブジェクト化してみるとそれは西洋風の至って普通の手鏡であった。旅の前にもだしなみを整えろつてことか？？すると手鏡が突然光だし身体を包みこんだ、周りでも同じことが起きてるのが確認出来る。これは……！また強制転移か！

そう用心していると光はしだいに弱まっていく。

「なんだったんだ……今のは……」

「お前……セツナか？」

隣、先程までキリトがいた位置から声がするので見てみるとそこには先程までのキリ

トはいなかった。かわりにいたのは自分と同じくらいの身長のも、男というには可愛らしい顔をしたやつがいた。

「お前こそ……まさか!」

ハッと思い自分のことも確認してみたがやはり現実と変わらない姿になっていた。

「うおー……! なんじゃこりゃ!?!」

後ろでクラインが騒いでいた気がするが無視するとするか……そんなことより……

茅場晶彦……! 俺の前で神を語るか……! !

「それでは、チュートリアルを終了す……!」

消えようとした茅場晶彦に俺は我慢が出来なかった

「茅場晶彦……! 貴様を作ったこのゲーム……俺が破壊する!! 俺の意思で!! 必ず……必ずクリアして貴様をぶん殴りに行ってやる!」

俺が広場全体に響きわたるような声で叫ぶ

「……諸君らの健闘を期待している。」

茅場晶彦は消えた、一瞬の静寂の後再び広場は混乱する。

家族の名、恋人の名を叫ぶ者もいた、泣いて崩れ落ちてる者もいる

「セツナ、クライン……ちよつと……!」

キリトに連れられ街の外れまで来る

「これからしばらく街の混乱続くだろう…いいか、よく聞いてくれMMORPGってのはプレイヤー間のリソースの奪い合いなんだ。システムが供給する限られた金とアイテムと経験値を、より多く獲得した奴だけが強くなれる。この始まりの街周辺のフィールドは、同じことを考える連中に狩り尽くされて、直ぐに枯渇するだろう。モンスターのリポップをひたすら探し回るハメになるだろう。今のうちに次の村を拠点にした方がいい。俺は、道も危険なポイントも全部知ってるから、レベル1の今でも安全に辿り着ける」

「……わかった、同行しよう」

「すまねえ……俺はちよつと……他のゲームでダチだった奴等と一緒に徹夜で並んでソフトを買ったんだ……。そいつらもうログインしてさっきの広場にいるはずだ。だから置いてなんて……行けねえ……」

「なら仕方ないな……よし、セツナ行くぞ」

「了解した」

俺たちは街から走って出ていこうとした…

「キリト〜！セツナ〜！お前らよつぽど可愛い顔してんな！俺の好みだぜー！」

「お前もその武将面のほうが100倍似合ってるぞ！」

「……クライン！死ぬなよ！」

「……おうよ！」

俺たちはクラインに別れの挨拶をし、街を後にした。

第三話 武器―相棒―

デスゲーム宣告から数日がたつ。

俺とキリトはレベリングついでにホルンカの村で受注出来る武器入手クエストをしていた。

そこで俺は奇妙な武器を手に入れた…

「GNソード……?」

アイテムストレージからオブジェクト化してみても装備してみる。

その武器は片手剣という分類らしいがあまりに奇妙な点がたくさんある、まず普通の片手剣は手に握るものだ、だがこの剣は握るといふより腕に装着するという表現のほうがいい。

二つ目、剣というのは鞘に収めるものだ、だがこの剣の刀身は折りたたみ式だ。収納、展開も一瞬で出来る。だが刀身は裸のまま折りたたんであるので危なかつしいがな………どうやらこの剣には二つの形態があるらしい、握るグリップの角度により固定式と手持ち式（普通の剣のような状態）がある。

最後に、この剣には盾もついている…つまり右手にGNソード、左手に盾を装備すれ

ば防御力は桁違いだということだ。

「汎用性の高い武器だな……」

フィールドに出現する雑魚モンスターで試し切りをしてるとキリトがやって来た。

「セツナ〜！お前はなんかいい武器落ちたか？」

キリトは自慢するように新しい片手剣、アニールブレードを担いで来る。

「ああ、これだ、簡単に言うに変型武器だな」

GNソードを見せるとキリトは不思議そうな顔をする。

「なんだこの武器は？こんな武器見たことないぞ？」

「そうなのか？……ならこれはいったい……」

「……知り合いにそういうのに詳しいやつがいるから村に帰ったら紹介してやるよ」

「ああ、助かる」

俺はGNソードを装備したまま村に向かう

村のカフェのような場所で待つてるという指示がキリトからあったので俺はそこで水を飲んで待つている……何故水か？……残念ながらこの世界の飲食類は口にあわないんだ……

しばらくするとキリトが誰かを連れてきた。

「セツナ、紹介するよ。こいつは俺のβ時代からの知り合い、アルゴだ。」

「俺っちはアルゴ、よろしくナ！せっちゃん！」

「……よろしく頼む」

初対面でせっちゃん呼びとは……

「そんなことより早く見せてくれヨ〜！」

「ああ、これだ……」

手に装着していたGNソードを外してアルゴに渡す。

「ふむふむ……これってホントにそのフィールドで入手したのか？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「俺っちの情報……いやこれは感だナ……この剣、GNソードって言ったっけか？……今は層にあわせて初期ステータスが低く設定されてるけど強化し続ければ魔剣クラスにまでなる可能性を持った武器だナ」

「おいおいマジかよ……」

「つまりどういうことだ……？」

「ごめんナ、俺っちにもこればかりはよくわからないんだ。もしかしたらこれがただのバグかもしれないしナ」

「そんなバグがあつていいのか……？」

キリトの反応ももつともだ、こんなバグがあつていいはずがない……茅場晶彦……何

を考えてる

場所は変わってアーガス本社

「フッフ…僕からのプレゼント受け取ってもらえたようだね…それを使ってせいぜい強くなることだね…」

茅場晶彦ではない、「誰か」がディスプレイを見て呟いた。

第四話 始動—出合い—

さらにあれから数日が経った。今俺たちは最前線の街にいる、あれからレベリングを繰り返して俺は14、キリトは15まで上がっていた。

今日はこの街で攻略会議がある、俺とキリトはそれに出席するために中央広場集まっていた。……やはり空気が重いな……

「今日は、俺の呼びかけに応じてくれてありがとう！俺はディアベル、職業は気持ち的に、ナイトやってます！」

ディアベルという男が現れ軽く挨拶をすると広場全体が笑いに包まれた。

「あの重々しかった空気を変えたか……頼もしいやつだな……」

「ああまったくだ、ああいう奴がこれから先大きなギルドを引っ張っていくんだろうな」キリトと談笑をしているとディアベルが本題を切り出した。

「…昨日、俺たちのパーティーが、あの塔の最上階へ続く階段を発見した。つまり明日には、ボス部屋に乗り込むつもりだ！一カ月。そう、一カ月かかったけど……それでも、俺たちは、示さなきゃならない。ボスを倒し、第2層に到達して、このデスゲームもいつかクリアできることをはじまりの街で待っているみんなに伝えなきゃならない。それ

が、今この場所にいる俺たちトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ！！？みんな！
おおー！！！！

広場が盛り上がる。だがそんな時に限って場の雰囲気乱すやつが必ずいる……
「ちよお待ってんか、ナイトはん。」

サボテンのような頭をした小柄な男がディアベルの前まで出てくる。

「わいは、キバオウっちゅうもんや。こん中に、5人か10人、ワビい入れなあかん奴らがおるはずや！」

おそらく奴が言いたいのはβテストのことだろう……

「キバオウさん。君の言う奴らとはつまり……元ベータテストの人たちのこと、かな？」

「決まっとるやろ。ベータ上がりどもは、こんクソゲームが始まったその日にはじまりの街から消えよった。九千何百人の素人ビギナーを見捨ててな。奴らはうまい狩場やらボロイクエストを独り占めして、自分らだけほんぽん強うなって、その後もずーっと知らんぷりや。こん中にもおるはずやで。そいつらに土下座さして、貯め込んだ金やアイテムをこん作戦のために軒並み吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし預かれん。」

隣を見るとキリトが苦虫をかみつぶしたような顔をしていた…

「貴様、要するβテスターは今まで死んでったもののために死ぬということか……！」

俺は我慢の限界が来てキバオウの目の前まで行く。

「…っ！ワイはそんなこと言つとらん！ただワイは……！」

「ただ、なんだ？貴様の言いたいことはそういうことだ、少なくとも俺にはそうとしか聞こえなかった。俺の知り合いにもβテスターはいる…だがそいつは貴様の言ったようなやつではない……むしろ初心者をやつらにマップデータを配つたりしてた…そんなβテスターを貴様は絶対悪と捉えるのか!？」

「くっ……」

「それにだ貴様は……！」

「もうその変にしとけ……」

褐色の大男が俺に静止をかけた。

「俺の名前はエギルだ、キバオウもお前も言いたいことはわかった。でも今はそんなことより攻略会議だ。」

「……すまなかった…俺も熱くなりすぎた…」

「……ワイもや……」

「ありがとう、エギルさん…じゃあ本題に戻ろう、まず数人でパーティーを作ってくれ。」
席に戻るとキリトから礼を言われたが俺は当然のことをしたままでだ。

……問題はパーティーだ…流石に2人では辛いな。

「なあセツナ、あの人はどうだ？」

「俺は誰でもいい」

「わかったよ、じゃあ声かけて来るな」

そう言いキリトは赤いフードを被って1人でいる人物に声をかけに行った

「なあアンタ、良かったら俺たちとパーティー組まないか？俺とあそこに座ってるセツナってやつなんだけどさ、あと1人足りなくて」

「……好きにすれば」

キリトはその返事に少し腹を立てたようだがパーティーに誘って、赤いフードの人物もそれを承諾した。

名前は……Asuna…アスナ……女性か…？

「よし…みんなパーティー組めたね、じゃあ今日は解散！みんな明日のボス戦に備えてアイテムをしつかり揃えてゆつくり休むこと！」

ディアベルの言葉で皆広場から離れてく

「キリト、俺たちも行くぞ…明日のことについて宿で話そう」

「あ、ああ……でもコイツは……？」

「私のことは放っておいて貰って結構です。話し合いならあなたたち2人でどうぞ。」

「いや、そういうわけにはいかないよ。アンタはもう俺たちとパーティーだ、仲間なんだ。」

「………アンタって呼ばないで……」

「ん？」

「アンタって呼ばないで！私にはアスナって名前があります！」

「お、おう……よろしくな、俺はキリトだ。それでコイツは……」

「セツナだ、よろしく頼む」

その後俺たちは街に戻り明日の作戦を練り、アイテムを一式備えた。

まず一歩……これは俺が変わるための戦い……生きてここから出る……そのための最初の一歩だ……だから負けるわけにはいかない！

そう思い俺は眠りについた。

第五話 一歩―兆し―

朝、俺たちは昨日の広場に再び集まった。

キリトとアスナもよく眠れたようだな。

「セツナにアスナもおはよう！昨日はよく眠れたか？」

「当然だ……」

「これから死ぬかもしれないのに不思議とぐっすりと寝れたわ」

「よし！みんな集まったな！では行こう！」

それから俺達はボスの部屋の前まで1時間ほど歩き続けた。途中で出現したモンス
ターと戦ったが、俺たちの相手ではなかった。

戦闘中にアスナの剣捌きを見たが中々の腕前だった。使用している武器は細剣だか
ら手数で圧倒する戦闘スタイルだとは思っていたがまさかここまでとは……

俺はボス部屋の門を見つめる。

ここから先は命をかけた戦い……第1層のボス、イルファング・ザ・コボルト・ロード……情報ではHPが少なくなると武器を斧から曲刀のタルアールに持ち変え、攻撃パターンも変わるということだ……だがそれはβのときの話だ……すでにこのSAOはβとは大きくちがっている……

俺は右手に装着したGNソードを見ていると

「よし、皆……これからボス攻略に挑む！ 作戦は昨日言った通りに頼む！」

作戦はA班、B班、C班に分かれて行動する。俺達B班は取り巻きのルイン・コボルト・センチネルをA班のタンク隊に近づけさせないこと。

俺達が取り巻きの相手をしている間にタンク隊がイルファング・ザ・コボルト・ロードを倒すという作戦だ。C班は俺達が倒し損ねた取り巻きを倒す作業をすることになった。

「俺から言うことは1つ……勝とうぜ！」

ディアベルのその言葉を聞き、皆はおおっ！と声を張った。

ボス部屋に入ると情報通り、イルファング・ザ・コボルトロード（以下ロード）とその取り巻きにルインコボルト・センチネル（以下センチネル）がいる

そしてディアベルは大きく息を吸い

「全員突撃！」

「「「「うおおおおおおおおおおお!!」」」」

と叫び、それと同時にプレイヤー達はディアベルの一声でボス部屋に響くくらいの大声を出して突っ込んでいく。

「A班はそのまま、B班は取り巻きのルイン・コボルト・センチネルをタンク隊に近づけさせるな！」

ディアベルの指示に従い、俺達はB班センチネルに攻撃を開始した。

俺はGNソードをグリップ固定モードで展開して、近づいてきたセンチネルを攻撃した。

キリトのほうも大丈夫そうだな……

キリトはアスナとスイッチを繰り返して行ってテンポよくセンチネルを倒していった。

……パーティー3人はやはり止めるべきだったか……ソードスキルも満足に発動出来ない……

今更後悔しても始まらない……今はコイツ等を！

俺の周りを数体のセンチネルが囲んだ

「…俺の道を阻むな！」

「おい、アスナ…見てみるよセツナのやつ一人であの数のセンチネルを相手にしてるぞ…」

「助けに行かなきゃ！」

「やめとけ、巻き込まれるぞ…それに全然引けをとってない…大丈夫だろ、それより俺たちだ！セツナに負けてられないぞ！」

「う、うん！」

キリトとアスナもセンチネルを次々と倒していく、当然キリトもスゴイがアスナもだ、細剣の特徴である軽さを活かした攻撃、センチネルが次々に切り刻まれていく。

俺達を取り巻きセンチネルを全て倒しきった頃、A班はロードのHPを1/4までに減らしていた。

するとロードは武器を変えた。情報通りだとタルワールに変わるはずだ…

だが俺の見たのはまったくの別物、そうあれは……

「……………刀か……………」

「…あれは……………野太刀……………」

キリト曰くもつと上層に行くに出てくる武器らしい。

やはりβのときと違うか……………なら攻撃パターンも……………

「君たちは下がるんだ！……ここからは俺がやる」

考えていたうちにディアアベルがロードに突っ込んで行く、β時の情報通りなら横への大振りらしいが、やはり野太刀は違った。ジャンプし、その後すぐにディアアベルに突進して来たのだ。

「ダメだ！下がるんだ！」

俺とキリトは叫んだがもう手遅れだった、ロードの攻撃が直撃したディアアベルを大きく飛ばされた。

ロードの一撃はディアアベルのHPを0にするには十分な攻撃だった。

「「ディアアベル（さん）（はん）！」」

俺とキリトはディアアベルに駆け寄った。

「なぜあんな無茶を……」

ディアベルはキリトに視線を向け

「君なら……わかるだろ……?」

「もしかして……L A ボーナス狙いで……」

L A ボーナス、ラストアタックボーナスというものだ、ボスを倒す時、最後に攻撃した人物にレアなアイテムが入るといふ。

「…ディアベル、お前もβテスターか?」

「そうなのか!?!」

小さくコクリと頷く

「みんなを……助けて……やって……く……れ……」

そう言い残すと小さなポリゴン状の光の粒になって消えていった……

「こんな人の死に方じゃない……」

「ああそうだ、こんなの間違ってる、この歪みは俺が正す!」

アスナも合流して

「サポートは私に任せて、ディアベルさんの敵をとりましょ！」

一方周りは指揮官を失ったことで混乱に陥っていた。

そんな…ディアベルはん……………

もうダメだ……………

このままみんなやられるんだ……………

無理もない…優秀な指揮官を失ったんだ…

「ディアベルの犠牲を無駄にしないためにも絶対に倒すぞ！貴様らも協力しろ！俺が囮になって奴の注意を引く、その隙に一齐に叩け！」

俺は皆に向けて叫び走り出す。

「アスナ、俺たちも行くぞ！」

「うん！」

「あのガキい……タンク隊行くで!!」

「「おう!!」」

ロードがキリトたちに気付き攻撃をしようとするが俺がロードの足を数回切りつけ注意をこちらに向ける。

「貴様の相手はこの俺だ!」

俺は切りつけては全速力で走る、切りつけては走る、その繰り返しをずっと行っていた。

周りの協力もありロードのHPは赤まで減っていた。

「後少しだ! 踏ん張れ!」

キリトが叫んだ瞬間、ロードは標的を俺からキリトに変更した。次の一瞬、ロードの攻撃がキリトに直撃して吹っ飛ばされる、しかも吹っ飛ばされた先にアスナがいてアスナも巻き込まれた。

2人のHPは半分以下まで減っていて、しかもアスナに至っては気を失っている。

「キリト! アスナ!」

その隙を逃すまいとロードも2人に止めを誘うと野太刀を振り下ろす。

ダメだ! 間に合わない……!!

「なぜ俺まで……………」

「よくわかんないけど2人で同時攻撃したからじゃないのか?……………コートオブミッドナイト……」

俺のほうはコートオブアヴァランチ……………雪崩……………

LAボーナスの確認をしてたら先程のエイグルが来た。それと同時にアスナも目を覚ました。

「お前らすげえ剣技じゃねえか! congratulations!」

「キリトくん……………セツナくん……………勝ったんだね、おめでとう!」

「なんでや!!」

俺たちが談笑しているとキバオウの叫び声が聞こえた。

「なんでディアベルはんを見殺しにしたんや……！」

「見殺し……？」

「そうや、あんたら知ってたんやろ！あのボスが使った武器のことを！」

キバオウが俺とキリトに向かい、そう言い放った。

俺とキリトが大声で下がるように声を出したことをキバオウは見逃していなかったのだ。そして遂には先程歓声を上げてたやつらもキバオウの言葉に乗っかって野次を飛ばしてきた。

「あいつら多分元βテスターだ！ボスが使ってた武器を知って何も言わなかったんだ！ラストアタックボーンナスがほしいがために！汚いぞβテスター！他にもいるんだろ、出てこいよ！」

そんな野次があちこちで飛び交った。

コイツらは……

俺はコイツらの言葉に怒り、叫びだそうとしたが……

「……ククク……ハハハハハハハハ……！」

「な、何がおかしいんやー！」

キリトがいきなり笑いだした。

「俺が元βテスター？たしかにそうだが俺をあんな素人同然の奴等と一緒にしないでほしいな。それにセツナがβテスターだって？笑わせるな、こんな素人」

「……………」

「な、なんやて!？」

「あいつらもコイツもレベリングのやり方もわからない素人だ。今のあんたの方がまだマシさ、それに俺はβテストの時、誰も到達することのできなかつた層まで辿り着いた。だからさっきの野太刀だつて知っている。他にも知ってるぜ？情報屋じゃ話にならないくらい情報の情報をな。」

キリト……………お前は……………

俺にはわかった、キリトは俺や他のβテスターを守るために…βテスター、新規の奴ら…共通の敵に……………人悪役になるつもりなんだな……………だがその道は茨の道だ……………ただのソロプレイヤーならまだマシだ…だがお前はこの先ずつと悪役のレッテルを貼られたままソロプレイを続けることになるんだぞ…？

「なんなんそら…もはやβテスターどころの話じゃないやんけ…！チートやチーターやろそれ！」

「βテスターでチーターだからビーターだ！」

「ビーター…いいなそれ、じゃあ今日から俺は…」

キリトは先程ドロップしたコートオブミッドナイトを装備し、

「ビーターだ…！」

といい、キリトはそのまま次の層に向かう階段を登つてく途中キリトはこちらを向いて俺達にしか聞こえない声で言った。

「……セツナ、アスナ、いままでありがとな。」

キリトはそう言って手慣れた手つきでメニューを開き、パーティーから脱退したのを確認したらそのまま先に進んで行った。

「……………」

「キリトくん!!」

キリトはそのまま一度も振り向かず二層へと行ってしまった。

第六話 遭遇―はじまり―

キリトのビーター宣言からもう一年が経った。

結局あの後アスナともパーティーを解散し、俺は絶賛ソロプレイヤー中というわけだ。

攻略のほうは49層、大体半分まで来た。だがここから先はモンスターの質も変わってくるはずだ……………

俺は今は28層の洞窟でこの前手に入れた武器の熟練度上げをしていた。

その武器というのは47層のLAボーナスで手に入れたダガー状の短剣2本、刀身の長い刀2本だ。この武器はアルゴ曰く4本セットらしい……………なぜ俺はこんな武器ばかり……………ちなみにGNソードは+20まで強化した、通常の武器は出来ても+10までらしいがやはりGNソードは特別らしい。

片手剣の熟練度は620

短剣の熟練度は483

刀の熟練度は528

なかなか頑張ったと俺は自負してる。だが実践で使うには最低でも550は欲しい

と知っている。雑魚ばかり狩っていてもなかなか上がらないものだ、街に帰って大型モンスタークエストでも探してみるか……

そう思い洞窟の入口まで引き返そうとしていると

「きゃあああああ！」

「今のは悲鳴……あつちか！」

女性プレイヤーのものらしき悲鳴が聞こえて来たので、悲鳴の聞こえたほうに走って向かう

「ハ、来ないで！」

悲鳴の主は4体のコボルド・プライムに囲まれていた。

コボルド・プライムというのはコボルド・センチネルよりふた周りくらい大きいコボルド系のモンスターだ。……俺は誰に説明してるんだ……？

俺は短剣2本をコボルド・プライムの急所に正確に投擲スキル使用し、2体倒す。残りの2体は2本の刀を使いまっぴらにする。

「……………怪我はないか？」

刀を鞘にしまい、短剣を肩に付ける。

「はい……ありがとうございます。」

「お前はなぜこんなところに……しかも一人で……？」

「素材を集めて……」

「素材？」

「はい、私マスターメイサーを目指してるんですよ。そのために必要で……」

「だからといって一人でこの洞窟は危険だ、パーティーメンバーとは一緒ではないのか？」

「パーティー……組んでないので……」

「……そうか、俺と同じだな……どちらにせよここから先は危険だ。素材集めなら俺も手伝うか？」

「いいんですか？えくと……」

「セツナだ、それと敬語も結構だ。多分年齢は近いと思うしな。」

「あ、ありがとう。あたしはリズベット、よろしくねセツナ！」

「よろしく頼むリズベット」

「これが俺とリズベットの出会いだった……」

しばらく洞窟の中を歩きリズベットの素材集めを手伝っていた。

集めている途中いろんな話を聞いた、最近できた友達に髪の色を無理矢理ピンク色にされたり、髪型などをいいように弄られた、などという話を聞いた。∴人の髪を無理矢理弄るなんてひどいやつだ。

「セツナ、アンタなんで剣を5本もオブジェクト化してるの？重たくない？」

「常にオブジェクト化しているのはもし武器を落とした時すぐに反応出来るようにだ、それに重さも特に感じない。」

「短剣2本に刀2本？あと右手のそれは片手剣か何かかしら？珍しい形の武器ね。」

「これは第1層で手に入れたんだ。」

「え？第1層からずつと使ってるの!?アンタたしか攻略組よね？」

「メインで使ってる武器はコイツだな。」

「短剣と刀は？」

「この前第47層のLAボーナスで手に入れたばかりだからな、まだ熟練度が足りないんだ。それに攻撃力はこのGNソードが一番高い、それにやはり慣れとか使い勝手がいいいな。」

「ふーん、ちよつと見せて貰ってもいいかしら？」

「わかった。」

GNソードを外しリズベットに渡す。

「ちよつと重いわね、アンタずつとこれを右手に付けてたの？」

リズベットが重そうに持ち上げ武器のステータスを開く。

「……………何よこれ…こんな武器見たことないわ！+20？普通強化出来ても+10までよ。」

「とある情報屋によるとMAXまで強化すれば魔剣クラスまで成長するらしい」

「へえ…そうな凄い武器なんだ…はい」

GNソードを返してもらい再び腕に装着する。

「あーやつと見つけた！」

リズベットが急に叫ぶ、どうやら目的のものが見つかったらしい

「よし……………後ひとつね、とりあえず今日は街に帰りましょ？」

とりあえず…？

「言わなかった？マスターメイサーになるには鍛冶熟練度900以上必要なの、あと業物以上の剣をふた振り作れば900越えるのよ。でも業物以上だから素材も安いものじゃいけないってわけ！」

「……………わかった、俺に協力して欲しいということだな？」

「えへへへ、そういうことよ。」

「…しばらく攻略も進まないだらろからな…」

「ありがとう！セツナ！」

こうして俺はリズベットの素材集めを手伝うことになった。

第七話 温度―温もり―

昨日、リズベットの素材集めを手伝うと約束をした。

今俺は43層カチャックの転移ゲート前にいる、リズベットとの集合場所がここだからである。

遅い……集合時間はもう過ぎている……

と思っていると転移ゲートが光り、中からリズベットが出てくる。

「ごめんごめん！準備に手間取っちゃって。」

「……気になるな、俺も今さっき来たところだ。時間が惜しい、行くぞ。」

「あ、待つてよー！」

俺とリズベットは街を出てフィールドの奥地に来ていた。

今は12月……この層のフィールドも現在は雪が積もっている。

少し寒いな……

「リズベット、寒くないか？」

「え？あたしは大丈夫だけど。」

「そうか、なら良かった。……素材というのはどうやって手に入るんだ？」

「たしか大型モンスターからのドロップだったかしら……？ちなみに鉱石よ。」

大型モンスターか……昨日リズベットと別れたあとまたフィールドに戻り刀と短剣の熟練度を上げていたらステータス欄に不思議な項目が追加されてた。

それを試すにはいい機会だな。

フィールドにある雪山まで来た、リズベットの話によるとその大型モンスターはここに出現するようだ。

雪山を登ってしばらくするとモンスターの雄叫びらしき声が聞こえてきた。

「そろそろ近いな、戦闘になったらどこかに隠れてろ。」

「う、うん」

声のしたほうにゆっくりと近づくと声の主の招待が明らかになった。

「ドラゴン系の大型モンスター……しかも羽つきか……リズベット、隠れてろ。」

「う、うん！セツナ、頑張つて！」

「……………」

リズベットが物陰に隠れたのを確認すると俺はドラゴンに向かって走り出す。

ドラゴンも俺に気付きコチラに身体を向ける、背中に氷山のようなものを背負って、近くで見ると圧巻な大きさだ…。

ドラゴンがブレス攻撃をしてくる。

「甘いっ!」

俺はGNソードのシールド部分を使ってブレス攻撃を防ぐ。

「ここは!俺の距離だっ!」

ブレス攻撃が止んだと同時にドラゴンの足元まで距離を詰め片手剣ソードスキル(シャープネイル)を放つ。

「すげえ……」

リズベットが物陰から少し出てくると、ドラゴンが標的を変え、ブレス攻撃の予備動作をとる。

「何故出てくる!隠れてろと言っただろ!」

「(ズ)めん…」

「くそっ!」

ドラゴンがブレス攻撃を放つ、ブレス攻撃がリズベットに届く前に俺はリズベットの元に行く。ブレス攻撃から庇うようにして逃げるがブレス攻撃の余波で俺とリズベットは空中に放り出させる。

「リズベット！俺に掴まれ！はやく！」

「う、うんー！」

空中で身動きが上手く取れないがなんとか俺の手を掴む。リズベットをだき寄せ落下時に俺が下になるような体制をとる。

「う……うう……セツナ？」

「……………」

「セツナ！セツナ！」

「……………くっ……………良かった、お互い生きてたな……これを飲んでおけ」

回復ポーションをリズベットに渡す。

俺も回復ポーションを飲みながら現状を確認する……………どうやら現状は最悪のようだ。

俺たちが落ちた場所は大きな縦穴だ、地上までは数十メートルはあるだろう……………

「セツナ……あの……………助けてくれて……ありがとね……………？」

「礼を言うのはまだはやい……どうやってここから抜け出すか……………」

「転移すればいいじゃない。テイン、カチャック！」

転移結晶が反応しない。

「そんな……」

「結晶が使えないということは他の脱出方法があるはずだ……」

「なんでそんなこと言えるのよ、落ちた人が100%死ぬ縦穴かもしれないじゃない！」

「なるほど……」

「ちよつと！少しは元気づけなさいよ！」

「すまない……俺に1つ提案がある。」

「この壁を登って俺が上に行く、それで上からロープを下ろすからそれに捕まって登っ

ていこ。」

「この壁、登れるの？」

「やってみなければわからない……！」

少し助走をつけて壁に向かって走り出し、壁を登り始める。

「うっそくん……」

1/4くらい登ると足を滑り、下に落ちてしまう。

「……やはり無理だったか、いや助走をもっとつけければ……」

「そんなわけね」

いろいろ試行錯誤してるともう夜になってしまった。

俺たちはお互いに寝袋に入って寝ることにした。

「結局夜になっちやったわね」

「ああ……」

「でもこんな体験、現実じゃありえないわね……昨日会ったばかりの人と隣で寝るなんて」

「そうだな……こんな体験俺も初めてだ」

「それに壁とか走っちゃうんだから」

「俺も走れるとは思わなかった」

「フフフ、何それ……ねえセツナ、聞きたいことがあるんだけど……」

「なんだ？」

「昨日の洞窟でとか、今日とか……なんで私を助けたの？下手したらアンタが死ぬかもしれないなかったのに……」

「……また俺の目の前で人が死ぬくらいなら俺が死んだほうがずっといい……それがりズベツトみたいなのなら尚更だ……」

「馬鹿だね……普通そんな理由でこんなことしないわよ……」

「ねえセツナ……手、握ってくれる？」

「……………」

リズベットが出してきた手を俺は握った。リズベットの手は少し震えていたが俺が握ると震えが収まっていった。

「……セツナの手、暖かい……私もセツナも、仮想世界のデータなのに……」

「リズベット……」

リズベットは優しく微笑むとそのまま目を瞑る。

……………よくわからないがこの時俺はこの笑顔を守ってやりたい。そう思った

……………

次の日の朝、俺はリズベットより先に起きた。

そういえば縦穴に落ちたんだったな。

周りを見る……………アレは？穴の中に何か光るものが…

俺は近づく。それが目的のものと気付くのに時間はかからなかった。

「ん〜…………セツナ…………？」

リズベットが起きる、何故か俺のほうを見て顔が赤くなっていたな。

「なにしてるの？」

「……………これだ。」

「これって…………」

持っていた鉱石をリズベットに見せるとリズベットは鉱石に触り確認した。

「ああ、俺たちの目的のものだ。」

「でもモンスターからのドロップじゃ……………」

「……………ある意味ドロップだったというわけだな。」

「ある意味？」

「簡単にいうと糞だ。」

「ええ!?!なんでドラゴンのふ……………そんなものがここに？」

「それはここが……………」

グオオオオオ!

俺が言い切る前に上からドラゴンが急降下してくる。

「……………ドラゴンの巣だからだ。」

刀を右で持ち、左でリズベットを担ぐ。

「ちよっ!セツナ!」

「しつかりと捕まってる。」

ドラゴンは俺たちに気付き、足で攻撃してこようとしていた。

俺はリズベットを担いだまんま壁を走り、ドラゴンの背中に降り、刀をドラゴンの背中にさす。

……………
ドラゴンは痛みによって急上昇し、やっと穴から抜けられたと思ったら今度は空か

そう思ったのは束の間、空中に放り出される。

「きゃあああああ!」

「くっ!」

俺とリズベットは空中でなんとか整える。

「リズベット……………」

何故こんなことをしたのか自分でもよくわからない。気付いたらリズベットに向かつて手を伸ばしていたのであった。

それをリズベットは握り

「ねえ！セツナー！私ねー！セツナのこと好きー！」

「すまない！よく聞こえない！何と言った？」

「えへへへ！なんでもなーい！あはははははは！」

リズベットが急に抱きついて来た、俺は一瞬困惑したがすぐに現実に戻る。

このままでは2人とも地面に叩きつけられる！

俺は転移結晶を取り出し

「ティーン！カチャック！」

俺とリズベットは光に包まれ、気付いたら街まで戻っていた。

数日後、俺はリズベットが仮拠点としている層に呼ばれたのでリズベットの部屋の前まで来ていた。

「リズベット、入るぞ?」

「どうぞ〜!」

「今日はどうした?また素材集めか?」

「違うわよ!あの……その……おかげさまで業物以上の片手剣、2本出来たのよ……それでお礼として渡したいものが……」

何か顔を赤くしてもじもじしてたが大丈夫だろうか?

「お礼?」

「うん……アンタ前に片手剣があと2本必要って言ってたでしょ?だからこれ!」

そう言っつてリズベットがオブジェクト化したのは2本の片手剣、お互いに刀身の長さが違うのが特徴だろう。

「……すまない、ありがたく使わせて貰う。」

リズベットから剣を受け取る

「名前はそのままんだけどロングブレイドとショートブレイドっていうの……あと、これ!」

リズベットが手に持っていたのは剣なんかではなく、赤いマフラーであった。

それは決して良い出来とは言えない、だが彼女が一生懸命編んだということにはわかる。

「アンタって寒がりじゃない？だからこれ！……あたし……裁縫スキルは全然上げてなかつたから……上手に出来なかつたけど……」

「……ありがとう。嬉しいよ……」

手に持っていた剣を腰に付け、マフラーを首に巻く。

「あつたかい……本当にありがとう」

俺は笑顔で答えるとリズベツトは顔を真っ赤にしていた。

「あと、最後にお願ひがあるんだけど……？」

「なんだ？」

「これから毎日、あたしにセツナの剣の手入れをさせて！」

「……俺は別に構わないが、お前はいいのか？7本もあるんだぞ？」

「いいの！私がやりたいからお願ひしてるの！だから大丈夫！」

「……それならよろしく頼む。」

「うん!!」

第八話 雪崩―アヴァランチ―

俺は今、53層の広場で攻略会議が行われるそうなのでそこに来ている。

「おーい！セツナー！」

「キリトか……」

俺のほうに走ってきた真っ黒なやつはキリト、攻略組でもトップの実力者だ。

「それにしてもお前しばらく見なかつたけど何かあったのか？」

「知り合いが48層のリンダースに武器店を開くというからその資金集めなどを手伝っていた。」

「ふ〜ん……」

キリトは俺の顔をジロジロ見ている。

「なんだ……？俺の顔に何かついてるのか？」

「いや、なんかセツナの表情が豊かになったなーって」

「そんなに変わったか？」

「うん、変わったよ……それよりお前、随分とゴテゴテした装備になってるな〜そんな装備じゃシステムエラーでソードスキル発動出来ないんじゃないのか？」

「ああ、俺もそうだと思っただが実は……………」

俺が言いかけたときに広場の中心にある人物が現れた。その人物は緑の髪に紫の目とこの集団の中でもかなり目立っていた。

「では今から攻略会議を始めよう、今回の指揮は血盟騎士団団長リボンズが務めさせて貰うよ。」

血盟騎士団、正式名称はKnights of the Blood、通称〈KOB〉SAO最強の男である『聖騎士ヒースクリフ』が作り、育て上げたSAO最強ギルド。構成メンバーは50人程度と中規模であるが、全てが攻略組のハイレベル剣士である。

ユニフォームは白と赤で染められた騎士服とマントだ。

だが現在の規模まで大きくなったのはもう一人の立役者がいる。そう、リボンズだ。彼の参加によって血盟騎士団は現在の規模まで拡大した。

リボンズはどちらかというと参謀型だ、あまり前線に出てこない。だがリボンズの実力は本物だ、以前の攻略にリボンズがきたときは片手剣一本でボスのゲージを一人で3本ぶん減らしたという噂もある……………それに彼の参加した攻略では死者は絶対に出ない。つまりリボンズはヒースクリフに引けをとらない実力と頭脳、名声を手に入れてるといふことだ。

「今回のボスの名前はメガトロン、今まで戦ってきた人型ボスの中では最強クラスといっても過言ではない。先遣隊の情報では左手に巨大な槍、右手は恐竜の頭になっている。強力なブレス攻撃をしてくるらしい。」

攻略会議は続いた。

「ではみんな、明日の攻略頑張ろう。」

おおー……！

攻略会議が終わるとキリトが

「どうだ？このあと飯でも食いに行かないか？43層にうまいところ見つけたんだよ」

「ああ、行くか」

「ちよつと待つてくれないか？君たちはセツナとキリトだよね？」

「はい、そうですか？」

「ああ、俺がセツナだ。」

「明日の攻略、お互いに頑張ろうね」

「あ、はい…頑張ります！」

「……………キリト、行くなら行くぞ。」

「あ！待てよ!!」

「本当に期待してるよ、セツナ…それに晶彦のお気に入りのキリトくん……………」

43層

「なんでリボンズさんのこと邪険にしてるんだ？いい人じゃないか」

「……………なんとなくだが気に食わない……………」

「なんだそりや……………」

「俺にもよくわからない、もしかして前世で敵同士だったのかもな。」

「はっははは、セツナも冗談言えるようになったんだな」

「……………どういう意味だ……………」

その後俺たちは43層で食事をとり、各々の拠点としてる層に戻って明日の攻略に備

えた。

ちなみに俺の拠点は48層だ。

俺はリズベットの店の資金集めを手伝い、それでも多少足りない分は俺が払った。

そのお礼ということで二階に俺の部屋も作って貰った。

半強制的に住まされることになったのだが助かる面もあった。今までは最前線の層に宿を借りていたのだが、ここに住むことになり無駄な宿題を払わなくてすむ。

「戻ったぞ。」

「あ、お帰り〜。」

「あら、セツナくん」

「アスナ、また来てたのか…」

「別にいいじゃない、セツナくんの家じゃないんだから……」

「俺の家でもある。」

「まあまあ、二人とも落ち着いて！それより攻略会議のほうはどうだったの？」

「問題ない、予定通り明日決行だ。」

「今回の指揮はリボンズ団長だっけ？」

「ああ……ところでお前はなぜ今回の攻略に参加しない？」

「団長が今回ののはリボンズに任せとけて言ってたから」

「そうか……」

俺は装備を全て外しリズベットに渡す。

「明日の朝までに頼む、俺は他の準備をしてそのあと寝る。」

「そう言い残し俺は店の二階に行く」

「あ、ちよつと！」

「リズあんな無愛想なやつはどこがいいのよ……」

「アンタには一生わかんないわよ。」

俺は自室でアイテムの整理をし終わりベッドに横になり眠る。

次の日の朝

「セツナ、朝よ、剣のほうも終わってるわよ」

「……わかった……今起きる……」

「朝ごはんも出来てるから早く来てね」

その後リズベットと一緒に朝食を取り剣を受け取り出かけようとする。

「…じゃあ行ってくる。」

「セツナ、気をつけてね。」

「……ああ、必ず生きて帰ってくるよ。」

そう言っただけで俺は攻略に向かった。

そして場所は変わってボス部屋の前

「じゃあ今回も死者を出さずクリアするよ。」

おおおおー！！！！

リボンズがボス部屋の扉を開けるとボスの姿が見えてくる。

「情報通りか……キリト行くぞ！」

「でもお前、その装備じゃソードスキルは……」

「大丈夫だ、問題ない！」

俺はロングブレイドとショートブレイドを抜きボスに向かって突っ込む。

「この僕に命令するなんて君もなかなかやるね」

「血盟騎士団の団長さんにお褒めいただき光栄ですよ」

キリトは皮肉気味に言う。

俺たちは切りつけては逃げそのあいだに他のプレイヤーが攻撃するという動きを何十回も繰り返し返していると順調にメガトロンのHPをあとゲージ一本まで減らすことが出来た。

「気をつけろ、ここから先どう動くのかわからなくなる！ここからは僕たちも参戦だ！他のプレイヤーは今までより防御を意識して攻撃に参加すること！」

その合図と同時に俺たち3人はボスに向かって走り出す。

するとボスは今まで使わなかった右手の恐竜の顔を俺に向けブレスを放ってきた。

「くっ……！」

俺は咄嗟にガードしたがそれでもHPの1/3は削られてしまった。

「セツナ！回復を！」

「問題ない！このまま続ける。」

ボスを見るとHPはあと一撃大きなソードスキルを喰らわせれば勝てるというところまで減った。するとボスの見た目に変化が起きた。全身が金属のようなものに覆われ

たのだ。

「リボンズ団長！我々の攻撃が効きません！」

「一点に集中して攻撃をしろ！装甲を貫くんのだ！」

プレイヤーたちはみんな同じ場所に向かいソードスキルを使って攻撃をしている。だがメガトロンは槍でプレイヤーたちに攻撃をしてくる、当然プレイヤーたちは避けることも出来ず大ダメージを負って気絶してしまう。メガトロンが止めをさそうともう一度槍で攻撃してくるが、間一髪のとこでキリトが槍を破壊する。

「リボンズさん、このままでは死者が出ます！一旦体制を整えて」

「くっ！ここまで来て！」

「いや、体制を整える必要はない……負傷者を下げ残ったものは俺の援護にまわしてくれ……」

「セツナ、お前……何を言って……」

「俺ならあの装甲を破れる。リボンズ、いいな？」

「仕方ない……。全プレイヤーにつぐ！負傷したものは後方にて治療を残ったものは全力でセツナの援護だ！」

「「「「はい！！」」」」」

「行くぞ………！」

俺はメガトロンのもとまで走っていき、片手剣の最高スキルへノヴァ・アセンションを右手のロングブレイドで放ち、最後、装甲にロングブレイドを突き刺す。

突き刺したすぐあとに左のショートブレイドでもへノヴァ・アセンションを放つと最後に同じように装甲に突き刺す。

合計20連撃、装甲にヒビが入る。

空いた左手で肩の短剣を取り短剣上位スキルへアクセル・レイドを放つと装甲が砕けメガトロンの表面が現れる。

俺はGNソードをグリップ固定モードで展開する。

「これが俺の〈セブンスソード〉……………これが俺の！力だあああああああ！」

GNソードで片手剣突進系スキルへヴォーパル・ストライクを放つ、メガトロンの表面に直撃するとメガトロンは呻き声をあげポリゴン状になり消失する。

Congratulations!と表示されボス戦クリアのBGMが流れる

「はあ……………はあ……………はあ……………」

「セツナ、お前すごいな！なんだよあれ、スキル硬直無しで発動してたんじゃないのか？
そもそもその装備でなんで発動出来るんだ？」

「……………ユニークスキルかい？」

「はあ…はあ…ああ、そうだ…」

「ユニークスキルってあれだよな…ヒースクリフさんとかと同じ」

「俺のユニークスキルの名前はヘセブンスword、刀、短剣、片手剣のソードスキルを組み合わせて使うことが出来るセツナのユニークスキルだ。本来、刀は片手で持つとソードスキルが発動出来ないが俺なら可能だ。例えば両手に片手剣を持つと右と左、両方も片手剣のソードスキルが発動可能であるということだ。ただし連続発動出来る回数は4回、それをすぎると通常よりも長いスキル硬直が訪れるがな。」

「なんか…すごいな……………」

「俺も気付いたのは数ヶ月前だ……………」

ロングブレイドとショートブレイドを拾い腰のベルトにかける。

「キリト、リボンス、あとは頼んだ。俺は疲れたので先に帰らせて貰う。」

「お疲れ。また会おうな」

俺は転移結晶で帰った。

「ヘセブンスword……………やはり君は面白いな、刹那……………」

その後俺は《雪崩》と呼称されるようになった。

キャラクター&武器紹介

セツナ：本名は聖永 刹那、今作の主人公。2008年4月7日誕生。双子の妹がいる。

13歳のとき暴走車両との事故、刹那と妹は助かったが目の前で両親を亡くす。現在は妹と2人で暮らしている。

そしてデスゲームに巻き込まれる…

現在は攻略組の中でもトップ5の中に数えられるほどの実力者。

そしてリズベットと同棲をしている、彼自身もリズベットに好きという感情はあるのだがまだそれを彼は自覚できていない。

格好は1層のLAボーンラスで手に入れたコートオブヴァランチをいつも着用している。そしてリズベットに貰った赤いマフラーも睡眠と食事、風呂以外はいつもつけている。

(コートオブヴァランチのイメージはキリトのコートオブミッドナイトをCBの制服ver. 刹那カラーにしたもの。別の言い方をするなら、CB制服の上着の裾が伸びマ

ントのようになったもの)

セツナの武器

GNソード：第1層で手に入れた片手剣、無限に強化出来るという点と独特の形状により超々レア武器とされている。現在は+25まで強化されてる。

シラヌイ・ウンリュウ：セツナの使う2本の刀、シラヌイには炎が彫っており、ウンリュウには雲が彫ってある。腰の左右のベルトに装備してる

スサノオ・マスラオ：セツナの使う2本の短剣、この2つは特に見分けるポイントはない。セツナもたまに間違える。左右の肩に装備している。シラヌイ・ウンリュウと共に第47層のLAボーナスで手に入れたもの。

ロングブレイド・ショートブレイド：刀身の長さが違う2本の片手剣。リズベットの素材集めのお礼として貰った。その切れ味はGNソードにも負けていない。左右のベルトにかけている。

装備の状況としては右手にGNソード、両肩にスサノオ・マスラオ、腰にロングブレイド、ショートブレイド、シラヌイ・ウンリュウの4本をつけている。

ユニークスキルへセブンソード：文字通り7本の剣をえるようになるユニークスキル。普通は武器を複数装備しているとエラーが起きソードスキルが発動出来ない。だ

がへせブンスードは発動出来る。GNソード、ロングブレイド、ショートブレイドの片手剣ソードスキル、スサノオ、マスラオの短剣ソードスキル、シラヌイ、ウンリュウの刀ソードスキルを発動出来る。

しかも普通、刀は両手持ちではないと発動出来ないがこれも可能である。

最後に最大の特徴として上げられるのはそれらのスキルを最大4回までスキル硬直なしで連続して使えるという点だ、しかし4回連続でスキルを使ってしまった場合は使用後に4倍の時間、スキル硬直になる。

リボンズの説明はまた後ほど

第九話 紅蓮—TRANS—AM—

俺は数日前から休暇を取らされていた。理由は働きすぎということらしい。

一刻でもはやく攻略を終え、現実世界に帰りたいというのに……

「ちよつと！何してくれんのよ！」

「すまない、まさか当てたほうの剣が折れるなんて……」

「何よ！あたしの剣がやわつちいでも言いたいの!？」

昼寝をしていたらなにやら下が騒がしいので目が覚める。

何事かと思いい下に行ってみると

「リズベツト、何かあったのか？」

「ちよつと聞きてよセツナ！コイツがね！」

「ん？セツナ……？ええっ!？セツナ!？」

「…………お前か……」

「何？2人とも知り合いなもの？」

「ああ、コイツが前に話したことのある『黒の剣士』キリトだ。」

「ああ〜！あの人ね！」

「おいセツナ、なんでお前がここにいるんだよ！」

「ここは俺の家だ。」

「え？でもここってリズベット武具店じゃ……もしかして同棲してるのか？」

「そういうことになるわね。………つてそんなことよりアンタ〜！私の剣どうしてくれるのよ！」

「悪かったって！ごめんな。」

「謝ったって折れた剣は直らないわよ！」

俺はアイテムストレージを開いて〈クリスタライトインゴット〉をオブジェクト化してリズベットに渡す。

「これでキリトに武器を作ってやってくれ、コイツの戦力アップは攻略組全体の戦力アップにも繋がる。折れた剣のぶんは俺がなんとかする。それで勘弁してやってほしい。」

「これどうしたんだよ……？」

「この前ドラゴンを倒したらたまたまドロップしたんだな。」

「……セツナがそこまで言うならいいわよ、許してあげるわ。じゃあ剣打ってくるわ

ね。」

そう言つてリズベツトは鍛冶場に向かった。

「ごめんなセツナ」

「問題ない。」

「それよりいつ頃からリズと同棲してるんだ？」

「53層攻略の前からだ。」

「結構前なんだな、それよりもお前ら付き合ってるのか？」

「付き合う？なんだそれは？」

「いやお互いに好きあつてさあ………ってじゃあなんで同棲してるんだ？」

「いろいろ手伝つていたらお礼と言つて俺の部屋も作ってくれたんだ。」

「へえ〜（リズのほうは絶対セツナのこと好きだろうけど……セツナって鈍感なのか……）」

キリトの剣が出来るまで俺は色んな話を聞いた。以前ビーストテイマーの少女を助けたことやアスナと一緒に圏内PKの事件を解決したこと……あとは殺人ギルド笑う棺桶の近状についてもだ。

しばらくするとリズベツトが水色の剣を持ち鍛冶場から出てくる。

「はい、出来たわよ。名前はダークリパルサー、私の最高傑作ね」

リズベットはキリトにダークリパルサーを渡す。

「サンキュー、リズ！重くていい剣だ。」

「はいはい、じゃあその剣で攻略頑張ってね」

「キリトお前エリユシデータもあるのにどうして……？」

「……んんー……お前ならいいか……実はな、俺……」

キリトが何かを言いかけると武具店の入口が勢いよく開けられる。

「リズ！今セツナくんいる!？」

アスナが大急ぎで入ってきたのだ。

「アスナ!?!どうしたのそんなに急いで!」

「リズ、セツナくんは!？」

「え!?!ちよ!アスナ落ち着いて!」

「俺はここにいます。」

「アスナ……どうしたんだよ……？」

「セツナくん……あとキリトくんもいたのね、良かった手間が省けるわ。」

「何かあったのか？」

「とりあえず聖龍連合の本部まで行くわよ、詳しい話はそこから。ごめんねリズ、セツナ

くん借りるわよ」

「う、うん……」

「リズベツト、少し行ってくる。何かあったらメッセージ送る。」

「おい！アスナ！セツナ！待てよ！」

――――
俺たちはアスナに聖竜連合の本部に連れてこられた。

道中に少しだけ説明を受けた、どうやら殺人ギルド笑う棺桶の掃討作戦を決行するらしい。

「よし、みんな集まったな。今回の指揮は聖竜連合のシユミレットが取らせてもらう。今から資料を配布するから目を通して欲しい。」

周りを見ると血盟騎士団、今回はリボンズも来てる。あとは聖竜連合、クライン率いる風林火山、それと俺やキリトを含めたソロプレイヤー達、合計50人弱のプレイヤーたちによる掃討作戦だ。

資料が手元に回ってきた。資料にはラフコフのリーダー『P o H』、幹部プレイヤーの『赤目のザザ』、『ジヨニー・ブラック』の情報が載っていた。

こいつらはキリトが言つてた十字の丘で出会つた奴等だろう

その情報を見てると、シユミットが

「笑う棺桶の本拠地が下層の洞窟だということがわかつた。」

ザワザワ……

資料には本拠地の場所が記されていた。

その場所は層の端で誰も探してなさそうな場所にあつた。

「道理で………」

「一ついいかな？」

「なんですか、リボンズさん？」

「この作戦の本質をまだ聞いていないのでね、これは捕縛するのか、それとも処分するのか……それをはっきりして欲しい。」

リボンズの言葉で再びざわつき始める

「極力は捕縛で………方が一抵抗してきた場合は各々の判断に従つて貰います。」

「わかつた。ありがとう」

「で、では決行は明日ココに一度集まり回廊結晶で洞窟前まで行く、他に質問は？」

「……ないようなので本日はここで解散！」

「なんかすごいことになっちゃったわね…」

「ああ、だがあいつらは……」

キリトとアスナが話している内容は良く分からないが2人とも戸惑っていた。

「キリト、アスナ、俺は帰る。リズベットも心配してるだろうからな。」

「うん、リズによるしくね。」

「セツナ、明日は頑張ろうな。」

「ああ…」

俺は48層に戻った。

「リズベット、戻ったぞ。」

「あ、おかえり！何だったの？」

「ああ、実はな……」

俺は明日のことをリズベットに説明した。

「……笑う棺桶って殺人ギルドで有名な……」

「ああ、そうだ。これ以上被害者を出さないように今ここで破壊しておく必要がある。……その際にお前の作った武器で人を殺してしまうかもしれない……そうしたらすまない……」

「それはいいわよ……でもセツナ……お願いだから死なないでね……?」

「大丈夫だ、俺は死なない……生きて未来を切り開くためにも……だから心配するな。」
「うん……」

もう日付も周りをいつもならとつくに寝てる時間だ。だがなぜだか眠れなかった。

「……もしかして俺が人を殺すかもしれないのか……この手で……そしたら母さんたちを殺したやつと同類だな……」

「セツナ……入っていい……?」

「ああ、構わない。」

「なんか眠れなくて……一緒に寝ていい?」

「俺も眠れなくてな、こちらからも頼む。」

リズベットが俺のベッドに入ってくる。

「こうして隣で寝るの久しぶりね」

「ああ……不思議だ、一人で居たらこんな風にすぐ落ち着くことは出来なかった……リズベットののおかげだ。」

「そんなことないわよ、人と一緒にいると落ち着くもんなのよ。」

「俺の場合はリズベットだからこんなにはやく落ち着けたんだ。」

「そ、そんな…恥ずかしいこと言わないでよ…」

「リズベット、いつも武器の整備だけじゃなく俺のことを気づかせてくれて助かる、ありがとう。」

「うう……あ、あたしもセツナにいつも元氣貰ってるんだ。それにこの世界で生きていこうと思つたきつかけもセツナだったし……ねえセツナ聞きたいことあるんだけど……？」

「すう……すう………」

「寝ちやつたか……死なないでね、大好きだよセツナ」

リズベットは寝ている俺のおでこにキスをした。だが俺が気付くことはなかった。

朝ごはんを食べ終え、いよいよ出発するときが来た。俺はいつものコートに着替え、

マフラーを巻き装備を整えた。

「もう…今は8月なんだからわざわざわざわざマフラー巻いてかなくてもいいのに。」

「これはリズベットの約束のマフラーだからな」

「約束？」

「ああ、『絶対に死なない』って約束だ。……じゃあ行ってくる。」

俺はリズベットの頭をポンポンとやって集合場所である聖竜連合本部まで向かった。

「お、来た来た！おいセツナ〜！」

クラインが俺を見つけて手を振ってきた、周りにはキリトとアスナもいる。

「このメンツが集まるのは久しぶりだな。」

「そうね、大体キリトくんが攻略サボっちゃうからね〜」

「おいおい、まだあの時のこと根に持ってんのか!？」

「別に何も言っていないけど〜？」

「あの時のこと？」

「お前さんは休暇中だったから知らねえのか、あのな……」

「クラインさんも余計なこと言わなくていいですっ!!」

みんなそんなに気が滅入ってるわけではなさそうだな、いや考えないようにしてるだ

「か……」

「みんな聞いてくれ！これから俺たちは回廊結晶で笑う棺桶の本拠地の洞窟前まで転移する！行くぞ！」

総勢50人弱のプレイヤーが笑う棺桶本拠地の洞窟前まで転移され、洞窟の中に入っていく。

「静かだな……」

「ああ……もしかして俺たちの奇襲に気付いてたのかもしれない。」

「嘘だろ？どつからバレるってんだよ!？」

「しっ！静かにしてろ」

クラインの言う通りバレる可能性は低い、だが俺たちの中にスパイがいたとしたら

……

洞窟の奥には大きな空間があった。これ以上先には進めない。

結局最後まで笑う棺桶のメンバーは出てこなかった。

「なんだよ、居ねえじゃねえか」

「シユミレットさん、ホントにここであつてたんですか？」

「間違いないはずなんだが……」

すると上からローブを被った集団がいきなり襲いかかってきた。油断していたプレイヤーは驚いたが、なんとか 応戦している。俺たちもそれに続くように、応戦する。

「出来るだけ殺さず、制圧するんだ！」

シユミレットの指示で次々と制圧していく。

—————

数十分戦っていると次々に笑う棺桶のメンバーが降参していく。だがまだ半分は残っている、それに……

「まだ幹部が出てきていないたちが出てきていない。」

俺がそう言った瞬間後ろからナイフが飛んでくる

「くつ！」

GNソードを展開して飛んできたナイフを叩き落とす。

「オイオイ！それを落としちゃうか、流石は『雪崩』さまだ。」

「ジョニーブラック、お前は、『雪崩』を、俺は、『黒の剣士』を、やる。」

「なら俺は血盟騎士団団長様というわけだ、おい！野郎ども！まだ終わりじゃねえよな
！It's show time!!!」

POH、赤目のザザ、ジョニーブラックの登場で士気が落ちていた笑う棺桶のメン
バーも活気を取り戻した。

「POH、僕の目の前に立つことは死にたいということなんだね？」

「またまたご冗談を……死ぬのは……テメエだ！」

POHはメイトチョッパーで切りかかってくる、だがリボンスは武器すら抜かないで
ひらりひらりと攻撃をかわしていく。

「はっははは！どうしたのかなPOH？君の力はそんなものなのかい？」

リボンスはまるでダンスを踊っているかのように、優雅に舞っている。

そしてそれは数分間、いや数十分にも感じ取れる時間続いていた。

「なぜだ！なぜ当たらねえ！」

Pohも実力だけなら攻略組トッププレイヤーにも劣らない。その剣戟を息一つあげずにリボンスはかわしつくしている。

「ふっふふ……そう言う物言いだから器量が小さいんだ」

そしてリボンスがついに動き出す。

右手に体術スキルの光が集中する。

そしてそのスキルでPohの持っているメイトチョッパーを弾き、そのまま彼の右手を切り落とした。

アスナとクラインたちは再び襲ってきた笑う棺桶のメンバーを捌くので精一杯だった。

「アスナ！クライン！」

「お前の、相手は、俺だ」

ザザが針剣で切りかかってくる。

「くっ……！」

キリトはエリユシデータでなんとか弾き切り返すが苦戦は必須だろう。

「ザザのやつ苦戦してんな、助けに行つてやるか。」

「さて！ 貴様の相手は俺だ！」

「雪崩……」

「はあああああ!!」

「へっ！ 威勢だけじゃ俺は倒せないぜ！」

GNソードで切りかかるが交わされてしまう、なぜだ、なぜ当たらない……いつもなら………いつもなら……？

「まさかお前、動揺してるな……へっ！ 殺す覚悟もねえのに！ 俺に挑むな！」

GNソードの横振りを後退して交わして、再び接近してくる。

「なにっ!? 俺が動揺だと？」

接近してきたジョニーブラックを迎撃しようと再びGNソードを降る。だがジョニーブラックはまたも簡単に避けて、麻痺ナイフを数本投げてくる。先程のように打ち落とせばよかったのだがザザの言ったように動揺してため避けようとしてしまい麻痺ナイフが何本か刺さり、倒れてしまう。

「くっ……ああっ!？」

「雪崩、お前らのことはいろいろ調べてあるんだ。お前どうやら48層のリンダースの鍛冶屋にお世話になってる女がいるらしいじゃねえか……」

「なん……………だ……………と……………?」

「ここが片付いたらお前だけ殺さず生かしてよお、48層に連れていってお前の目の前で殺してやるよ! くっははははははははははははははははははははははは!! 最高だろお? したらその後お前も後を追わせてやるからよ! くっくくくく…! 今から笑いが止まらないぜ!」

コ……………コイツ…

「さて…サザを助けに行くか2人でなら『黒の剣士』も楽勝だろ、『黒の剣士』を片付けたらPOHと3人がかりならあの団長さんもなんとかなるはずだしな。リボンズを倒したらこのみんな片付けてその後はお前の大切な人、みんなみんなお前の目の前で殺してやるよ……………クツクツク…」

「や……………めろ……………」

「クツクツク! クツハハハハハハ!」

「ここで、コイツが奴らの加勢に向かうとするならば…充分にそれは…可能だろう……………動け……………動いてくれ! 俺の身体!」

「じゃあな、約立たずの芋虫くん…一瞬にして全てを薙ぎ払う雪崩なんだろ? その状態で、出来るもんならやってみよ…クツハハハハハハ!」

奴は笑い声と共にキリトのほうへ向かって歩いていく。それと同時に、俺の頭の中で…みんなが…殺されていく映像が鮮明に流れる。

ドクン…

キリト！アスナ！クライン！リボンス……………リズツ！！

ドクン…

ここで、俺が……………倒れたら……………

ドクン…

みんな命が…消えていく……………

ドクンドクン…

「……………そんな……………そんな……………させるかああああああ！」

刹那俺の中で何かが弾けた。全身から意識が宙に浮いて、辺り全てを見渡せるようになったと同時に、怒りによって全身が熱く燃えている感覚にも襲われた。

そして

「ガツ……………!!」

瞬間的にGNソードでキリトのほうに向かっていったジョニーブラックの腕を切り落とした。

「な、なんでお前が!!お前はまだ麻痺しているはずではないのか…!!」

「俺は……………守る……………それを邪魔するなら…俺が貴様らを破壊する!」

「綺麗事言ってるんじゃないやねえぞ!このクソ野郎がア!!」

ジョニーブラックは後退と同時にナイフを大量に投げってくる。俺はそれを全て交わして彼を見据える

「いいのか……そんな近くで？」

「……………何を言ってる……」

「そこはもう……俺の距離だっ！」

一瞬で開いた距離を詰め、ジョニーブラックを胴体で真っ二つにする。

「ぐあああああ！」

「まだだ！」

GNソードを構え、周辺を縦横無尽に走り回り

「なんだあれ……セツナか？」

ザザをなんとか制圧したキリトがセツナを見て驚嘆の声をあげる

「あれは……あのスキルは……TRANS—AMか……あれを使えるのは革新者である僕だけ……まさか彼も……」

「はっ！流石のリボンズ様もあれには驚きか、どうだ自分のプロデュースしていたガキに驚かされた気分はよお……リボンズ・アルマ……」

P O Hが何かを言い切る前にリボンズの腕がP O Hの胸を貫く。

「お喋りが過ぎるよ……君はここで死んでいい……！」

「はははは……なら言つてやるぜ、あのガキはいつかためえをも食い尽くす……！」

そう薄ら笑いと共に言葉を残しポリゴン状になって消えた。

「……………君たちの大将は死んだ、残った幹部も投降したザザと今セツナに切り刻まれる。どうするまだ続けるかい？」

—————

俺は数分間、無心でジョニーブラックを切り刻んでいた。

「はあ……はあ……もう……辞めてくれ……お前の仲間には手を出さない……辞めてくれ！死にたくない！」

H P ゲージを赤にし、あと一撃加えれば死ぬ。そんな状態のジョニーブラックが命乞いをしてくる。この男は

「貴様はそう命乞いしてきたものを何人殺してきた！許すものか！貴様はこの世界の歪

みだ！その歪みは俺が破壊する！」

そう言い俺はGNソードをジョニーブラックの頭上から振り下ろす。

「ああ……………これで……………お前も…俺たちと同類だ……………」

ジョニーブラックはポリゴン状になり消失する。

「てめえ！よくもジョニーさんを！」

メンバーの1人が俺に斬りかかってくる。俺はそれをいち早く察知し、横に交わす。そして大振りをし、隙だらけだったその首元にGNソードを思いつきり突き刺した。

「ぐ……………ああ……………」

断末魔の声をあげることなくそいつはポリゴン状になって死んでいった。

「てめえ！」

「よくも！」

メンバーの怒りの矛先は俺に向いてきた。俺は自分の身を守るためにも必死に応戦した。

……………ここから先は地獄だった。

絶え間ない憎しみの連鎖。また殺して、さらに殺す。

それを繰り返しているうちに背負う十字架の重みはどんどん増えていく。

そしてセツナに殺意から剣を向けた者、怯えながらも剣を向けた者、そして終いには命乞いをしてきた者でさえ、その命は平等に、一瞬にして無に帰したのであった。そう、さながら『雪崩』のように

討伐作成は終わった。相手側の生き残りが投降をしてくれたおかげだった。

「俺は……いつたい……何人殺してしまったんだ……」

俺が震えている。頭が回らない。意識が朦朧としている中、血盟騎士団のメンバーに連れられたフードの男が近づいてきた。

「いつか、復讐をしてやる、覚えておけ、貴様を倒す、者の名を、俺の名は――」

「やめろ……もう、もう俺は………貴様らとは、関わりたくない……快樂のためだけに人を殺す……そんな奴らとは、関わりたくない……」

その男が名乗ろうとしたのを拒否した。なぜこんなことをしたのか……自分でもよくわからなかった。そんなことよりはやく帰って休みたい。今はそれだけだった。

俺は転移結晶を使いリズベットが待っているリンドースに戻った。

「……………戻った…ぞ…」

「セツナ!! 大丈夫!?! 怪我とかは?」

「……………特にない…ただ…」

「ただ…?」

「俺は…殺してしまった…:…たくさんの…:たくさんの人間をツ!!」

当然のことながら人を殺してしまった俺のカーソルはオレンジになっていた。

「……………すまない、俺みたいなやつと一緒にいると、お前に迷惑がかかる…:すまない、今日中に出ていくつもりだ…」

「何言ってるのよ! 迷惑なんかじゃないわよ!」

そう言うとりズベツトは俺のことは抱きしめてきた。

「迷惑なんかじゃないわよ…:…たとえあたしはセツナが人を殺してしまったら一緒にその罪を背負うわよ…:…だから安心して…:セツナは…:…1人じゃないわ…:…」

「あり…:…がとう…:…ありがとう…」

俺はりズベツトに抱かれたまま涙を流した…:

りズベツトと離れると言ったとき、心が痛かった。ジョニーブラックがりズベツトを殺すと言ったとき、とても腹が立った。そして今、抱きしめられて嬉しいと思った。

そしてわかった……これが好きという感情なのか……

第十話 告白—プロポーズ—

俺は目を覚ますと何も無い真つ暗な空間の中にいた。

ここは……どこだ……？俺は確か家で寝てたはずだが………ん？あれは！母さん！父さん！

俺の目の前には暴走車との事故で死んだ父さんと母さんがいた。

母さん、父さん……俺は俺は！

近づいて行く、一歩、また一歩と

目の前まで来たと思つたら次の瞬間、母さんと父さんの姿は消えていた。

母さん……？父さん……？どこ……？俺を……僕を……一人にしないで……！

次は視界が真つ暗になる。

また何かが見えたと思つたらそこには一人、誰かが立っていた。足元には何かがかつている。

何か……それはつい先程まで俺が探していた人物のバラバラになつた遺体であつた。

それに立っている人物にも見覚えがある。右腕に見慣れた片手剣を持ち、その先は血に濡れている。青いコートのようなものを着ており、赤いマフラーをつけているその男

の口元は笑っている。

う、嘘だ…母さん…父さん…お、俺が俺が…うわああああああ！
ピシヤリ、ピシヤリと後ろから不気味な足音が聞こえ俺の後ろから不気味な声が聞こえる。

お前も俺らと何も変わらねえ…同類なんだよ…

違う！俺は貴様らとは違う！

じゃあアイツは誰なんだ、お前じゃないのか…？

不気味な声は先程まで剣を持っていた男のことをさしているのだろう、その男は移動し、次々に殺していく、妹、キリト、アスナ、クライン…俺の仲間を…そして最後に向かった先には…

リズベット！ダメだ…辞めてくれ…これ以上…俺の目の前で仲間を…大切な人を…殺さないでくれ…

誰に言ってるんだ、あれはお前自身だろ…言ったじゃねえか、お前は俺たちと同類だ…

ち、違う…！俺は貴様らとは…！

そうこうしてるうちにその男はリズベットに向かい剣を振り上げる。

や、やめろおとおお！

バツ！

「はあ……はあ……ここは……」

再び目を覚ますとそこは見慣れた場所だった……

「……セツナ、大丈夫？なんか魔されてるみたいだったけど……」

「はあ……はあ……リズベツト……大丈夫だ、問題ない……」

「うん、それならよかったわ。朝ごはん出来てるからはやく食べちゃいなさいよ」
「わかった、すぐ行く。」

リズベツトは鼻歌を歌いながら部屋を出ていった。

「……夢か……そうだ、あれは夢だ……俺には関係ない。」

俺はそう思うが俺のオレンジカーソルがそれを認めない。

朝食をとり店の手伝いしているとリズベツトから呼ばれた。

呼ばれたので店先に出てみるとアスナとリボンズが来ていた。

「おはよう、セツナくん。」

「しつかりと眠れたかい？」

「まあまあだな……」

「セツナくん、このアイテムを使って。」

「これは……?」

「オレンジのカーソルをグリーンに戻すことの出来るアイテムさ、僕もそのおかげでホラこの通り。」

見るとリボンズのカーソルはグリーンに戻っていた。

「わかった、ありがとう。でもアスナはわかるがなぜお前まで。」

「見てみたいと思ってるね、君が罪を犯してまで守りたかったものを。あとこれ、ヒースクリフから君への手紙だ。呼んでおいてくれ。」

「そう言い残しリボンズは店から出ていく。俺はアイテムを使い、カーソルをグリーンに戻す。」

「へー、あの人が血盟騎士団のもう一人の団長様なんだ、強いのか?」

「強いというか……なんていうか……ヒースクリフ団長とはまた違う凄みがある人だから、あーでも強いことは強いよ!」

ヒースクリフ……奴からなぜ俺に手紙なんかが……

「アスナ、ちょっといいか？」

「セツナくんどうしたの？」

「ここではまずい、一旦外に。リズベットは気にせず商売を続けてくれ。行くぞアスナ。」

「ちよつと押さないでよ！」

「あ、うん……？」

――
俺はアスナを連れ店の外まで行く。

「何よ、リズに聞かれたら困ることもあるわけ？」

「ああ、聞かれたらまずい。アスナ、お前にしか聞けないことだ。真剣に答えてくれ。」

「な、何よ……？」

「どうやら俺はリズベットを好きになってしまったらしい……」

「……………はい？」

「リズベットを好きになってしまったらしい。」

「……………ええっ!? セツナくんが!? 自分から!？」

「ああ、俺からだ。」

「(よかったねリズム！両想いじゃない！)……それだけじゃないでしょ？」

「ああ……この気持ちはどうやって伝えたらいいんだ……？俺はこういうのよくわからないんだ。教えてくれ！」

「普通に言えばいいじゃない？……いい？SAOにはね……」

アスナが俺に耳打ちをしてきた。

「なに!?ほんとにそれでいいのか!?不安なんだが……」

「大丈夫よ、私が言ったことに間違いはない(はず)よ！」

「………わかった……信じよう、助かった。ありがとう。」

「頑張ってるね、応援してるから。」

「ああ！」

そう言って俺は家に戻る。

「戻ったぞ。」

「おかえりなさい、何話してたの？」

「今はまだ秘密だ。」

「ええ、教えてくれたっていいじゃない？」

「近いうちにそれも含めて話すつもりだ。だが今はダメだ。」

「むう……」

「少し出かけてくる。2時間くらいで帰ってくる。」

「は……行つてらつしや……」

少し不機嫌そうだがリズムベツトは俺を送り出してくれた。

俺は50層のアルゲートに来ていた。

「へい、いらつしやい。つてセツナか、今日は何売つてくれるんだ？」

「すまない、今日はそういう用件ではないんだ。」

「ここはエギルの開いてる半ぼったくりのような店だ。」

「じゃあどんな用件だよ？」

「エギル、お前はリアルだと既婚者らしいな。」

「どこからそんな情報を……」

「情報屋のアルゴからだ。」

「あいつか……」

「そこでお前に聞きたいことある。」

「なんだよ、答えられる範囲しか答えられねえぞ？」

「婚約指輪とはどうやって送ればいいんだ？」

「はあ？」

「婚約指輪だ。」

「いやいや知ってるがなんでお前がそんなこと……もしかしてあの武器屋の嬢ちゃんと……？」

「いいから答えろ。」

「はあ……へいへい、俺の場合は普通の指輪だ。値段なんか関係ねえ、気持ちがかもつてれば相手はそれで充分なのさ。」

「なるほど、助かった。」

「そういうアクセサリーはこの街の中心部にたくさん売ってるぜ。」

「行ってみるか、エギルありがとう。」

店を出て中心部のほうに向かうがこの街は迷路みたいになってるので多少迷った。

「へい、兄ちゃんいらっしやい！お、兄ちゃんってもしかして攻略組の『雪崩』さんかい？」

「……ああ」

「ラフコフ討伐でも大活躍だったそうじゃねえか、あんたがあのだのギルド壊滅させてくれたおかげで俺たちは安心して素材集めに行けるってもんよ！ほんとにありがとうな！」

「ああ、ところで指輪はあるか？」

「おう、ちよつと待ってな。」

店員はたくさんさんの指輪を見せてきたので俺は小さな宝石がところどころに目立たないように埋め込まれた指輪を見つける。

「これは……」

「兄ちゃんお目が高いね！その指輪に埋め込まれた宝石は光の当たる角度で色が変わるのさ。」

「そうなのか……じゃあこれを2つ頼む、値段は？」

「ホントなら3000万コルと言いてえところだが兄ちゃんのおかげで攻略も進むし生きる希望も持てるからな。特別に1000万コルでいいぞ！」

「つ………すまない、助かる。」

そう言い俺は購入ウインドを操作し、購入した。

「兄ちゃん！これからも攻略頑張ってくれよ！」

「ああ……」

俺は48層に戻った。

—————

48層に戻って店に向かう途中にキリトとクラインに会った。どうやら目的地は同

じらしい。

「キリト、クライン……プロポーズとはどういうタイミングでやればいいんだ？」

「はあ。」

「プロポーズとはどのようなタイミングでいうのが一番なんだ？」

「（おいおいキリトくん、聞きましたか？）」

「（ああ、確かに聞いた。あのセツナがプロポーズだと!?）」

「（セツナのやつ……ちつくしよー！俺ですらまだなのに……）」

「（ま、まあ俺たちにもよくわからないこと質問されてもなあ……）」

「（ムカつくからテキトーなこと教えとこうぜ）あのなあセツナ、プロポーズってのはタイミングなんてどうでもいいんだ。あと抱きついたりしてもいいかもな。」

「（そうなのか、流石クラインだ。ありがとう、参考にさせてもらう。）」

「お、おうよ、困ったことあったら俺に聞けよな。」

「（おい！信じちゃったじゃねえか！）」

「（いや、間違ったことは言ってるねえ……はずだ……）」

そうこうしてうちに家につく。

「ただいま、リズベット、聞いてくれ……俺と」

リズベットに抱き着こうと歩き出す。

「うわああー!」

クラインとキリトが俺の口を塞ぎ、動きを止める。

「バカ野郎! タイミングはどうでもいいって言ったが常識的に考えて俺たちがいない時
だろ!」

「クラインがテキトーなことというからだ!」

「モガモガ!」

「ちよつと……どうしたの?」

俺は口を抑えられ喋ることが出来なかった。クライン……今度会ったら仕返しをし
てやる。

—————
結局人がいなくなったのは閉店してからだだった。

閉店後も店の片付けなどをしてたら時間が経ってしまい、もう夕食時も食べ終わっ
た。

リズベットは今食器を洗っている。……タイミングは今しかないか……

「リズベット、聞いて欲しいことがあるんだが……いいか?」

「ん、いいわよ。」

俺は立ち、リズベットの後ろまで歩いていき……後ろから抱きしめる。

「きやつ！な、なに？どうしたの？」

「……このまま聞いて欲しい、俺と……結婚してくれ……」

「今なんて……？」

「俺と結婚してくれ。」

しばらくの沈黙、するといきなりリズベットが泣き始めた。

「う……うう……」

「す、すまない……いやいいんだ……気にするな。」

「ち、違うの……嬉しくて……こんなあたしでいいなら……よろしくお願いします。」

「これを。」

婚約指輪を渡し、結婚了承のウィンドウを送る

「婚約指輪だ、受け取って欲しい。」

「喜んで♪」

リズベットは指輪を左手薬指にはめ、結婚了承のウィンドウを操作すると結婚特有の

BGMが流れる。

「改めてよろしく頼む、リズベット。」

「（こちらこそよろしく頼むわ、セツナ！）」

第十一話 星屑—スターバーストストリーム—

またここか…

俺が目を覚ますとまた暗くて真つ暗な空間にいた。また父さんと母さんが立っている。

父さん、母さん…俺は変わるよ…過去に囚われてはダメなんだ…

すると昨日と同じように”誰か”が出てきて後ろから切りかかろうとする。

貴様は、貴様は俺ではない！

俺は”誰か”を自分の手で殺す。

俺は気付いたんだ、殺すことで救われた人もいる。人を守るための殺しは仕方ないことなんだ。

お前…その考えは俺たちと紙一重だぞ…？
不気味な声で囁く。

たとえ紙一重でも俺とお前たちは違う、いや同じでもいい。せめて俺の両手が届く範囲までは守りたい。殺す動機は全然違う！

そうか……それがお前の答えならいい、だが忘れるな……お前も人殺しだ。

……わかつている。罪は償うさ、この世界を破壊した後でな。

朝になり目が覚める。

隣にはリズベットが寝ていた。

確か昨日、プロポーズの流れで……よく覚えていないな。

「いつも朝食を作らせて悪いからな、今日は俺が作るか。」

俺は自慢ではないが料理スキルもそこそこ上げていた。

家で妹と暮らしていたときは当番制でご飯を作っていたからな。それにリズベットと暮らすまでは1人で暮らしていたから料理もできなくては生活出来ない。

「よし、出来た。」

朝食はこの前近所に住んでいる人からおすそ分けで貰った米風の穀物とモンスターの肉をベーコン状にしたもの、それとモンスターの卵の目玉焼きだ。

「リズベットを呼んでくるか。ん？キリトからメツセージ？」

キリトからのメツセージは『今日一緒に74層の迷宮区に行かないか？時間は9時な

！』とのことだった。

それに俺は『了解した。』っと返信してリズベツトを起こしに行った。

「リズベツト、朝だ。」

「んん〜……あとちよつと……ムニヤムニヤ」

「……………そうだ……俺が久しぶりに食事を作ったんだ。味見をしてくれないか？」

「え!? セツナがご飯作ったの!? 食べる食べたい!」

「なら準備してるからリズベツトは顔を洗って髪を整えてこい。」

「ふえっ!? (そんなにひどい寝癖ついてるのかしら……)」

リズベツトは顔を真っ赤にして髪を抑えていた。

「うう……恥ずかしいところ見られちゃったな。」

リズベツトが来た頃には食事の準備は完璧にできていた。

「うわあく! これセツナが作ったの? あたしのより美味しそうじゃない。」

「見た目だけだ、味は数段劣る。食べてみてくれ。」

「うん! いただきます!」

「いただきます。」

リズベツトは目玉焼きを一口食べると。

「ホントにあたしより美味しいわね。」

「そんなことはない。俺にはリズベツトの作ったやつのほうが数段美味しく感じる。」

そんな会話をひたすら繰り返しながら朝食の時間は終わった。

食後に落ち着くためと言って俺たちは茶を飲んでいた。

「そーだりズベツト、今日俺はキリトと一緒に74層の迷宮区に行ってくる。」

「そう、ボスには挑まないんでしょ？」

「当然だ。流石に2人では死に行くようなものだ。」

「なら安心ね。あとセツナ、前リボンズさんに貰った手紙にはなんて書いてあったの？」

「あれか、血盟騎士団への勧誘だ。面倒だったので断つとくようにリボンズに頼んでおいた。」

「セツナってリボンズさんのこと嫌いとか言つといてなんだかんだ仲良くやってるわよね。」

「そんなことはない、俺はやつの人を見下すような態度が嫌いだ。」

「えー？そー？リボンズさんいい人じゃない。何回か店に来てもらった時も親切でいい人だったわよ？」

「アイツが店に来たのか……?」

「ええ、結構来てるわよ?」

「知らなかった……おっと、もうこんな時間か。リズベットじゃあそろそろ行ってくる。」

「行つてらつしやい、武器もばつちりよ。」

「助かる。じゃあ俺は行く。」

「待つてセツナ。ん」

リズベットはそう言つて目を瞑り口を出してきた。

「……何をしているんだ?」

「行つてきますのキス……ん」

「普通はするのか……少し恥ずかしいのだが……」

「新婚はみんなするのよ、ホラセツナも!遅れちゃうわよ?」

「……わかった。」

俺はリズベットと唇を重ねる。

「……………じゃ、じゃあ行つてくる……!」

「う、うん……頑張つて来てね!」

お互いに真つ赤になつてたのはいうまでもあるまい。

74層の待ち合わせ場所の転移門前に俺は来た。

「おい！セツナ〜！こつちこつち！」

キリトが手を振ってきたのでそこに向かう。

「すまない、待たせたな。」

「いや、そんな待ってないから大丈夫だぞ？」

「では行くか。」

「待ってくれ、あと1人来るんだ。」

あと1人？

「避けてええええええええええええつ！」

「えつ？」

キリトに何かゲートから突っ込んできた。アスナである。その直後、キリトとアスナは地面に倒れた。

「イテテテテ……？なんだこれ……？」

キリトの手になにかが掴まらったようだ。キリトは確認のために手を開閉した。

「いやあああああああああつ！」

「ぐはっ!？」

すると突然アスナがキリトに強烈なビンタを食らわせた。その勢いでキリトは近くの像まで飛ばされた。

「もう一人はアスナだったのか……」

「いきなり痛いじゃねえか!アスナ!」

「キリトくんがエツチなことしてくるからでしょ!」

アスナは顔が真っ赤になってる。

「アスナ、なんでそんなに焦っていたんだ?」

「セツナくん……あつ、実は!」

すると転移門が光だした。アスナはそれを確認した後、キリトの後ろに隠れるように回った。

自分が殴り飛ばした男の後ろに回り込むとは……

門から出てきたのはアスナと同じ色をしている防具を装備している男だった。

「アスナ様……勝手なことをされると困ります。ギルド本部まで戻りましょう!」

「嫌よ!大体なんであなたは朝から私の家の前に張り込んでいるのよ!」

「はあ？」

「……………」

それはストーカーというやつでは……

「こんなこともあるのかと一ヶ月前からずっとセルムブルクでアスナ様の護衛の任務に就いておりました。」

「そんなの団長の命令じゃないでしょ!？」

「私の任務はアスナ様の護衛です。それは勿論、ご自宅の監視も含まれています。」

「いや、ねえだろ。」

「……………」

コイツは真面目すぎるために任務を変なふうに捉えていたのか？

いや、顔からしてただの変態だろ。

「全く……聞き分けのないことを仰らないでください。……さあ本部に戻りましょう！」

「うっ……………」

男はそう言うのアスナの手を引っ張って転移門に行こうとした。すると

「ちよつと待て、この副団長さんは今日は俺達の貸し切りなんだ。」

キリトがその男を止めて、そう言いはなった。するとその男はキリトを睨んだ。だが

キリトはそれにお構いなしに言葉が続けた。

「アスナの身の安全は俺達が保証するよ。だから本部にはアンタ一人で帰ってきてくれ。」

「ふざけるな！ 貴様のような雑魚プレイヤーにアスナ様の護衛が務まるか！ 私は栄光ある血盟騎士団の……！」

「アンタよりはまともに務まるつもりだよ。」

「そこまででかい口を叩くからにはそれを保証する覚悟があるんだろうな……!?!」

男はキリトにデュエルを申し込んだ。

キリトはアスナに一応確認をとった。

「……いいのか？」

「うん……団長たちには私が報告するから。」

「わかった。」

キリトはそう言うとその男、クラディールという名前らしい。クラディールのデュエルを受けた。

ルールは初撃決着ルールだった。

初撃決着ルールとは最初に相手に強力なダメージを与える、もしくは相手のヒットポイントを半分にするれば勝利するというルールだ。

このデュエルはプレイヤー同士で戦うときに一般的に使われているルールだ。

デュエルという話題を聞きつけギャラリーも集まってきた。

やがてカウントダウンが0になり、デュエルが始まった。

開幕早々クラディールがキリトに向かって走り、ソードスキル《アバランシユ》を発動させた。

キリトもそれに対応して《ソニックリープ》を発動させる。

クラディールはその瞬間笑った。この場合だとクラディールのアバランシユの方が強いため、このまま勝負が決まるわけだ。

だがキリトが狙ったのはクラディールではなくクラディールの剣だった。そうするとキリトのソニックリープはクラディールの剣に当たり、半分に折れたのだ。

「システム外スキルか……………」

キリトがやったのはシステム外スキル《アームブラスト》、このスキルは相手の武器を破壊する技だ。……………キリトは殺さずに無力化する術を手に入れてたのか……………

「な、なんだとお……………」

「さあ、俺の勝ちだ。文句ないな？」

「く、くそ……………私がこんなやつに！」

クラディールはウィンドウを操作し新しい武器を取り出しキリトに切りかかってくる。

俺はGNソードを展開し、クラディールの首元に当てる。

「見苦しいぞ。負けを認めろ。」

「貴様……………」

「それともこのまま首を切り落とされたいのか…？死にはしないが苦しいと思うぞ……………」

「セツナくん、そのくらいでいいわよ。」

「あ、アスナ様！あいつが小細工を！小細工でもしなければ私があんな薄汚いピーターなんかになんかに……………」

「クラディール、血盟騎士団副団長として命じます。本日をもって護衛役を解任、別命があるまでは本部で待機しているように。以上です。」

「ぐっ……………転移、グランザム……………」

そう言つてクラディールは姿を消した。

「アスナ、大丈夫だったか？」

「キリトくん……………ええ、大丈夫よ。」

「……………あいつもこの世界の歪みだな。」

「ははは……………ホントにあいつは歪んでたな。」

「もう、2人ともふざけないでよ…真剣に悩んでたのよ?」

「ごめんごめん、じゃあ迷宮区行くか!」

俺たちは迷宮区へと向かった。

迷宮区のマップピングもほぼ終わりボス部屋の前まで来ていた。

「中……覗いてみるか?」

「ああ……」

「覗くだけよ? 私達だけじゃ絶対勝てないと思うし……」

キリトがドアを開く、ボス部屋の灯りが中央に向かってついていく。

するとそこには羊のような頭をした蒼い悪魔がいた。手には何やらプレイヤーと同じくらいの大きさをした大剣をもっていた。

ボスの名はグリーンムアイズと表示されていた。

「グオオオオオオオオオオオッ!!」

グリーンムアイズは俺達に向かってそう叫んだ。今回はあまりにも強そうで、俺達だけでは敵いそうになかった。

「くっ!引くぞ!」

「お、おうー！」

「うんー！」

俺たちは全速力で走って逃げた。

「はあ……はあ……強そうだったな……」

「ああ……武器は大剣だけだったけど、あれは恐らく特殊攻撃を使ってくるな……」

「守りが固い人を前衛に出して攻撃早い人や攻撃力が高い人でスイッチを繰り返しながら戦うことになるな……」

「ということは盾装備の人が何人か必要ね……ん？盾装備……？」

アスナは俺とキリトを見る。

「……そういえばキリトくんとセツナくんっておかしいよね。普通片手剣ならもう片方に盾を装備するはずなのに。私はレイピアだから早さ重視だから盾は装備してないけど、それにキリトくんたちの場合早さ重視という訳でもないのよね……そういえばリズに作ってもらったダークリパルサーも使っていないし……何か隠してるでしょ。」

「俺は7本も装備してるからな、それに盾はGNソードで間に合ってる。アスナの希望なら今回は付けて置くか。」

俺はウィンドウを操作して白と青の盾を装備した。

確かにキリトの装備はおかしい……俺はユニークスキルの《セブンソード》で……ユニークスキル？もしかしてキリトも……

「……まあ、いつか。戦い方は人それぞれだもんね。」

そう言われるとキリトはホッと一息をついた。

「さあ皆もお腹がすいたでしょうから」飯にしましょ！」

「ああ、そうだな」

「……（しまった…弁当忘れた。）」

俺は弁当を持つてくることを忘れたことを後悔した。

アスナはウィンドウを操作し、弁当を取り出した。

「2人ともこの瓶の中身舐めてみて？」

俺は紫色の液体のほうを舐めてみた。

「これは……醤油か!？」

キリトは緑色のほうを舐めた。

「こっちはマヨネーズだ！」

「すごいな、アスナ…このゲームで調味料を再現するなんて…」

「1年の研究による成果よ！」

「それに弁当も美味しい、これ売ったら儲かるよ！……いや、でもしたら俺のぶんがなくなる。」

「もう…キリトくんにならないいつでも作ってあげるわよ…」

アスナは赤くなりもしもじもじしていた。今までの俺ならわからなかったが今ならわかる。キリト、お前もやるな。

「アスナ、俺から頼みがある。弁当を忘れた、分けてはもらえないか？」

「いいわよ、はい。」

「すまない。」

アスナから弁当をわけてもらう、貰った立場で言うのもなんだが…確かに美味しいがリズベットのご飯のほうが美味しいな。

そんなことしていたら向こうから見慣れた集団がやってくる。

「「クライン!?!」」

「おおー！キリトにセツナ！セツナ、お前リズベツトちゃんにプロポーズ成功したか？」

「ああ、おかげさまでな。」

「キリトくん、セツナくん、この人は？」

「ああ、コイツは……」

「どうも、僕はクライン、風林火山のギルドリーダーです。キリトとセツナとは第1層からの知り合いで、キリトとセツナは僕のこと兄貴のようにしたっていてね、ははは！兄貴分は困るなま、全く！」

「は、はあ……キリトくんとセツナくんがお世話？になっています。」

アスナはペコリとお辞儀をする。

「アスナ、クラインの言ってることはほぼ嘘だからな？」

「おいおいキリト！半分はホントじゃねえか！」

「では半分は嘘なんだな……？」

「セツナも厳しいなあゝ」

アスナは俺たちのやり取りを見て笑っていた。

なにやら俺たち以外の足音が聞こえてきた。

あの服装は……アインクラッド解放軍か？

先頭のやつ以外は全員疲れたような感じだった。

「1層を支配している巨大ギルドがどうしてこんなところに？」

彼らはギルドの本部を第一層に置いていたので、そこからわざわざこんな最前線にくるのが25層の攻略以来か、珍しいな…。

「私はアインクラッド解放軍、コーバッツ中佐だ。」

「俺はセツナだ。」

「俺はキリト、ソロだ。」

「……君達はもうこの先を攻略しているのか？」

「ああ、マツピングはボス部屋の前までしている」

「……では、そのマツピングデータを提供してもらいたい。」

コーバッツがそう言うのとクラインがいきなりこちらにやって来た。

「タダで提供しろだど!? テメエ! マツピングする苦勞が分かってて言うてんのか!!」

「我々は一般プレイヤーに情報や資源を平等に提供し、秩序を維持すると共に、一刻も早くこの世界からプレイヤー全員を解放するために戦っているのだ! 故に諸君が我々に協力するのは当然である!」

「デメエ!？」

クラインがコーバツツにキレたのかそう叫び、殴ろうとした。

「いい、クライン…どうせ帰ったら提供しようと思つていたものだ。それでもいいか？
キリト、アスナ？」

「俺はいいぞ。」

「私も」

「……感謝する。」

「おい、ボスに挑むのはやめとけよ？俺たちは先に見てきたがその人数でどうにかなる相手じゃなかったぞ。」

「…それは私が判断する。」

「そんな状態では自殺行為だぞ？命を捨てたいのか？」

「私の部下はそのようなことで根をあげるようなやつではない！貴様ら！立てっ!!」

コーバツツがそう叫ぶと休んでいた部下たちが声をあげながら立ち、そのままコーバツツと共にボス部屋に入つていった。

しばらくするとボス部屋のほうから悲鳴が聞こえてきた。

「今の声は……アイツらか……」

「……助けに行かなきゃ！」

「おい、アスナ！」

「キリト！待てよ！」

「はあ……まったく……」

結局俺たちは全員でボス部屋に向かった。

ボス部屋の扉を開けると状況は想像より悲惨だった。恐れをなしているのか逃げ回っている人影もある。そのせいか陣形もバラバラだ。これでは死人が出るばかりだ。

転移結晶で逃げられないのか？……まさか結晶無効化エリアか！

「撤退しろ！このままだと殺られるぞ！」

キリトが叫ぶ。

「何を言うか!!我々軍に撤退の二文字などない！戦え！戦うんだ！」

「ダメよ！下がって！」

アスナもそう叫ぶが、コーバツツはそれを無視し、軍の部隊に命令を出した。

「全員……突撃いっ！」

「くそっ！セツナ！クライン！いくぞー！」

「了解！」

「畜生！どうとでもなりやがれ！」

「はああああっ!!」

アスナがグリーンムアイズにソードスキル、《カドラブル・ペイン》を放つと、その攻撃を受けたのか、ターゲットを軍の部隊じゃなく、アスナに切り替えた。

するとグリーンムアイズはアスナに剣を振りおろした。アスナはなんとか交わしたが剣の衝撃波で吹き飛ばされてしまう。

「アスナっ！」

「キリト、アスナの回復を！俺が時間を稼ぐ！」

キリトは飛ばされたアスナの治療をしてる。

「いくぞー！《TRANS—AM》!!」

目が一瞬黄色くなるが発動しない。

「くっ?!なぜ?」

俺は困惑して動きが止まる。

その瞬間をグリーンムアイズは見逃さず攻撃をしてくる。

紙一重のところでGNソードと盾で防ぐ。

「やるかよっ！」

だがなぜ《TRANS—AM》が使えなかった……
仕方ない！

「うおおおおお!!」

俺の本来のユニークスキル、《セブンソード》の連続攻撃をする。4つのスキルを繋げた怒涛の44連激を放つ。

グリーンムアイズのHPはゲージを一本残して耐えた。

くそっ！硬直時間が…殺られる…！

グリーンムアイズは俺に一撃を入れようとしたが

「大丈夫か？セツナ？」

「まったく、無茶しやがる！」

キリトとクラインが攻撃を防いでくれた。

「すまない！」

俺たちは離脱し、距離をとった。

「アスナ、セツナ、クライン…10秒稼げるか…？」

「任せろ。」

「余裕だぜ。」

「うん！」

「じゃあ…頼む！」

俺たちはグリーンムアイズに応戦する、相手も素早い攻撃で耐えるので精一杯だ。

俺たちは10秒持ちこたえるとキリトが何やらエリユシデータとダークリパルサーを構えていた。

「あれは……俺と同じ《セブンソード》なのか…？」

「いや……二刀流？」

キリトには聞いている余裕なんかなく

「うおおおおおっ!!」

キリトはそう叫ぶとグリーンムアイズにソードスキルを放った。数える限りあれは16連撃だろう。しかし、二刀流だとソードスキルは使えないはずなのだが。

やはり俺と同じなのか…？だがあんな組み合わせは……

そう思っているうちにグリーンムアイズはどうとうHPが0になった。

「スターバースト……ストリーム！」

キリトがそう言うのとグリームアイズの体が無数の結晶になり消滅した。

キリトもスキル発動中攻撃を喰らったのかHPを1残して倒れた。

キリトが目を覚ますまで数分かった。

「っ……おれ……は……？」

キリトが目を覚ますとアスナが強く抱きついた。

キリトが落ち着くと俺たちはキリトに質問した。

「キリト、あのスキルはなんだ？お前も俺と同じく《セブンソード》なのか？」

「いや、俺のはもつと単純さ……お前のは組み合わせてオリジナルを作るユニークスキル、俺のは根っからのオリジナルのユニークスキルなのさ……」

「それが《二刀流》ってことかよ……」

《二刀流》……今まで見たなかでは一番衝撃度が高かった。

「よし！ テメエら、アクティベートが終わったら次の層にいくぞー！」

クラインはパーティーメンバーにそう指示をし、こちらを向きこう言った。

「キリトにセツナよお……俺、なんつうか、嬉しいよ

……まあ、そんなだけじゃあな。」

クラインは次の層に向かった。

「俺も家に戻る、リズベットが心配してるだろうからな。」

そう言っただけ俺はキリトとアスナを置いて家に戻った。

家に戻り、ボスを倒してきたと言うととても心配された。当然今晚も一緒に寝ることになった。

第十二話 記憶―思い出し―

74層のボス戦から1週間弱、それはもういろいろあった。

ひとつは俺とキリトが血盟騎士団の創始者、ヒースクリフとのデュエルだ。

俺たちはヒースクリフに負けた。

何やらキリトはアスナをかけて勝負してたらしく負けたことにすぐく落ち着いていた。

そしてキリトは血盟騎士団に入団。

俺とはただデュエルをしたかっただけらしい。

そしてもうひとつ、キリトが死にかけたということだ。血盟騎士団に入団したキリトはあのクラデールと一時的にパーティーを組み訓練に出かけてた。

その後クラデールはラフコフのメンバーだということがわかった。

そのクラデールはアスナにボロボロにされ、止めはキリトにさされ、クラデールは死んだ。

そして最後に……その事件を受けてキリトとアスナが結婚したらしい。

詳しくは知らないがな。

キリトとアスナは仲間への不信感を理由で休暇を取り、22層にログハウスを買い引越したらしい。

そして俺たちはキリトとアスナの家に呼ばれていた。

「リズベツト、準備は出来たのか？」

「うん、今行く。」

キリトとから『至急来てくれ』と連絡があった。

何があったんだ？

「ごめんごめん、行こー！」

「ああ。」

リズベツトは手を出して来たので手を握る、リズベツトは上機嫌になる。
よかった、間違ってたなかった。

22層のキリトの家の前来た。

「ここであつてるわよね？」

「あつている、入るぞ。」

ノックもせずに家に入る。

「ちよ、ちよつとノックくらい。」

「…すまない、自宅の感覚で。」

「セツナくん、リズ〜！」

「お、来たか。」

アスナとキリトだ。

「なぜ至急来るようにメールしたんだ？」

「ああ、それが……」

「パ。パ……この人たちだれ……？」

キリトの足元には4歳〜5歳？いや感じからしてもう少し幼いか…、まあそのくらいの子供がいた。

俺はアスナのところまで行ってアスナの肩に手を置き

「アスナ、よく頑張ったな。」

「違うからね!?!」

リズベツトはキリトに

「アンタって手を出すのはやいのね〜」

「だから違うって！」

俺たちはその少女について説明を受けた、なんでも森で倒れていて記憶喪失らしい。プレイヤー名以外わからないのも気になってるらしい。

「ふうん、それにしても血盟騎士団副团长様がお化けを怖がるかねえ……」

「ちよつとリズ、そこは今関係ないでしょ……」

プレイヤー名はユイ、どうやらカーソルも出ないしステータスにはHPの表示もなかったらしい。

「パパ、ママ、この人だれ？」

「パパとママの友達だよ。」

「私はリズベツトよ。」

「俺はセツナだ。呼び方はなんでもいい。」

「りずとせつな？うくん……」

「難しかったらなんでもいいのよ？」

「じいじいとばあばあ……？」

「ププツ……」

キリトとアスナはそれを聞いて笑って来た。

「ユイちゃん……さす……がに……それは可哀想よ……ププツ……お兄ちゃんとお姉ちゃんにし

てあげな……ププツ」

「くっくくくくく……」

よし、あとでキリトはシめてやる。

――――
結局呼び方はアスナのおかげで俺はお兄ちゃん、リズベツトはお姉ちゃんに決定した。

どうやらキリトたちは明日ユイの情報を集めるために始まりの街に戻るそうだ。

キリトはもし記憶が戻ったら俺たちのことを忘れるかもしれない。と心配していた。

確かにそれは悲しいが今一番悲しいのはユイの親なんだ。

明日の情報集めには俺もリズベツトも参加することになった。

――――
翌日、俺たちは第1層の始まりの街に来ていた。

懐かしいな……いい思い出ではないが……

「おかしいな、ここには2000人くらい人がいるはずなんだけどな」

「何かあったんじゃないかしら？」

「ねえユイちゃん、ここで見覚えのある場所とかある？」

「う〜ん……わかんない……」

「教会のほうに行ってみたらどうだ？この年代の子供達が集まっているのではないか？」

「そうだね、じゃあユイちゃん行こっか」

「うん！」

ユイはアスナとキリトと手を繋ぎ歩き出した。

—————
教会に向かつてる途中軍のやつらが子供を取り囲んでるのを見つけた。

また歪みだ……

俺は走って行って軍と子供たちのあいだに入る。

「貴様ら大人が子供を囲んでどうするつもりだ。」

「ちよつと社会常識つてのを教えてただけさ。市民には納税の義務があるからな。」

「そうだよ、当たり前のことだよな。」

やはりこいつらは歪んでいる……

「子供を数人の大人で取り囲みニヤニヤするのが社会常識とは……貴様らは歪んでいる
！」

「黙れ！何も知らない雑魚プレイヤーが！それに我々軍に楯突いたからにはどうなるかわかつてんだらうな！」

相手は剣を俺に振りおろしてきた。よけるまでもなく、素手で受け止めた。

「貴様の信念のない刃じゃ俺は殺せない……もつと殺意を込めてこい……」

「なんなんだよコイツは……！ 貴様らも手伝え！」

「貴様の仲間ならもう俺の仲間が制圧してる。残ったのは貴様だけだ。」

「く、くそつ！ 離せ！」

俺は剣を離す。

「いいか、またこのようなことをしたら俺は貴様を殺す。」

「く、くつそおおおおお！」

軍のやつが逃げていく。

「まったくセツナ無茶すぎよ。」

「ほんとだよ、子供たちも怖がってるぞ？」

「ああ……すまない、大丈夫か？ 怪我はないか？」

「うん、ありがとうお兄ちゃん！」

「あ、……ああ……」

するとユイが突然声を上げた。

「ユイちゃん!? どうしたの？」

「わたし……わたし……ここには……いなかった……ずっとひとりで……くらいところ

にいた……」

「暗いところ……?」

「うう……ああああ……」

「ユイちゃん?」

するとユイはぐつたりとアスナにもたれた。

—————
俺たちはサーシャという人物の計らいで教会に一晩泊めて貰った。

翌朝

「昨日はほんとにありがとうございました。」

「俺は歪みを正しただけだ。礼なんかいらない。」

「もう、素直じゃないんだから」

「ん……」

するとユイが目を覚ました。

「おはよ、ユイちゃん」

「おはよ、パパ……ママ……お兄ちゃん……お姉ちゃん……?」

見たところ昨日のようなことはなさそうだな。

「サーシャさん、ちよつといいか？」

「はい？」

「……昨日の軍のことですけど、俺達が知っている限りじゃ軍は少なくとも全プレイヤーの為に尽力してくれて、専横が過ぎることはあるけど治安維持には熱心で悪いやつらじゃなかった。だけど昨日の奴らはまるで犯罪者のようだった。一体いつからあんなったんだ？」

「方針が変更されたらしいのは半年前くらいですね……徴税と言い恐喝まがいの行為をし始めた人とそれを逆に取り締まる人たちもいて、軍同士で対立している場面も何度もみました。噂じゃ上の方でなにやら権利争いがあったそうで……」

外から別の気配がする。

「誰か来たな、俺が見てくる」

キリトはサーシャと話していたので俺が行った。

ドアを開けると銀髪の女が立っていた。

「初めまして、ギルドALFに所属しているユリエールと申します。」

「ALF……アインクラッド解放軍ですか……それで何の用です？昨日の件についての抗議ですか？」

「いえ、抗議だなんて……とんでもない。その逆です、寧ろよくやってくれたとお礼を言い

たいくらいです」

「じゃあ何故ここに？」

「ここに強いプレイヤーがいると聞いたのですが……まさか黒の剣士、閃光、雪崩だったとは……道理で軽くあしらわれるわけですね。おっと、話が逸れてしまいましたね、私は貴方達に是非とも頼みたいことがあってここに来ました。」

「……詳しく聞かせてもらおう……サーシャ、大丈夫か？」

「あつ、はい。」

リズベットとアスナはユイや子供たちと遊ばせてる。

「それで、頼みというのは？」

「はい、……元々私達……いえ、アインクラッド解放軍リーダーのシンカーはこのような独善的な組織を作ろうとした訳ではなかったんです。ただ情報や食料を多くのプレイヤーに均等に分かち合おうとしただけで……」

「だが軍は大きくなりすぎた……と」

「はい、皆さん知つての通り元々は軍なんて大きなギルドではなく、シンカーが他のプレイヤーの為にということとでボランティアをしたのが始めだったんです。そしてそれに感動してギルドに入団したい、自分も多くのプレイヤーの為に役に立ちたいという人達が増えて、今のような巨大ギルドになったのです。」

「でも最近になって内部で歪みが起きているけ……」

「はい、内部分裂が続く中、対等してきたのがキバオウという男です。」

キバオウ……あのやかましいやつか……あいつが軍に入っていたとは……

「キバオウ一派は権力を強め、効率の良い狩場を独占したり、調子にのって徴税と称した恐喝まがいの行為すら始めたのです。」

「昨日の奴らはキバオウ一派か……」

「はい。ですがゲーム攻略よりそんな行為を続けているせいとかキバオウ一派に対する批判が大きくなって、キバオウはこれじゃまずいと思つたのでしよう、配下の中で最もハイレベルのプレイヤーを最前線に送つたのです。」

この前のあいづらはそういうことだったのか……

「みなさんもお分かりだと思えますが……その最悪な結果にキバオウは強く糾弾され、もう少して彼をギルドから追放出来るところまで行つたのですが……追い詰められたキバオウはギルドリーダーのシンカーを罠に掛けるという強行策にでました……」

「罠というのは……?」

「シンカーを……高レベルダンジョンの奥深くに置き去りにしたんです……」

くっ！キバオウ……貴様もこの世界の歪みになるのか……!

「シンカーはキバオウの丸腰で話し合おうという言葉を信じて、なにも持たずにハイレ

ベルダンジョンの奥に行っただんです……その言葉を信じて……三日前のことです。」

「3日前……？つてことはもう……」

「いえ、まだ生命の碑にシンカーの名前の下に線が引いてなかったのでもまだ生きています。ですが……」

「丸腰だから身動きが取れない……と？」

「はい……本来なら我々が助けに行くべきなのですが……現在キバオウが睨みをきかせているために……我々は……そこで強い人たちが現れたとのことなので……みなさん！どうかシンカーを助けてやってください！」

「……だがそれ自身が畏という可能性もある、証拠を出せ。」

俺がユリエールにそう答えるとユリエールはもう耐えられなくなったのか涙を流した。俺の言ったことで泣いてしまったかと思いかかなり戸惑ってしまった。ユリエールはそのまままた口を開いて話をした。

「無理なお願いだということとは私にもわかってはいるんです！でも彼が今……どうしているかと思うと……もう……おかしくなってしまういそうで……」

ユイが歩いてこつちに来た。

「ダメよ、ユイちゃん。パパたちは大事な話をしてるの！」

「大丈夫だよ、パパ、お兄ちゃん。その人嘘ついていないよ。」

「ユイ……嘘ついてないってわかるのか？」

「うん、なんとなくだけど……わかるよ……うまくいえないけど……わかるよ」
「そうか……なら信じるしかないな……」

俺はユイの頭を撫でる。

場所は 1層の地下、モンスターは60層クラスのモンスターが出てくるらしい。

「キリト、アスナ……助けに行くぞ。リズベットはここでユイと待っていてくれ。」

「私も行くわよ！私だって戦えるんだから！」

「私もパパたちについていく！」

「リズベット……仕方ない、俺たちから離れるなよ。」

「ありがとうセツナ！」

リズベットが抱きついてくる。

「こんなところで抱きつくな！」

「まあ俺たちでユイを守ればいいか……」

「ありがとうパパ！」

ユイもキリトに抱きつく。

「お、おい……ユイ……」

アスナが羨ましそうにキリトを見ていた。

しばらく歩いていると奥の方に光が見えてきた。ここまで来るのは大変だった……
変なモンスターばつかり出てきて……

「キリト君、あれって……」

「ああ、安全エリアだな……」

キリトとアスナがそう言うとな俺はすぐに索敵スキルを発動させた。安全エリアの向こうに、反応が1つあった。

プレイヤーだ。一人だけだ。ちなみにモンスターの出現はない。

「シンカーはあそこにいるな……」

「シンカー……?」

俺の言葉を聞くと安全エリアに走っていった。

すると男性プレイヤーがこちらに気付き大声で叫ぶ。

「ユリエール!!」

「シンカー!!」

「来ちゃダメだ!この通路は!」

俺は素敵スキルを使わずとも感じられた、この殺意を……コイツはまずい!

同じくキリトとアスナも感じたのか俺が走り出すと同時に走り出した。

シンカーは気付いてないのか!?

キイイーン!!

俺とキリト、アスナが間一髪のところまでモンスターの鎌を防ぐ。

だが3人がかりでもその攻撃は重かった。

「ぐはっ!」

「ぐっ……!」

「きやつ!」

俺たち3人は壁に叩きつけられてしまった。だがモンスターの注意はこちらに向いた。

「リズベット!ユイとユリエールを連れて安全エリアへ!急げ!」

「う、うん!」

なんとか立て直してモンスターの方を向いた。

そのモンスターはボロボロのマントに骸骨のような体に特徴的な巨大な鎌を持つ死

神のようなモンスターだった。

The Fatalis cythe、死の大鎌という意味か……つまり死神ってことか……

「どうする……とんだ掘り出し物モンスターだな……さっきの攻撃といい……90層クラスのものだ……」

「どうするって言ったってよ……3人で倒すしかないだろ」

「転移結晶は？」

「多分シンカーたちは安全エリアから転移しただろう……だがコイツは転移する時間すら与えてくれなさそうだ……」

死神は鎌を振り回し攻撃をしてくる。俺はロングブレイドとショートブレイドで受けるがあまりの攻撃の重さに飛ばされてしまう。

「ぐあつー！」

「セツナ（くん）!!」

一瞬2人も俺のほうを見たせいで攻撃を喰らってしまう。当たりどころがよかったのか即死ではなかった。

だが俺たちのHPは半分を切っていた。

このまま……死ぬのか……守ると……この世界から救うと約束したものもいるのに……

俺は……俺は……

気持ち生きていたかったが現実はそうではなかった。飛ばされた衝撃でまともに立つことも出来なかった。

死神が鎌を振り上げ、下ろした。

……くそっ……つまらない人生だった。

死を覚悟し、目を瞑る。

しかし、いくら目を瞑っていても攻撃が来ない。

俺は恐る恐る目を開けるとそこにはユイが俺たちの前に立っていた。ユイちゃんの前上を見た途端、そっちに衝撃を受けた。ユイの頭上には「Immortal Object」の表示が出ていた。不死的存在……？

「ユイ……ちゃん……っ？」

アスナが思わずそう呟いてしまうが、ユイはこちらを見ずに死神の方だけを向いている。

そして中に浮き、手から炎が出たと思えば灼熱の大剣を出現させ、そのまま死神に何の躊躇いもなく振り下ろした。

死神は防御の姿勢を取るが、ユイが振り降ろした大剣の前では無意味だった。そして

そのまま下まで振り降ろすと先程まで俺達が苦戦していた死神を呆気なく叩き割り、死神は炎と一緒に無数の結晶体となり、消滅した。

「パパ……ママ……お兄ちゃん……お姉ちゃん……全部思い出したよ……」

ユイは微笑みながら涙を流していた。

俺たちは安全エリアに移動した。

そこには大きな黒い大理石の机が置いてあるだけだった。

「ユイちゃん……全部……思い出したの……?」

アスナがそう言うのとユイはこくりと頷いた。

「キリトさん、アスナさん、セツナさん、リズベットさん、全てを説明します。」

内容はこうだ、ユイはカーディナルの作り出したメンタルサポートプログラムだったのだ。しかしサービス直後にカーディナルからプレイヤーとの接触を禁止されてたまりにたまったエラーでバグを起こし、森をさまよってたらしい。

このコンソールに触ったから記憶が戻った、システム権限を使いモンスターを消し

た。

その際にコンピュータにアクセスしたからカーディナルに異物として検出されもう消される。

そう言つてユイの身体が光始める

「ユイ…お前はそれで満足なのか？偽りでもなんでもいい！俺たちにとつてはお前はかけがえのない家族だ！」

「そうよユイちゃん！あたしたちにとつてはホントに妹同然なのよ！」

「ユイちゃん…駄目よそんなの！これからもあそこの家で一緒に暮らすの！だから消えないで……！」

「パパ、ママ、お兄ちゃん、お姉ちゃん…今までありがとう…これでお別れです…私はまだ十分すぎるほどみんなから幸せを貰いました。だからもう十分です。」

ユイの身体は直視が難しくなるほど薄くなっていた。

「ユイ！俺たちから離れないでくれ！」

「ユイちゃん！駄目よ！」

「ユイちゃん…行かないでっ！」

するとキリトはコンソールのほうに向かい急に弄り出した。

「お前の思い通りになんかさせてやるもんか！茅場晶彦！」

ウインドウに高速で文字が動いている。

「間に合えっ!」

キリトは高速でキーボードを打ち終わるとコンソールがフラッシュしたと同時にキリトは後ろに吹っ飛ばされた。

「「キリト(くん)!?」」

「大丈夫か?」

キリトの元まで寄るとキリトの手には雫のようなものが

「キリトくん…それって…?」

「ユイが起動した管理者権限が切れる前にユイのプログラム本体をシステムから切り離してオブジェクト化したんだ……」

「じゃあそれって……」

「ユイの…心だ…」

キリトのその言葉にアスナは涙を流した。

キリトはアスナに雫状のクリスタルを渡す。

そのクリスタルを手で優しく包むと、胸の近くまで持ってきて抱きしめた。

—————

俺たちはその後教会に戻りシンカーを助けたことについてお礼を言われまた一晩世話になった。

そして教会を出て帰り道

「ねえキリト君、ゲームがクリアされたらユイちゃんはどうなるの？」

「ユイのデータは俺のナーヴギアのローカルメモリーに保存されるようにしておいたよ。」

「じゃあ向こうでも会えるんだね……私達の娘と……」

「それと同時にあたしたちの妹だからね！」

「ああ……俺たちの大切な妹だ。」

「わかってるよ、セツナ、リズ……巻き込んだんじやってごめんな。」

「巻き込まれたなんて思ってない。」

「あたしも。」

俺たちはそれぞれの家に帰っていった。

第十三話 終末―結末―

俺は先程まで血盟騎士団の本部にいた。

理由はヒースクリフとリボンズに呼ばれたからだ。キリトとアスナもいた。

用件はこうだ。75層の偵察をしていた。先遣隊がボス部屋を覗いてみたら跡形もなく消えてしまっていたということ。その部屋は結晶無効化エリアということ。

そのボス討伐に俺たちも参加してくれとの誘いだ。

俺たちは当然断る理由もなく、了承した。

集合は3時間後の75層コリニア市ゲートだ。

――

俺は一旦自宅に帰った。

リズベットに攻略参加の意思を伝えにだ。

「戻ったぞ。」

「おかえり〜、呼び出しってなんだったの？また勧誘？」

店の開店前の準備をせっせとしているリズベットが出迎えてくれた。

「いや、それがだな……」

俺は今回のボス攻略がいつもの数倍危険でそれに参加するということを伝えた。

「……そんなに危ないの？」

「ああ。死の確率は桁違いらしい、ヒースクリフの話では先遣隊が扉を入った瞬間やられたそうだし」

正直俺もどうなるかはわからない……

「……はあ……どうせ止めても行くんでしょ!? だから止めないわよ、その代わり約束して。」
だが……

「ああ、俺は死なない、生きて未来を切り開くからな。」

「うん……セツナがこの世界を終わらせて……約束よ……」

「ああ……」

涙目になって手を伸ばしてきたリズの手をとり、そのまま抱き寄せ再び口付けをした。

「そろそろ時間だ、じゃあ行ってくる。」

「気をつけてね。あとホラ、セツナ」

リズベットは俺に2本の剣を投げてきた。

「……これは？」

「セツナのGNソードを解析して作ったロングブレイド、ショートブレイドの新作よ。古いやつは置いていきなさい。」

「名前は……」[GNソードII]「……」

「それでやつつけて来なさい！あとGNソードも強化最大値までやっておいたから！」
「すまない……助かる。では行ってくる！」

俺はGNソードIIを装備し、走って75層に向かう。

「ホントに……死なないでね……」

—————

俺は集合場所についた。

そこにはキリト、アスナ、エギル、クラインが集まっていた。エギルが攻略に来るなんて珍しいな……

俺たちは集まって話をしているとぎわぎわとどよめきだした。

理由は明白だ、なんと今回の攻略にはヒースクリフだけではなくリボンスも来るからだ。

普段来たとしてもどちらか一方だが今回は2人の団長が参加とは……

「欠員は居ないようだな、よく集まってくれた。状況は既に知っていると思う。厳しい

戦いになるだろうが、諸君の力なら切り抜けられると信じている。……解放の日の為に！」

「「「おおおー！！！！」」」

「キリト、セツナ。君たちの《二刀流》、《セブンスソード》そして《TRANS—AM》……期待してるよ。」

リボンズがこちらに来て笑いながらそう言う。

「は、はい……頑張ります。」

「……………」

「ふふふ……」

リボンズは笑いながら去ってゆく……彼はいったい……

リボンズがヒースクリフのところに戻るヒースクリフは、片手に何かを持って手を挙げた。

「では、出発しよう。……目標地点の場所までコリドーを開く」

そうすると周りがざわざわする。ヒースクリフさんが持っていたのは回廊結晶だったのだ。このアイテムは一時的にゲートを開く便利な物だ。希少な為、NPCショップでは売られていないのだ。それをあつさりと使用するあたり、この人がどれだけ攻略に力を注いでいるのかというのが解る。

「では、着いてきたまえ」

ヒースクリフがそう言い、ゲートを出現させると俺達はそのゲートに足を踏み入れた。

ゲートを抜けたらそこはボス部屋の前だった。

「皆、準備はいいかい？ 今回のボスの攻撃パターンに関しては情報がない。基本的には僕たち血盟騎士団が前衛で攻撃を食い止めるのでその間に可能な限りパターンを見切つて柔軟に対応してもらいたい。」

「はいっ！」「」

リボンズがそう言うのと周りは声を揃え頷いた。

「では……………総員！突撃！！」

ヒースクリフがボス部屋のドアを開け、剣を抜きボス部屋の中に向かい、それに俺たちも続いた。

中はドーム型の造りだった。俺達が中央に到着すると急に扉が閉まった。

やはり情報通り…………

周りにはボスが見当たらずにただ静寂に包まれている空間だけであった。

俺は上空から嫌な殺気を感じた、上を見ても赤い光が不気味に輝いている。

「上だっ！」

すると上から巨大な骸骨のムカデが落ちてくる。

「固まるな！避けろ!!」

俺たちがいたところはちようど骸骨ムカデの落下地点だった。

俺の指事ではほとんどは避けれたが3人取り残された。

「うう……」

「ひい……」

「だ、だめだ……」

「止まるな！動くんだけ！」

リボンズが指事したときにはもう遅く、3人は骸骨ムカデの鎌に切られ、飛ばされた。

俺とアスナとキリトが受け止めようとしたが受け止める寸前にポリゴン状になって消滅した。

「……っつっ！」

「総員！あの鎌の攻撃には当たるな！おそらく即死効果がついているはずだ。」

ヒースクリフが叫ぶ。

「あの鎌を破壊する。アスナ、手伝ってくれ！」

「ならば私がもう一つを」

「俺たちは胴体への攻撃だ。行くぞ！」

キリト、アスナ、ヒースクリフが鎌を攻撃してるあいだに俺たちが胴体を攻撃する作戦だ。

30分は経つただろうかなんとか両鎌を破壊し、止めもさすことができた。

だが……

「何人……死んだ……？」

「11……11人だ……」

「……これからまだまだあるってのに今回でもうそんなにやられたのかよ……」

他のプレイヤー達が俺達の後に続くように口を開いた。恐らく今回でこんなに苦戦するということはこれから更に上の層も今回、もしくはそれ以上だということだ。

そんなことを考えているとふと、ヒースクリフに目がいった。俺たちとは違い平然と立っていた。しかもHPはまだグリーンである。

あんなに長時間の苦戦をしたというのにもだ……

俺はそれを見てヒースクリフの方に向かった。

キリトも来たので俺達は顔を見合わせる、俺そのまま隠蔽スキルを使いヒースクリフに斬りかかりにいった。

まずキリトが片手剣のソードスキル《レイジスパイク》を発動させるといきなりのことで驚いたヒースクリフさんが盾で防いぐ、俺は短剣のソードスキル《ラピット・バイト》を無防備な所に放った。

普通のならこれで体力が減るであろう。だがコイツの場合はそうではなかった。

《Immortal Object》

コイツの目の前にはその文字が浮かんでいた。

「システムの不死……？ どういうことですか団長……？」

アスナが驚きを隠せなく口元を手で覆いながら恐る恐るヒースクリフに問いかける

「……………」

だがヒースクリフはアスナの問いかけを無視し、俺とキリトを鋭い眼光で睥む。

「見た通りだ。不死属性が付けられるのは基本的にはNPC、かユイみたいな例外、でもこいつはプレイヤー……つまりこのような調整が出来るものは限られてくる……」

「……………」この世界でゲームを進めていく内にある疑問が芽生えた。あいつは今どこから俺達を観察して世界を調節しているんだろうって。…………でも俺は単純なことを忘れていたよ。それこそどんな子供でも知っていることを…………他人がプレイしているRPGを

傍から見ているつまらないものはない……そうでしょうヒースクリフさん。……いや……茅場晶彦っ！」

俺に続けてキリトが言う。

ヒースクリフの正体が茅場晶彦であると、その事実攻略組のメンバーからは驚きの声が出た。

「……なぜ気付いたのか参考までに教えてもらえるかな？」

ヒースクリフはまるで開き直ったかのように微笑み聞く。

「……前デュエルをした時、違和感を感じたんだ。普通のプレイヤーにはできない動作を……」

とキリト

「やはりそうか。あれは私にとっても痛恨だった。君の動きに圧倒されてついシステムオーバーアシストを使ってしまった……」

やれやれ困ったものだ。とヒースクリフはため息混じりに言う。

「そんな……ことって……」

アスナはショックを隠せないようだった。数歩後ずさり膝を折る。

ヒースクリフは周りを見渡しこう行つた。

「確かに私は茅場晶彦だ。付け加えれば、最上層で君達を待つはずだったこのゲームの

最終ボスでもある。……最終的に私の前に立つのはキリトくんだと予想していた。全十種類存在するユニークスキルのうち、『二刀流』スキルは全てのプレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者に与えられる。魔王に対する勇者の役割をさせるためにね。だが……」

ヒースクリフは俺のほうを今までにないほどに感情を顕にして見る。

「彼の邪魔のおかげでセツナくんまでも……私の前に……イノベーター……革新者に覚醒してくるとは……」

「イノベーター……だと……？」

俺がイノベーター？革新者？なんだそれは……

「それについては専門家である彼が詳しく説明してくれるだろう。」

混乱しているところに血盟騎士団の団員らしい男が

「貴様が俺達の忠実……希望を……よくも……よくもおおおおつ!!」

そう叫ぶと茅場晶彦に剣を構えて走るが茅場晶彦はなにやら見慣れないウインドウ、GM専用のウインドウだろう、を開いて操作するとそのプレイヤーは麻痺状態になった。

いや、正確にはそのプレイヤーだけじゃなく、俺とキリト以外が麻痺状態になったの

だ。

「君たちには特別に私の正体を看破した報酬を与えよう。今この場で私と戦うチャンス。無論、不死属性は解除しよう。そして見事倒した暁にはこのゲームをクリアとし、SAO、アインクラッド内の全てのプレイヤーを開放しよう」

ヒースクリフの提案にその場がさらにざわつく

「まさか茅場晶彦、ここで俺達と戦うというのか……？」

「俺達2人を相手に勝てると思ってるのか……？」

俺とキリトが納刀していた剣を抜く。

「いや、いくら私がシステムのアシストを最大限に生かしても君たちのコンビに勝てるとは思っていないさ、私の相手はキリトくん、君だ。セツナくんには彼が適任だろう」
ヒースクリフの目線の先には、黄緑色の髪でまるで世界を見渡すかのような目を持った美形の少年。

もうひとりの血盟騎士団団長。リボنزが立っていた。

「まったく……晶彦はせっかちだね……」

何を……言っている……？

「さすがに私もこれは想定外だった、プランが崩れたがここで勝てば何も問題は無い」
「それもそうだね、まったく……毎回毎回君のワガママに付き合う僕の身にもなってくれ

よ」

お前らは何を言っているんだ……？

「ん、みんなに紹介が遅れたね。そうさ、僕こそこのゲームを晶彦と共に開発した人間、いやこの世界での神！リボンズ・アルマークさ。」

リボンズは両手を広げくつくつと笑いながら俺やキリト、そして地面に付しているプレイヤータちに名乗った。

「キリトくとセツナくん……二人が私達に勝ったらゲームクリアにしよう……どうかね？」

「……いいだろう。ここで決着をつける」

キリトは黒と青の剣をギユツと握りヒースクリフ、茅場晶彦の前に立つ。

「リボンズ・アルマーク……この世界を作り……監禁した。その罪、俺が償わせる。」

俺はGNソードⅡを握りリボンズの前に立つ

「え……キリトくん、セツナくん!？」

「アスナ……俺は死なないから……君を置いて死なないよ。約束しよう。」

「キリトくん………」

「キリト！セツナ！やめろおおおつ!!」

「駄目だ！セツナ！キリト！」

クラインとエギルさんがそう叫ぶと俺はエギルに目を向けた。

「エギル、今まで俺達のサポートをしてくれてありがとうな。俺は知ってたぞ、お前が儲けた金を殆ど全部中層プレイヤーの育成に注ぎ込んでいたのを。それにプロポーズのとき何も知らない俺にアドバイスをくれてありがとう。」

「……クソツ……！セツナ……俺はっ……！」

俺がそう言うときキリトもクラインに話をしていた。

「クライン……あの時セツナと一緒にお前を連れていけなくて済まなかった……」

「て……てめえ、キリト！謝んじゃねえ！今謝んじゃねえよ！許さねえぞ！向こうで飯一つ奢ってからじゃねえと絶対に許さねえからな！」

「解った、約束するよ。次は向こうでな」

「俺たちから頼みがある。」

「言ってみたまえ。」

「無論負けるつもりはないがもしも俺たちが死んだらしばらくリズベットとアスナを死なないようしてもらえないか？」

「……………わかった。リボンズは？」

「僕も構わないよ。」

「キリト君駄目だよ！そんなの……………そんなのないよっ！」

アスナの叫び声がフロアに虚しく弔響する。

—————

俺はリボンズ・アルマークとのデュエルとの前に1つ聞いた。

「リボンズ・アルマーク……………イノベーターとはなんだ…？」

「くつくく…そうだね、まずイノベーターとはいずれ全ての人間が行き着かなければならないステージのことだ。革新者、そうとも呼ぶ。」

「行き着かなければならないステージ……………」

「僕はそれを探すためにもこのゲームの開始に合わせてわざわざ海外から来たんだ。そして2人見つけた……………それは君と…あとはP o Hという男だ。」

「P o Hだと!？」

「彼は素質はあつたんだが覚醒まではいたらなかった。せつかくイノベーターの概要を説明してあげたのに……………」

「貴様は……………貴様はいったい……………」

「僕かい？僕は人類最初のイノベーターさ……………そろそろデュエルを始めようか、晶彦の

ほうはもう始まつてるみたいだね。」

俺はキリトたちのほうを見る。

キリトの攻撃はことごとく茅場晶彦の盾に防がれてる。

「僕たちも始めようか、イノベーター同士による殺し合いを！」

リボンズが剣を抜刀して切りかかってくる。

俺はロングブレイドでその一撃を防ぎ、ショートブレイドですぐに反撃に出る。

「くっ！」

「甘いね！」

リボンズは回転しながらで避け、そのままの遠心力で剣を横に大振り。

俺はさっと身を屈めて剣の下に潜り、リボンズの足を払う。

が、リボンズは上に飛びそのまま剣を逆手に持ち替え両手で握り俺の頭上を狙い振り

下ろす。

咄嗟に反応して後ろに下がったことにより致命傷は避けたが切っ先が少し足を掠め

てしまった。

「はあ……はあ……」

たった数撃のやり取りなのに今までに味わったことのないほど神経をすり減らしていた。

「さすがはイノベイターといったところか、いい反応速度だ」

それに比べてリボonzは余裕そうにゆらりと体制を立て直す。

「いいよ、次は君からおいで」

指をクイックイと曲げ挑発してくるリボonz

「くっ……！ 舐めるな!!」

GNショートブレイドの先端を起点とし内蔵されていたアンカーを射出する。

「へえ、さすがはあの子の剣だ。オリジナルのGNソードよりもだいたい使い勝手が良さ

そうだね」

リボonzは関心したように言う。だがそれを一步横に避けた。

だが

「舐めるなど言つたはずだツ!!」

そのままGNショートブレイドを横に思いつきり振り、鞭のように撓らせてリボonz

を追いかける。

「へえ……そんな使い方もあるんだ」

だがリボonzはアンカーを真つ二つに切り裂いた。

ここまでは予想できていた……リボonzであれば初めて見せた技ですら反応してくる

と

だから俺は咄嗟にショートブレイドを捨て、ロングブレイドで突貫していた。

GNショートブレイドを捨てた瞬間全身の血液が一気に沸騰するかのような感覚を覚えたが気にせず突貫する。

「っ!？」

さすがのリボンズも今の攻撃には反応が遅れたのか避けずに防御の姿勢をとった。

リボンズの剣と衝突したロングブレイドはヒビが入り一気に耐久値が持つていかれた。

俺は一步後ろに下がり、ロングブレイドをブーメランのように投擲した。

リボンズはそれを剣を振り下ろし叩き割った。

その瞬間もまた先程と同じような感覚を得る。

「……なんだこれは……？」

「やってくれたね、なかなか速かったよ今のは……僕も本気を出さなきゃいけないみたいだね」

今まで本気ではなかったのか……末恐ろしいやつだ……

恐怖からなのかはわからないが口元が緩む。

残りは短剣2つと長刀2本、GNソード……

「遠慮なく行かせてもらおう!」

リボンズは先程までとは比べ物にならないほどのスピードで迫ってきて、剣を下から大きく振り上げる。そして瞬間逆手に持ち替え、後ろに反って避けた俺の胸元を狙って剣が振り下ろされる。

「くっ!?!」

横に転がるように避け、そのままの勢いで短剣を2本、リボンズの足に向かい投擲する。

「そんなもの!」

リボンズは一蹴するだけでその短剣を粉々に破壊した。

「うっ……!?!」

痛みとは少し違う高揚感が俺を襲った。

だがそんなことに狼狽している暇はなく、リボンズの猛攻は続く。

「はあああああッ!」

リボンズのほうも本気を出してきたのか、剣の筋が最初と段違いだ。

あまり慣れない長刀2本では捌くだけで精一杯だ。

見えてはいるのに

違和感に気付いたのは長刀が残り一本となった時だ。

リボنزの動きは最初の頃でさえ見極めるのは困難だった。だが今となってはどうだ、明らかにあいて最初よりも数倍速い。俺の反応速度なんてとうに越えている。だがなんであの高揚感と関係が？

「そうか、そういうことだったのか…」

俺は残りのHPがついにレッドゾーンに入ったときだった。

長刀が破壊され、残りはGNソードだけになった。

俺の膝は折れていた。最後の一撃を叩き込もうとしたリボنزは剣を振り上げる。

「これで文字通り、ゲームオーバーだ！」

剣を振り下ろされる瞬間、その剣はまるでスローモーションのようだった。

刹那の瞬間。リボنزの剣を持つ手が切り落とされた。

そしてリボنزの目の前にいたはずのセツナはリボنزの背に立っていた。

「な、なんだと……!?この僕が、神であるはずの僕が、イノベーターであるだけのコイツ

に……???

リボنزは驚きの顔を隠せない。そして後ろを見る。

そのセツナの背中が大きく、とても大きくリボنزには見えた。

そしてセツナは振り向き

そして俺は振り向き

「勘違いしていた。俺のユニークスキル、セブンソードは7つのスキルを繋ぐだけではない。7つの剣を繋げ段階を追って強くなるスキルだということだ」

「な、なんだと……?」

「……いや、これは違うな…剣が破壊された瞬間、色々な思いが伝わってきた……リズが必死になって作ってくれた武器、それにあの4本も手に入れたときのこと……見てないはずの光景や既に思い出すのが困難なほど昔のこと…ああ、これは人の想いを繋げるんだ…」

「何を勝手なこと……!!!」

リボنزの声に怒りが混ざり続ける

「君にその剣を与えたのも僕だ！君の力は僕のおかげであると言っても過言ではない！

まったく、強いな君は…さしずめ純粹種と言ったところかな…ふう…かなわらないな
…

リボンズの胸を俺のGNブレイドが貫通する。だが同時に彼の剣も俺を貫通した。

そして2人は粒子になって消えた。

ほぼ同時にキリトのほうも決着がついたらしいが、俺にはそつちを見る余裕はなかった。

「アインクラッド標準時 11月7日14時55分

、ゲームはクリアされました。繰り返します。アインクラッド標準時……」
俺の意識はそこで途絶えた。

俺が目覚めた場所は透明な床の上だった。

「ここは……う？ そうだ……キリトは……みんなは……う？」

俺は辺りを見渡すがみんなの姿が見えなかった。すると俺の目の前にいきなり《最終フェイズ実行中 現在60%完了》と書いてあるウインドウが表示された。

俺にはよく理解できず、ウインドウを無視する。すると後ろから声が聞こえた。

「セツナ……？」

この声はいつも聞いていた声、俺の心の中でいつも響いていた声……

「リズベット！」

リズベットが走ってくる。俺もリズベットに向かって走りお互いに抱きしめる。

「セツナ……約束通り、終わらせてくれたんだ。」

「ああ……終わらせた……全て……」

「いい雰囲気のところ悪いね……ちよつと話いいかな？」

そこには研究服を着た二人の男が立っていた。

ひとりは本などで良く見た顔だ。

もうひとりは先程まで俺が殺しあつてた人物の顔だ。

「茅場晶彦……リボンズ・アルマーク……」

俺はリズベットを後ろに庇うようにする。

「茅場晶彦……俺が宣言したことを覚えてるか？」

「ああ、私を殴り飛ばすんだろ？ つい先程も殴られたがな……」

「そうか……」

俺は思いつきり茅場晶彦を殴った。

リズベットはいきなりで驚いていたが

「これで気は晴れた……今このゲームはどうなっている……？」

「現在、アーガス本社地下5階に設置されているSAOメインフレームの全記憶装置のデータ完全消去の作業を行っている……あと10分ほどでこの世界の全てが消滅するだろう」

「あそこにいた人たちはどうなったの……？」

「それには心配は及ばない。先程”生き残った全プレイヤー”、6147人のログアウトが完了した」

「……死んだ者たちは……やはり……？」

「……彼らはもうこの世にいない……だから蘇らせることはできない」

「……………そうか……………」

「ゲームクリアおめでどう、セツナ。それとリズベットもセツナのサポートをよく頑張った。君のおかげでセツナは僕に勝てたんだから。」

「は、はあ……………」

「セツナ、君に僕の夢を託すよ……………じゃあ頑張ってくれたまえ……純粋種のイノバイターくん」

そういうとリボンズは風のように消えた。

「まったく……勝手な男だ。」

「キリトやアスナはどうなった？」

「彼らにも話をつけてある。……………では私もそろそろ消えるとするか……………」

茅場晶彦もリボンズと同じように風のように消えた。

俺とリズベットは崩れゆくインクラッドを見ていた。

「いろいろ……………あつたな……………」

「ええ……………」

「自己紹介……するか？」

「え？」

「自己紹介だ。現実で会ったとき誰だかわからなくなるだろう。」

「ふふふ、まさかセツナからそんなこと言ってくるとはね。」

「う、うるさい！」

「はいはい、素直じゃないのね。私は篠崎里香、多分今17歳よ。」

「俺は聖永 刹那、多分16歳だ。」

「年下だったのね。しっかりしてるから年上だと思ってたわ。」

「逆に俺もリズベツト……里香が年上だったとはな。」

「えへへへ……あつちでもずっと一緒に居ようね、刹那！」

「ああ……」

俺たちは肩を寄せあつたままインクラッドと共に消滅した。

フエアリイダンス編

第十四話 現実—はじまり—

俺の名は聖永 刹那、かつてあのSAOというデスゲームを生き抜いた男だ。

デスゲームから開放されて三ヶ月……だがそれは本来の意味の開放ではなかった。

まだ約300名のプレイヤーが現実世界に帰れてない。

俺の仲間、結城明日奈もそのひとりだ。

—————

「刹那〜！ごめん、待たせちゃったね」

「大丈夫だ、待つのに慣れてる」

「それはあたしがいつも待たせてるっていいわけ!?」

「……間違っではないかい」

俺はリズベツト……いや篠崎里香……里香と待ち合わせをして明日奈の見舞いに向かうところだ。そして今は病院に向かっている途中だ。

「まあいいわ、あたしは刹那よりお姉さんだから許してあげるわ」

「またそれか……」

里香は自分のほうが年上とわかると前よりも強気に出てくるようになった。

「今日は麗菜ちゃんは一緒じゃないの？」

「あいつは用事らしい。」

麗菜、俺の双子の妹だ。俺のことをあまり好いていないと思っていたが……まさかSAOから生還直後に抱きしめられるとは思わなかった。

たったひとり家族だ、2年も独りぼつちにさせてしまったのだから当然だろう。

以前、里香と会わせた。

「刹那にこんな美人の恋人なんてもったいないわね！」

とか言い出し、それを聞いた里香がいい気になって麗菜を可愛がっているのが現状だ。

そうこうしてるうちに病院についた。

—————

明日奈の病室の前まで来るとキリト……桐谷谷和人……和人が誰かと言いつ争ってるのが聞こえる、俺は念のため里香に金を渡し、ジュースを買いに行かせた。

「どうした和人？」

「せ、刹那……」

「おやおや……これはこれは……SAO開放の英雄が二人もお見舞いに来てくれるとは未来

の旦那としてとても誇らしいよ。」

「……………」

「未来の旦那…？ 和人、こいつは？ 明日奈の兄かなにかか？」

「僕の名前は須卿伸之…明日奈の将来の旦那だ。」

「ほんとなのか…？」

「こいつが勝手に言ってるだけだ。」

話を聞く限りこいつは変態だ、髪匂いをかぐなど…明日奈は確かに美人だからな…いつかの時みたいに変態が寄ってくるのか…もしかしてキリ…和人も変態なのか？

そう考えると須卿伸之が俺に話しかけてきた

「君のことも調べてあるよ、イノベイターくん。」

「…………なぜそれを！」

「リボンズ・アルマーク…知ってるだろ？」

「やつがどうした…」

「僕と彼は知り合いだね。彼の研究成果を盗んで見たりしてたのさ。」

こいつは変態に加えてクズなのか……

「研究成果を盗んで車で逃げてただけどね、そのとき交通事故なんか起こしちゃって

……しかも兄妹残して両親は死亡？こっちは責任問題になって大変だったつーの！」
なに……………？

「それは……………いつ頃だ……………？」

「んあ？確か三年くらい前だったな、迷惑な話だぜまったく……………勝手に死にやがってよおー！」

ハ……………ハ……………

俺は拳を強く握り殴りかかろうとする。

「刹那！落ち着けて！」

「貴様ア！貴様の自分勝手な行動のせいで！母さんは父さんはア！」

「なんで……………そうか……………そうかそうか！君があの子供なんだね…………………………君たち家族のせいで僕の人生大変だったんだぞ！」

こいつ……………謝るでもなく……………

「貴様！殺してやる……………母さんたちの苦しみ、思い知らせてやる！」

その時俺の目が若干だが黄色くなっていた。

「刹那落ち着け！今そんなことしてもリズが悲しむだけだぞ！」

「……………つ……………はあ……………はあ……………すまない……………取り乱した。」

和人の拘束から逃れる。

「とりあえず、式は一週間後の1月26日、この病室で行う。友引だから君たちも呼んでやるよ。せいぜい最後の別れを惜しんでくれ、英雄くんたち。」

そう言つて須卿伸之は病室から出ていく。

それと入れ替えにジュースを買つてきた里香が入ってくる。

「?なんかあつたの?」

「いや、何も無い。」

「ならいいけど、ホラジュース。キリト、アンタにも」

「すまない。」

「リズ、さんきゅーな。」

俺たちはその後明日奈の病室で談笑し、帰宅した。

俺と麗菜は家で夕食を食べていた。

「麗菜、もし母さんと父さんを殺した犯人がわかったらお前ならどうする?」

「なによ、急に?」

「お前の意見を聞きたいだけだ」

「うーん…ほんとなら母さんたちが受けた痛みの数倍の痛みを味合わせて殺してやりた

い……………けど、そしたら私もその人と同類になっちゃうから…公平に法で裁かれて欲しいわ」

「そうか…ありがとう」

「なんでそんなこと聞いたの？」

「なんでもない、気にするな。」

「そうだ刹那、あの…私もね…実は……やっぱなんでもない！」

「……………？おう……………？」

—————
食事が終わり、風呂も入り、あとは睡眠だけになった。

ケータイが鳴る。里香からだ。『おやすみ（ーー）』だそうだ。

まったく……

俺はそういうもなんだか悪い気はしなかった。こちらも『おやすみ、いい夢を見るんだぞ』と返信をする。

また数秒後にケータイが鳴る

いくらなんでもはやすぎないか？寝るんじやなかったのか？

と思いきやケータイを開いたら差出人は里香ではなく和人だった。

和人から……………？珍しいな、しかも画像付きか……………

画像を開いてみるとそれは驚きの画像だった。

これは……………アスナ!?

その画像にはアスナと思わしき人物の後ろ姿がぼんやりと写っていた。

続いてメールには『リスには内緒で頼む、明日の午後にエギルの店で落ち合おう。』と書いてあり、俺もそれに『了解した。』と返信した。

それにしてもあの画像は……………

第十五話 失敗―やらかし―

次の日、俺はエギルの店、Dicey cafeに向かっていた。

俺は今回のことになり……里香を巻き込みたくはなかったため内緒で行動してる。

店に付くとすでに和人とエギルが話をしていた。

「おっす、刹那」

「エギルも久しぶりだな。」

俺は店のカウンターに付いてコーヒーを注文する。

「はいよ、さて揃ったな。じゃあ話をすすめるぜ」

エギルはコーヒーを俺に渡した。

エギルのコーヒーはうまいからな……少し苦いが……

「あの写真についてだが……まずこれを見てくれ」

エギルが机の上にゲームソフトを置いた。

A l f f h e i m O n l i n e ?

「これは……?」

「何かのVRMMOか?アル……アル……オンライン……」

「アルヴヘイム・オンライン（だ）！」

「そう、それ！それでそのアルヴヘイムがどうしたんだよ？」

「意味は妖精の国って意味だ」

「妖精？ってことはまったり系か？」

「いや、それがそうでもないらしい。」ド「スキル制、プレイヤースキル重視、PK推奨、それにレベルが存在しない。そもそもって各種スキルが反復使用で上昇するだけで、育つてもヒットポイントが大して上がらないそう。戦闘もプレイヤーの運動能力依存でソードスキルなし、魔法ありのSAOってとこだな」

「PK推奨……だと……？」

「おい刹那、そんなに怖い顔するな。それがこのゲームの正しい遊び方なんだから、プレイヤーはキャラメイクでシルフ、サラマンダー、ウンディーネ、スプリガン、ケットシー、インプ、プーカ、ノーム、レプラコーンのそれぞれの妖精の種族を選ぶわけだが、違う種族間ならスキルありなんだとき。」

「……ソードスキルなしというのも辛いな」

「それにしてもよく売れたな、聞くからにしてマニア向けだろうに。」

キリ……和人がそう言うのとエギルはにやりと口元を緩ませる。

「そう思うだろ、俺も思ってた。だが今これが大人気なんだ。なぜだと思う？」

「種族間で競争するという名目でPKをするからか？」

「刹那……いつまで引きずるんだ……違う、正解は『飛べる』からだ。」

「『飛べる』？」

「ああ、それはお前らが想像してるようにな。妖精だから羽根がある。どうやらフライト・エンジンとやらを搭載してってるらしくてな。初心者はスティック型のコントローラーを片手で操作して飛ぶんだが、慣れるとコントローラー無しで自由に飛び回れるんだとさ」

飛べるのか……それは確かにPK推奨という点を差し引いても楽しめそうだな。……
そうだ！忘れるところだった。

「エギル、本題の写真について教えてくれ。」

「そうだ、このゲームと明日奈の何が関係あるんだ。」

「まあまあ、ものには順番ってものがあるだろ。」

エギルは一息置き

「アスナは……このゲームの中だ。」

ゲームの中……？

エギルはパッケージを裏返し書いてある大きな木を指さし

「世界樹、って言うんだとき。プレイヤーの当面の目標はこの樹の上にある城に他の種族より先駆けて到着することだそうだ」

「なんで上にある城に行くんだよ？」

「確か妖精王に唯一無二の妖精に変えてもらうだとか……」

「……飛べるなら飛んで行けばいいのではないか？」

「いや、飛行にも滞在時間というものがあるものがあつて無限には飛べないらしい。だからこの樹の一番下の枝にはたどり着けない。……でもどこにも馬鹿な考えを持つやつがいるもんで、体格順5人が肩車して多弾ロケット方式で樹の枝を目指した」

ロケット方式か……

俺は想像して笑つてしまった。

「それでそいつらはどうなったんだ？」

「見事に目論見は成功して枝にかなり肉薄した。ギリギリで到着まではできなかつたそうだが5人目が到達高度の証拠にしようとして写真を何枚も撮つた」

「なるほど……その写真の一部に明日奈が移りこんだ……と？」

俺は昨日キ……和人から送られてきた写真をエギルに見せる。

「そうだ、そのプレイヤーは枝にぶら下がる大きな鳥籠を見た。その中には人がいた。」

と言っているらしい。……………どうする確証はないぞ？それでもアスナを……………他の30人のプレイヤーを助けに行くか？」

「無論だ！」

「ああ、俺はアスナを完璧には助けられなかった。今度は絶対助ける。」

「ふっ……………そう言うと思ってたぜ。ほらよ」

エギルはカウンターのの上にAlfheim Onlineのゲームソフトを2個置く。

「ほらよ。どうせ刹那も参加すると思ってたからよ、特別に用意してやったんだ。」

「すまない……………あとこれは……………」

「あいつには内緒だろ？わかってるって。その代わり、しっかりアスナたち300人のプレイヤーを助けてこい、そうでなきゃ俺たちの戦いは終わらねえんだ。」

「……………ほんとに何から何まですまない。キリ……………和人！行くぞ！」

「お、おい！刹那！」

俺は店から走って出ていき家に急いで戻った。

家についてからケータイに『コーヒー代はつけとくぞ。』とエギルからメールがあつ

た。

……悪いことをした。

俺は夕食を食べ終わり風呂を出た。

「麗菜、風呂空いたぞ。」

「えー？はやしぎない？まだ7時よ？」

「すまない、このあと用事があるのでな。」

「用事？どっか行くの？」

「いや、部屋にいる。」

「何するのよ？」

「すまない、言えない。あと3時間くらいは呼びかけても対応できない。そこは了承してくれ。」

「らーじゃっ♪」

俺は自室に向かう。

「…刹那が3時間手が離せないってことは私もアレが出来るわね。」

俺は今部屋にいる。

「まさかまたこれを被るとは……」

エギルの話ではナーヴギアでもプレイ出来ると言うのだが……

「二度と被らないって決めてたのに……仕方無い！」

俺はナーヴギアを被る。

「リンクスタート！」

俺の現実の意識が弱まり目の前を虹がかける。

だんだんと意識がはつきりとしてくる。

この感じ……懐かしい……

俺が感傷に浸つてるとすぐに初期設定が始まる。

「名前はSetunaで……問題は種族か……このゲームはPKがあるからな……戦闘向きの方がいい……小回りが効いて……早く動けるやつ……」

俺は説明文、だけ、を見てケットシーという種族に決めた。

それが失敗だった……まさかこれから色んな意味で注目を浴びるとは……

これからケットシー領のホームタウンに転送するとアナウンスがあった。

……これからまた始まるのか……俺の戦いが……

そう思うと初期設定の場所から気付いたらホームタウン上空に転移されていた。

「ここが妖精の国……Alfheim Online……」

新しい冒険に胸を踊らせてると突然目の前にノイズが走る

「これは……………!?!」

俺は為すすべもなくノイズに飲み込まれる。

—————

ノイズから開けるとそこは森の中だった。

落下地点には人がいた。

「くそっ! 退いてくれ!!」

「えっ!?!」

下にいた人物とぶつかってしまふ……………

「す、すまない……………こちらの注意不足だ……………」

「いてて……………」

「大丈夫ですか、パパ?」

「うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとなユイ。」

ユイ……………パパ……………それにこの声……………

「お前……………和人か……………」

「ん？この声、お前刹那？」

俺たちはお互いに顔を合わせる。

「刹那、遅かつ……ぷっはははははは」

和人……キリトが急に笑いだす。

何があつたんだ？俺の顔になにかついてるのか？

「もう！パパ！笑つたら失礼ですよ！こんなに可愛いじゃないですか！」

可愛い？ユイも何言ってるんだ？

「はははは……いやだつてよ、まさか刹那がこれを選ぶとは……はははははは！」

「お、おい……どういふことだ？説明してくれ。」

「お前鏡見てみるよ……ああ笑つたあ……」

「はい、お兄ちゃん鏡です。」

「すまない。」

俺は鏡を見た。鏡を見るとそこには少し金髪がかった黒髪に猫耳をつけ、尻には尻尾が生えている

「これは……確かに笑われるわけだ……」

里香に見せたら笑われるな……

「刹那は……なんだ、お前またセツナにしたのかよ」

「そういう和人もキリトのままではないか」

「アスナにはこのほうがわかりやすいと思っただよ。」

「俺もそういうことだ。」

「確かに今の黒猫状態を見るとS A O時代の《雪崩》様とは思えないからな。俺も声とプレイヤーネームでやつと認識出来たレベルだ。」

「見た目はキリトほど変わってないはずなんだが……」

「猫耳と尻尾がインパクト強すぎなんだよ……モデル見なかったのか?」

「すまない……説明文しか読んでなかった。」

「あ、お兄ちゃんもエラー検知システムに反応する前にアイテムの整理してください。」

「了解した。」

表記不明になっているアイテムを売っているとひとつだけあった。

「これは……?」

オブジェクト化してみるとそれはS A O時代、里香……リズベットから貰ったマフラーだった……

「またここでも俺を支えてくれるのか……お前は……」

俺は残りのアイテムを全て消去した。

「セツナ、お前ステータスはどうなってる？」

「ステータスだと？」

俺はキリトに言われたとおりステータスを確認する。

「なんだこれは……………」

俺のステータスは

片手剣10000

探検10000

刀10000

開幕早々化け物だな…………

「キリト、お前もか？」

「ああ。」

俺たちは改めて自分のチートさを痛感する。

第十六話 大空—飛翔—

俺たちはユイに空の飛び方を教えてもらっていた。

「左手で何かを握るような形を作ってください。」

俺とキリトは言われたとおりにした。すると左手にコントローラーのようなものが現れた。

「コントローラーのレバーを下で上昇、上で下降、左右で旋回、押し込みで加速です。」

俺はユイの言ったようにレバーを下に傾けてみた。するとみるみる上昇する。

キリトも同じようにして飛んでいる。

「これは……なかなか……楽しいな……」

「ああ……まったく……」

俺たちはそれからしばらく慣れるのに時間がかかった。

「いやっほ————！」

キリトはやつと慣れて自由に飛び回れるようになった。それで嬉しいのかはしゃいでいるんだ。

ちなみに俺は羽の休憩時間だ。

「ん？おいセツナ！ユイ！あつちで戦闘やってるから見に行こうぜ！」

キリトは飛んでる時に戦闘をみたそうだ。

「おいキリト、お前そろそろ羽の「先に行つて見てるからなく」お、おい！」

まつたくあいつは……もう一分も残つてないぞ……

「ユイ、俺の肩に乗れ。」

「はい！」

俺もキリトを追いかけて飛んでいく。

—————

1人のシルフが1人のサラマンダーと戦闘中、もうひとりのシルフが3人のサラマンダーを相手にしている。

「ごめん！リーファちゃん！」

1人のシルフが1人のサラマンダーと共に炎のようになって消えた。

「レコン！くっ！」

リーファと呼ばれたシルフは森の中に降りた。

「あつはははは！逃げようとしてる〜♪」

サラマンダーの少女がシルフの少女、リーファを追いかけると残りのサラマンダーも

続いて追いかける。

だが多勢に無勢、リーファが追い詰められるのも時間の問題だ。

「よつとー！」

サラマンダーの少女がリーファに切りかかる。

「くっ！」

リーファは剣で受け止める。

「無謀だよ、たったひとりでネーナたちに挑むなんてさー！」

リーファとネーナという少女の打合いが激しすぎて周りのサラマンダーもうかつに近づけない。

「あはははは！弱い弱い♪」

「太刀筋が見えない……」

ネーナの怒涛の剣激でリーファが押し負けてくる。

「あの子すごいな……」

キリトは上空でネーナとリーファの打合いを見ていた。

「あそこまでの剣技のやつはSAO時代でもそうそういないぞ……受けてるほうも相当の実力者だな。……いや〜レベル高いな〜……正直舐めてた……」

キリトの羽が光だし、もうそろそろ限界時間ということにキリトは気付いていない。「お、セツナも来たな。」

キリトは俺を見つめる。

「おいセツナ〜！つてうわあああああ！」

俺に手を振った瞬間羽の限界時間が来て、地上に落下する。

—————

リーファは木まで追い詰められていた。

リーファのHPは半分以下まで削られていた。

「あー、私汗かいちゃった。先に領地に帰ってるからあととはよろしくね〜♪」

「はいっ！」

そう言つてネーナは飛んでいってしまった。

「待て！勝負はまだ……！」

「おいおい、お嬢ちゃん。ネーナ様にボロボロにやられてたじゃねえか？殺されなかつただけでもありがたいと思えや。」

「どつちにしろ俺たちが殺すんだけどな!？」

「……っ！……どつちかだけでも道連れにしてやる！」

リーファが剣を構えるとバキバキバキバキと枝が折れて何か落ちてきた。

「うおおおおお!!」

バキバキバキバキつと枝を折って下に落下して行った。

「パパ!」

「キリトのバカ……」

「お兄ちゃん追いかけてみましょう!」

「ああ、当然だ。」

俺もキリトを追いかけて下に降りる。

「……………」

リーファは落ちてきた人物を見る。

「羽の限界時間を忘れてたぜ……イテテ」

「あれだけはしゃいでいるからだ。」

俺もキリトを追いかけて下に降りてくる。

「このコントローラーってやっぱり使いづらくないか?」

「確かに、飛んでいる状態での戦闘には向かなそうだな。」

「ちよつとあなたたち！初心者がこんなところ来るんじゃないわよ！死にたいの！？逃げて！」

リーファが俺たちに叫ぶ。

「アイツら素人だぜ、先に狩っちゃまうか？」

「雑魚狩りなんてダサイだろ？」

俺はそれを聞いて

「手負いの女を大の男が囲むのもダサイと思うがな。」

「ねえ、アレって敵？切っちゃっても大丈夫だよね？」

「え……？まあ……」

するとサラマンダーの男が

「素人がうるせえんだよ！」

素晴らしい槍を構え俺に突っ込んで来た。

俺は、いつものように、GNソードを展開するように腕を振ったが……

「しまった！武器が!?!」

GNソードは当然あるわけなく空振りに終わる。しかも今の俺は手元に何の武器があるかも把握し忘れていた。

「へっ！武器も持ってねえのかよ、やっぱり素人だな！」

槍を俺にさしてこようとするが

「武器がないなら殴ればいいのか。」

槍を掴み、サラマンダーの男の顔に数発パンチをお見舞いし、もうひとりのサラマンダーの男に向けて投げた。

「キリト!」

「はいよ!」

サラマンダーの男たちがぶつかって身動きが取れない一瞬のうちに俺の合図でキリトが切りかかった。

「ぐあああつ!」

サラマンダーの男たちは消滅し炎のようになった。

「よくやった。」

「セツナもな!」

俺たちはハイタッチをした。

「パパ! お兄ちゃん! ナイスコンビネーションです!」

「つ、強い……なんなの……初心者じゃないの……?」

キリトはリーファのところに行く。

俺は自分の今使える武器を確認する。

「おい、セツナ！しつかり見とけよ！」

「すまない。でもいざれバレることだ。」

「パパあ……？」

リーファが俺たちに近づいてくる。

「い、いやあこれは……」

「ねえ、それってプライベートピクシーってやつ？」

「……プライベートピクシー……？」

キリトが俺に助けてくれと目線で訴えてくる

「……俺に聞くな……」

「ま、まあそんなとこだ」

「あとなんであなたはケットシー選んだの？男の人でケットシーなんて変態のイメージしかないんだけど……それにあんまり見たことないし……」

「……！そうなのか!？」

「やっぱり男の猫耳は誰も特しないってことだよ。」

「……今からでも変えられないのか……？」

「大丈夫ですよ！お兄ちゃん似合ってます！」

「似合ってるか似合っていないかで言ったら……まあ似合ってるんじゃない？」

リーファとユイに励まされて余計泣きたくなってきたな…………

「…あとなんでスプリガンとケツトシーと一緒に行動してて、しかもこんなところにいるわけ？ 領地はもつと遠いところでしょ？」

「道に迷って……」

「同じく」

「ぷっはははは、あなたたち方向音痴すぎでしょ、流石にそれはおかしいって」

リーファは笑って言う。

「ともかく助けてくれありがとう。私はリーファ」

「俺はキリト、こっちはユイ」

「俺はセツナだ」

俺たちは自己紹介をする。

「ねえ…キリト…くん、セツナくん…このあと一杯どう？ お礼したいんだけど？」

「俺は構わない。」

「俺も、実はいろいろ教えてくれる人探してたんだ。」

「いろいろ？」

「この世界のこと、特にあの世界樹についてとかね。」

「いいよ、私こう見えても結構古参なのよ？ じゃあ結構遠いけど北に中立の村があるか

「らそこまで飛びましょ。」

「スイルベーンという街のほうが近いのではなかったか？」

「はあ……ホントに何も知らないのね、あそこはシルフ領だよ？」

「それがなにか問題でもあるのか？」

「ああ、街は街だろ？」

「…………シルフ領ではあなたたちはシルフを攻撃出来ないけど逆はアリってこと」

集団リンチってやつになりかねないってことか……

「だが領地に入り次第攻撃されるということはないはずだ。」

「そうだよ、それにリーファさんもいるしな。」

「リーファでいいわよ、そこまでいうなら私は構わないけど命の保証は出来ないわよ。

「じゃあ飛んでいきましょ。」

そう言うのとリーファの背中から緑色の羽が生えてくる。

「あれ？リーファは補助コントローラー使わないのか？」

「まあね、君は？」

「ちよつと前にこいつの使い方を覚えたくらいだ。」

「俺も同じく。」

「随意飛行はコツがあるからね、コントローラーを出さずに後ろを向いてみて」

「お、おう……」

リーファはキリトの後ろまで行きキリトの背中を触る

「今触ってるのわかる？」

「うん」

「ここから仮想の骨と筋肉が伸びてると想定して、それを動かすの」

「仮想の骨と筋肉……」

キリトの羽がカサカサ動き始める。

俺も試してみる……仮想の骨と筋肉……こうか……？

「リーファ、出来たぞ」

俺は多少ぎこちないが飛ぶことは出来た。でも飛べればすぐ慣れた。

「セツナくんはやいね、あとはキリトくんもその動きをもっと強く」

「くっ……」

キリトが頑張っているとリーファが後ろからキリトを押す。

「あああああああ！」

キリトはほぼ垂直に登ってってしまった……

「やば！キリトくん！」

「パパー！」

「うああああー！」

キリトはまだ制御が出来てないみたいで右往左往している。

……あいつが慣れるまで俺も練習しとくか

俺はキリトが落ち着くまで色んな飛び方を試してみた。

「おおー！これはいいな！コントローラー使つてた時よりも自分で飛んでいる感じがする
！」

「でしょ、きみもなかなか筋がいいよ！」

「あれ？お兄ちゃんはどこ行つたやつたんでしよう？」

「セツナくん？そーういやさつきから見ないわね……」

「俺ならここだ……」

服のところがどこに木の枝などが刺さっていた。

「うわっ！」

「お兄ちゃんどうしたんですか？」

「どのくらいの速度で急降下から急上昇できるか試してたら急上昇の際に木に引っか
かつたんだ……」

「そうなんだ……じゃあセツナくんも来たし、行こっか。最初はゆっくりでいいよ」
「もつとスピード出していいぜ」

「俺も限界速度をまだ試してないからな、もつと速くても構わない。」

「ほほう……」

リーファは速度をあげる。

「これが最速？」

だが俺とキリトは余裕でついていく。

「……どうなっても知らないからね」

リーファはさらに速度をあげる

だがそれにもついていく。

「……………くっ！」

「どうしたキリト、もう限界なのか？」

「うるせえ！お前は《TRANS—AM》で高速に慣れてるかもしれないけど俺は慣れてないんだよ！」

「ふあ……パパもう私は限界です……」

ユイはキリトの胸ポケットに入る。

「だが俺も今のところはこれが限界だな。」

リーファが俺たちのところに来る。

「このスピードに耐えられたのは君たちが初めてかも。」

すると目の前にシルフ領、スイルベーンが見えてきた

「ここがスイルベーン……」

「おー、ついたな。」

「真ん中の塔の根本に着陸するわよ。」

「了解した。」

「……………え？」

「……………キリトくん……ランディングの仕方わかる……？」

「……………わかりません……」

「ええくと………幸運を祈るよ！」

「頑張れ、キリト」

「おい、お前ら！嘘だろおおおおお！」

俺とリーファは無事着陸出来たのだがキリトはもう墜落というレベルの着陸をした。

「お前ら……ひどいよ……」

「まあまあ、ヒールしてあげるから。~~~~~」

そう言うリーファは何かを唱え始めた。

唱え終わるとキリトのHPは回復していく

「これが魔法か……」

「高位の回復魔法はウンディーネじゃないと使えないけど、必須スペルだから君たちも覚えたほうがいいよ。」

「種族によって補正があるのか、俺たちのはどんなのが得意なんだ？」

「スプリガンはトレイジャーハントと幻惑魔法かな、どっちも戦闘には不向きだね、ケツトシーは俊敏性に長けて、モンスターの<テイミング>に長けた種族だし9種族で最も視力が良いから使いようによってはすごく強いと思うよ。」

「知ってる、それだけで選んだためにこんな醜態を晒すはめになったんだ。」

他種族ということもあると思うがやはり男のケツトシーは珍しいのか周りの視線が集まっているのがわかる。

「それにしてもここがシルフの街か、綺麗なところだな。」

「でしょ？」

「リーファちゃん、リーファちゃん！無事だったんだね！」

シルフの少年が走ってくる。

「ああ、レコン」

名はレコンというらしい。

「よかったリーファちゃん……ってスプリガンにケツトシー!?!」

レコンは数歩下がり剣を取る動作をする。

「別にいいのよ、この人たちが私を助けてくれたんだ。こいつはレコン、私のフレなんだ。」

「よろしく、俺はキリトだ。」

「セツナだ。よろしく頼む。」

「どうもどうも………っていやいやいや！そうじゃなくて大丈夫なの!? スパイとかじゃないの!?!」

「大丈夫大丈夫、スパイにしては2人ともお馬鹿だし」

「ああ、ひつでえ」

「キリトは知らんが俺は違う。」

「……シグルドたちはいつもの酒場で席取ってるよ……?」

「あ、そっか………私、今日はいいや！ごめん！」

「ええっ!? 来ないの!？」

「うん、お礼にキリトくんたちに一杯奢る約束してるんだ。行こ。」

リーファはキリトの手を引く。

「リーファちゃん……」

「レコン、先に約束していたのにすまない。」

「え、いや……その……」

俺はレコンにわびを入れてからキリトたちを追いかけた。

—————
俺たちは人気の少ない酒場に入って注文をした。

品物が運ばれてくるとキリトが

「さっきのはリーファの彼氏?」

「恋人さんなんですか?」

「はああ!?! 違うわよ! 単なるパーティーメンバーよ!」

リーファは顔を赤くする。

「それにしても仲良さそうだったな。」

「リアルでも知り合いつていうか……学校の同級生なの、それだけよ……んん! じゃあ改めて、助けてくれてありがとう!」

リーファと俺たちは乾杯をする。

キリトは数口飲んでから

「えらい好戦的な連中だったな。ああいう集団PKってよくあるのか？」

「もともとシルフとサラマンダーは仲が悪かったんだけどああいう集団PKが起きたのは最近よ、近いうちに世界樹攻略でも狙ってるんじゃないかな……？」

集団PK……やはりこの世界にも歪みは……

「世界樹攻略……そうだ、世界樹について教えて欲しいんだ。」

「そーいやそんなこと言ってたね、でもなんで？」

「世界樹の上に行きたいんだよ……」

「それは全プレイヤーがそう思ってるよ……というかそれがこのゲームのグランドクエストだもん。」

「それはどういうことだ？」

「滞空制限は知ってるでしょ？どんな種族でも連続して飛べるのはせいぜい10分が限界なの……でも世界樹の上にある神殿に言っておベイロンを最初に謁見した種族は全員アルフっていう種族に変わっていつまでも自由に空を飛べるようになる。」

「なるほど、確かに魅力的な話だな。」

「ではどうやって上に行くんだ？」

「根本が大きなドームになっていてそこから上に行けるんだけどドームを守っているNPCガードイアン軍団がおっそろしいほど強いよ。オープンして1年経つのにクリア出来ないクエストってありだと思う?」

「キークエを見逃しているか単一の種族だけじゃクリア出来ないようになって……とか」

「いい感じしてるのね、クエストのほうは今の躍起になって探してるけど後者だとすると絶対無理ね。」

「無理?なんで?」

「だって矛盾してるもの、最初に謁見した種族だけが変えてもらえるのに、他の種族が手伝うと思う?」

「じゃあ事実上攻略は不可能ってことなのか……」

「私はそう思う、でも諦めきれないよね、一度飛ぶ楽しさを知っちゃうと……例え何年かかっても「それじゃ遅すぎるんだ!」え?」

「キリト、落ち着け……気持ちにはわかるが今は落ち着け……」

「パパ……」

「……ごめん……俺たちはどうしても世界樹の上に行かなきゃならないんだ……」

「なんで……そこまで……?」

「人を探してるんだ。」

「どういうこと……?」

「簡単には説明出来ない……」

キリトはうつむく

リーファはそれを見て何かに気付いたようだ。

「ありがとリーファ、色々教えてもらって助かったよ。」

「……」

リーファの反応がなかったためキリトは席を立ち、去ろうとする。

がリーファはキリトの手を掴み

「待ってよ、世界樹に行くつもりなの?」

「ああ……この目で確かめないと」

キリトが立ち去るため、俺もついていく

「無茶だよそんな……すごく遠いし、強いモンスターもいっぱい出るし……そりや君たちも

強いけど」

「……」

「いいのか?」

「ああ……」

キリトと俺は店を出ようとする

「じゃあ！私が連れてってあげる！」

「会ったばかりのやつにそこまで頼んでは……」

「世界樹までの道のりは？」

「うっ……」

「ガーディアンはどうするのよ!？」

「……俺たちでなんとか……するからだから君は……」

「いいの！もう決めたの！」

リーファはそっぽを向いてしまう。

一瞬リーファの顔が赤かったような気もするが……

「あの……明日もイン出来る？」

「ああ……うん……」

「じゃあ明日の3時にここでね、私はもう落ちるから、ログアウトには上の宿屋を使ってね。じゃあまた明日……」

リーファはログアウトボタンを押そうとする

「待って…………ありがとう……」

「うん……」

リーファはログアウトした。

「じゃあ俺もそろそろ落ちるわ、セツナはどうする?」

「俺もそろそろおしまいにする。」

「じゃあまた明日」

「ああ、また明日」

俺たちはログアウトした。

第十七話 世界樹―目的地―

「刹那、刹那起きなさい」

優しい声……懐かしい声……なんだかすごくいい気持ちだ……

「おい刹那、起きなきや父さんがお前の好きなトンカツ食っちゃまうぞ？」

「この声もだ……ん？父さん……？」

「とう……さん……？」

「なんだ刹那、寝ぼけてんのか？」

「刹那はお寝坊さんね、麗奈はとっくに起きてご飯食べちゃったわよ？」

「父さん、母さん！」

「どうしたんだよ刹那？そんなにトンカツが欲しいのか？」

「よかった……今までの夢だったんだね！」

「もう馬鹿なこと言っていないでさっさとご飯食べちゃいなさいよ」

「ああ、わかった！」

「ところがギツチヨン、刹那……お前が遅いから母さんのトンカツは俺が食っちゃまった。」

「なに!？」

「わりいなあ刹那！なはははははは」

「悪い冗談はやめてあげてください、ホラ刹那。あなたのぶんはまだここにあるわよ。」

「ありがとうございます。」

「母さくん、私のTシャツ知らない？」

「部屋のダンスにまとめて入れておいたはずだけど？」

「んー？もう一回探してみるわね」

懐かしい……この光景のすべてが……これが俺の求めていた世界……たったひとつの俺だけの世界

「おい刹那、はやく食っちゃまえよ？今日から麗奈の入学祝いで軽井沢まで旅行すんだからよ」

「そうか、わかった。」

俺は急いでご飯を食べた。

そして出発の時間、

「よし全員車乗ったな、行くぞぞ」

運転が父さん、助手席に俺、後部座席右に母さん、左に麗奈、そう乗った。

車はちょうど高速道路に乗る手前の大きな十字路で信号待ちをしていた。

「高速道路乗ったらすぐだからな。」

「よかったわね、麗奈。ずっと行きたがってもんね」

「うん♪」

「なぜこの時期に軽井沢かよくわからんがな……」

「刹那も連れねえこというなって俺だつてせつかく有給とつてきたつてのによお、久しぶりに家族4人で楽しもうや」

「ああ……そうだな。」

このままずっとこの幸せな時間が続けばいいのに……俺はそう思った。
信号が青になり車が発進する、すると……

キキキキ……！

右側から暴走車が突っ込んで来た。

………しばらく目の前が真っ暗だった。

そして何かが俺の上に乗ってるのを感じる……目を開けてそれを確認してみると……
いろんなところから出血し、骨なども何本か折れてる……父さんだった……

「父さん！」

「お前らが……無事で……よか……つ……た……元気……で……な……」

父さんの身体がさらに重くなった。

「父さん！父さん!!」

「母さん！お母さん!!」

後ろで麗奈も叫ぶ、おそらく父さんと同じように麗奈を庇ったんだろう。

クソ……………これじゃあ……………

そのとき俺には暴走車の運転手が見えた。

その男は俺も知っている人物……………そう……………須郷伸之であった……………

「あいつ……………!」

すると須郷は不機嫌そうな顔をして逃走した。

「待て! 貴様! よくも父さんと母さんを! 返せ! 返せええええええええ!」

俺は目が覚める。目の前には心配そうなかおでこちらを見る麗奈の姿が

「……………大丈夫……………?」

「……………ああ……………大丈夫だ……………心配してくれてありがとう……………」

麗奈の頭を撫でると麗奈は少し赤くなっていた。

「子供じゃないんだからやめてよねっ! あと私これから中学行ってくるから」

「麗奈は今高校生だろ？」

「後輩が私の高校受かったから会いに行くの！」

「お前自身学校はどうするんだ？」

「今日は休校日！昨日も話したでしょ!?!じゃあ私は行くから、あと何かあったらケータイにメールか電話して、じゃあ行つてきます！」

「行つてらっしゃい。」

――――
場所は変わって中学校

「リーファちゃん！」

「学校ではその名で呼ばないで！」

「じゃあ直葉ちゃん！」

「ふん！」

直葉は持っていた竹刀袋で叩く

「うう……桐々谷さん……」

「……それでなんのようかしら？長田くん？それに推薦組の君がなんで学校に来てるの？」

「桐々谷さんだつて推薦組じゃないか」

「私は剣道部の先生に呼ばれたの」

「そうなんだ……それより桐々谷さん！今日みんなと一緒に狩りに行かないか？つてシグルドが」

「う〜ん……パスで」

「え!?!なんで？」

「先約があるのよ、だからごめん」

「もしかして昨日のスプリガンとケットシーの「す〜ぐ〜は〜!!」？」

1人の少女が直葉に飛びかかる。

「うわっ！麗奈先輩!?!」

「やつほ〜！直葉合格おめでとう〜」

麗奈は直葉に抱きつく。

「先輩やめてくださいよ〜、恥ずかしいです。」

「いいじゃんいいじゃん♪」

「あの……桐々谷さん、この人は？」

「私の剣道部の先輩よ、受験のこととかいろいろ相談してたの。」

「どうも〜聖永 麗奈だよ、よろしくね♪とところで直葉、この人直葉の彼氏かなんか？」

「違いますよ。」

「うっ……」

直葉があまりにきつぱり言うので長田はダメージをうける。

「そうよね、お兄ちゃん大好きな直葉がそんなことありえないよね」

「ちよ、麗奈さん！」

「あははははは」

「そういう麗奈さんも双子のお兄さんでしたっけ？大好きじゃないですか？」

「ち、違うわよ！あいつは……その……違くて……」

麗奈は顔を赤くしてもじもじしてる

「そ、そうだ！直葉たちはなんの話してたの？」

「……桐々谷さん、言っちゃってもいいかな？」

「うーん、この人は大丈夫よ。VRMMOのALOについて話してたんですよ。」

「もしかしてAlfheim Onlineのこと？」

「そうです。」

「それ私もやってるよ？」

「ほんとですか!？」

「うん、確か去年の今頃かな？受験終わって息抜きに買ったからさよ」

「そうなんですか、種族はなんですか？私はシルフでプレイヤーネームはリーファって

「言います。」

「私はサラマンダーでプレイヤーネームはネーナって言うの」

「ネーナ……ん？ネーナ……ネーナ……」

直葉の中でそのプレイヤーネームは聞き覚えがあった。

確か昨日……「おいおい、お嬢ちゃん。ネーナ様にボロボロにやられてたじゃねえか？殺されなかったただけでもありがたいと思えや。」とサラマンダーのプレイヤーが私に……

と直葉思い出す。そして思い切って聞いてみる

「すみません、先輩って昨日森で金髪のシルフと戦いました？」

「うん、戦ったよ？でもなんで？」

「……それ……私です。」

「嘘、ホントに……？」

「ホントです……」

「そうなんだからどうりで強いわけだ。」

「そんなことないですよ、結局ボロボロにやられましたし。」

「でも他のプレイヤーよりは強いよ。他は雑魚ばっか、最強と言われてる人は私たちの領主だし。あーあ、強い人いないかな〜」

「あ、それなら私の知り合いに2人いますよ。」

「ホント!？」

「はい、2人とも私よりも強いです。」

「うわー、楽しみー！その人たちの情報早く出てこないかなーっ！」

その後麗奈と直葉は別れた。

世界樹の上、大きなカゴの中に探し人、アスナはいた。

「……………」

アスナはイスに座っていた。

「ティターニャ」

アスナのことをティターニャと呼ぶ男、黄色い髪に緑の服、蝶のような羽の男

「……………」

アスナは蔑むような目で彼を見る。

「そういう目をしてても可愛いよ、ティターニャ。」

「私はティターニャなんて名前じゃありません。須郷さん…私をここから出して下さい。」

「連れないと言わないでくれよ、君は僕の伴侶ティターニャ、そして僕は全プレイヤー

が崇める妖精王、オベイロン！それでいいじゃないか……それに……

須郷はアスナの髪を触り匂いを嗅ぐ

「僕は君にまだ何もしてないじゃないか」

「……………」

「んん？もしかして助けが来ると思ってる？なんだっけ、彼ら……そうそう英雄キリトくんと革新者セツナくん……」

「!!」

「彼らにあつちで会つたよ、どこで会つたと思う？君の！病室さ！僕と君が結婚すると言つたら驚いてたなくそうだ、結婚式の招待状送らないと。君のウェディングドレス姿を見てもらわないとね、彼にもそのくらいのおこぼれはあつてもいいはずだ。」

「キリトくんたちは……」

「必ず来ると？かけてもいい、彼らはもう二度とナーヴギアをかぶる勇氣はない。せいぜい祈ることだね、はははははははは」

そう言い須郷はカゴから出ていく

「キリトくん……………助けて……………」

—————

俺は約束の時間になったためナーヴギアをかぶりALOにログインした。

「おっす、セツナ」

「セツナくんも来たね、じゃあ武器買いに行こっか」

「どうやら俺が最後だったらしい。」

「その後の装備では不安らしいので武器を買った。」

「キリトはブラックプレートという少し大きい片手剣。」

「俺はカーテナという片手剣、大きさは普通サイズだ。それを背負う、あとはSAOの時に少しでも近づけたかったため青のコートを購入した。しかし……」

「コートを着ろうと思うと尻尾が邪魔だ……」

「尻尾腰に巻けばいいんじゃない？」

「それほど長くない。」

「我慢するしかないわよ。さ、準備終わったら行くわよ。」

「俺たちは昨日キリトが衝突した塔の下まだ来た。」

「ここの上から飛ぶわよ」

「なぜだ？」

「高度を稼ぐためじゃないのか？」

「そういうことね」

塔の中に入るとそこには多くのシルフがいる。

ここはシルフの行動の拠点みたいなものか

「待てリーファ」

リーファに声をかける男がいたため振り向く

「シグルド……」

「まさかお前ホントにパーティーを抜けるつもりか？」

「え、あ、うん」

「レネゲイドになるつもりなのか、俺たちのパーティーに泥を塗るな。」

「ちよつといいか……」

キリトが出てくる

「アンタ、パーティーメンバーをアイテムかなんかと勘違いしてないか？メンバーはア

イテムみたいにロックしておくことは出来ないんだよ。」

「クズ漁りのスプリガンが何を言う！貴様もレネゲイドだろ？」

シグルドは剣を抜きキリトに向ける。

キリトは動じてない。

「シグルドとか言つたな、ここでは人の目につく。無抵抗なやつを切つたということが多くの者に見られる、不利になるのは貴様だぞ？」

俺はシグルドに言う

「くっ………行くぞ。」

シグルドは連れてきた取り巻きと一緒に帰ってつた。

そして俺たちは塔の上まで来た。

途中でリーファとレコンが話しをしていたがよく聞こえなかった。

「すまない、俺たちのせいで喧嘩別れみたいになってしまい……」

「リーファ、ごめんな。」

「いいわよ、どっちにしろ抜けようと思ってたところだし………さ！とりあえずの目標

は鉾山都市ルグルー！」

「このまま飛んでいくのではないのか？」

「見て、あの山……あれが限界高度より高いから洞窟行くしかないのよ」

「それが最短なら仕方ない、よし！行くか！」

俺たちは鉾山都市ルグルーに向かう

第十八話 戦闘—キリト—

俺たちは今、ルグルーに向かう道を急いでいた。

なぜ急いでいるかというサラマンダーの部隊に追われてるからである。

「走って！」

リーファの指示で俺たちは走る。

もう少しで目的地のルグルーだ。

中立国、街の中ではやつらも襲ってこれないはず。

すると俺たちの頭上を越えて何かが通る。

越えたものが地面に落下すると地面から土の壁のようなものが出てくる。

「てえええええ！」

キリトが剣で壁を破壊しようとする

「うおっ！」

……が壁は破壊できなかつた。

「無駄よ」

「もつとはやく言ってくれよ…」

「君がせっかちすぎるんだよ」

「魔法だから剣などの攻撃では破れないのではないのか?」

「セツナくんの言う通りよ」

「戦うしかないってことか…」

キリトは剣を構える。

「でも結構やばいかもよ、サラマンダーがこんな高位の土魔法を使えるなんて…よつぽどレベルの高いメイジがいるんだわ…」

サラマンダーの部隊が来るとリーファは剣を構える。

「リーファ、君の剣の腕を信用してないわけじゃないんだけどここは俺の後ろで回復役に徹してくれないか?」

キリトは言う

「俺もそのほうが嬉しい。」

「え? セツナも戦うのか?」

「ダメなのか? ここしばらく戦ってないんだが…」

「今回は譲ってくれよ、次は必ずお前に戦わせるからさ、頼む!」

「……………仕方ない、俺は一切手出ししないからな」

「ああ」

俺はリーファの後ろに下がる

「うおおおお！」

キリトが走り出すとサラマンダーの盾持ちが3人前に出てきた。

キリトは剣を横に振る、だが盾持ちに防がれてしまう。

しかも盾持ちの減った体力は後ろのメイジ隊に回復されてしまう。

それに加え、盾攻撃でひるんだ隙に後ろの部隊が魔法で攻撃してくる。

これは……キリト対策か……

キリトとサラマンダー部隊は同じことを何回も繰り返していた。

「セツナくん！助けてあげて、このままじゃキリトくんが……」

「俺はキリトと約束した。手は出さないと、助けるのはお前の役割じゃないのか？」

「……」

リーファはキリトの回復を続ける

キリトが攻撃する、防がれる、相手側の回復、相手側の攻撃、キリトにダメージ、リーファがキリトを回復、この流れが何度か続いた。

「キリトくん！もう諦めようよ！またスイルベーンからだけど何時間か飛ばばいい話

じゃない!？」

「それだけは嫌だ!!俺が生きてる間、誰もパーティーメンバーを殺させはしない!」

キリト……………

「うおおおおおおお!!」

キリトが叫び突進する、盾持ちの盾の隙間に剣と手を入れ無理矢理突破しようとする
が後ろの攻撃部隊が魔法攻撃の準備をしている。

「リーファさん、残ったマナを全部使って次の攻撃を防いで下さい!勝つにはそれしか
ありません!」

「……………わかったわ……………」

キリトも向こうが攻撃してくることに気付いて盾持ちから離れる

「……………」

「……………」

リーファのほうが少し早く終わりキリトの周りに青いとりのようなものが集まる。
集まった次の瞬間、キリトに相手からの攻撃が来る。

「くううう!」

「……………」

リーファが攻撃を防いでいるとキリトが詠唱を始める

「~~~~~！」

キルトの詠唱が終わる。すると周りの炎を巻き込んでキルトの姿が巨大なモンスターに変わる。

「ふええ……疲れた……」

「リーファさん、お疲れ様です。」

「あれがキルトか……74層のボスモンスターに似てるな……」

「グオオオオオオオオオオ！」

キルトは盾持ちに突っ込み盾持ちどもをその爪で切り裂き、噛み付き……そこから先の勝負は一方的なものだった。

~~~~~

サラマンダーの部隊は1人を残して壊滅した。

「いててて……」

リーファはその男に剣を向けた。

「さあ、誰の命令なのか教えてもらいましょつか……？」

「く……殺すなら殺しやがれ！」

「この……」

「いや〜暴れた暴れた……」

キリトはサラマンダーの男の元にやってくる

「よっ、ナイスファイト」

「……は？」

「いや、いい作戦だったよ、俺ひとりだったら速攻やられてたな。」

「…キリト、お前何を…？」

「まあまあ……」

キリトはサラマンダーの男と肩を組み、ウインドウを出した。

「そこでものは相談なんだが君い…これはさっきの戦いで手に入れたユルドとアイテムなんだがね、質問に答えてくれるならこれ全部君にあげちやおつかなくなくて？」

「え……あ……まじ…？」

「まじまじ」

「「えへへへへ……」」

「男って…」

「なんか身も蓋もないですね…」

「一緒にするな……」

「今日の午後だったかな…？ ジータクスさん…あつさっきのメイジ隊のリーダーなんだ

けど、急にケータイメールで呼び出しがあつてさ。入つてみたらさ、たった2人を十数人で狩るっていうじゃん？イジメかよつて思ったけどネーナ様の部隊を壊滅させたっていうからなるほどなつて。」

「ネーナ？」

「(先輩つてサラマンダーの中では有名人なんだ……)その人はキリトくんたち来る前に飽きて帰つちやつたんだよ。まあいいや、それでジータクスさんつて人はなんで私たちを狙つたの？」

「もつと上の命令だつたみたいだぜ、なんか作戦の邪魔になるとか」

「作戦？」

「俺みたいにな下つ端には教えてもらえないけどよ、相当デカいこと狙つてるみたいだぜ。今日入つた時ものすごい数の軍隊が北に向かつてくのを見たぜ。」

「北……まさか世界樹攻略に向かう気なの？」

「まさか、最低でも全軍にエンシエント級の武器が必要だつて、金を集めてるところだぜ？」

「世界樹攻略ではないとすると……他種族を大勢で狩りに行くのでは……？」

「うーん……」

「俺が知ってるのはここまでだ……さっきの話、ホントだろうな……？」

「ああ、取引で嘘はつかないさ」

後ろでリーファがなんともいえない顔をしていた。

キリトは約束通りアイテム、ユルドを全て彼に渡した。

「さっきの悪魔みたいなモンスターってキリトくんだよね？」

「多分な〜」

「多分？」

「俺たまにあるんだよな……………戦闘中にぶち切れて記憶が飛ぶこと……」

「……怖」

「でもさっきのはなんとなく覚えてるよ、ユイに言われるがままに魔法を使ったらなんか自分がえらい大きくなってさ。剣もなくなるし、仕方ないから手掴みで」

「ボリボリかじったりもしてましたよ？」

「ああ、確かに……モンスター体験が味わえてなかなか楽しかったぜ」

「その……味とかしたの……？」

「こげかけの焼肉の歯ごたえと風味が」

「ああ……やっぱいいい……言わないで」

リーファが手を振って拒絶する

「ふっ……」

キリトはその手を掴み口にくわれる

「いやあああああー！」

「へぶっ!？」

リーファはキリトを平手打ちする。

……当然だな……

俺たちは中立国のルグルーに入った。

「へえー、ここがルグルーか〜」

「イテテ……」

「さっきのはどう考えてもお前が悪いぞ、嫁さんに怒られるぞ?！」

「お前だって内緒で入って来てるじゃねえか……」

「リーファお前、サラマンダーたちに襲われる前にメッセージが来てたんではなかったのか?！」

「あ、忘れてた」

リーファはフレンド画面でログイン中か確認する。

「何よレコン寝ちやったのかしら……」

「向こうで確認してきたら？」

「…そうね、じゃあ少し落ちてくるからキリトたちは待つて。じゃあ私の体よろしくね、ユイちゃん、セツナくん」

「え？」

「……なぜ？」

「キリトくんが私にいたずらしないように監視しといて」

「了解です！」

「そういうことなら承知した」

「……あのなあ……」

リーファはそう言つてベンチに座りログアウトした。

「キリト、いたずらするなよ。アスナに言いつけるからな。」

「お前の中の俺のイメージもそんななのかよ!？」

「ああ、いきなり女性の指に噛み付くやつだからな」

「つたく！」

「そんなことより次戦闘になりそうだったら俺に譲れよ。たとえそれが1対100でもだ。」

「わかつてるよ、つて1対100は大袈裟だろ……」

「あー……」

「っ！行かなきゃ！」

「うわっ！」

キリトが食事をしているとリーファがいきなり大声をあげ立ち上がった。

「お、お帰りリーファ」

「お帰りなさい。」

「キリトくん、セツナくん……ごめんなさい。私急いで行かなきゃ行けない用事が出来ちゃった……説明してる時間もなさそうなの多分、ここにも帰ってこれないかもしれない……」

「じゃあ移動しながら話してくれ」

「そうそう、どっちにしろここから足を使って出なきゃ行けないんだろ」

「……わかった。」

俺たちは走りながら街を出る。

「それで40分後にシルフとケットシーの会談があるの！」

「質問いいか？」

「どうぞ」



「その2種族を襲うことでサラマンダーに出る利益はどんなものが？」

「まず、同盟の邪魔が出来るよね、シルフ側から漏れた情報で領主が討たれたらケツ  
シー側は黙ってないでしょ？」

「そうだな」

「下手したらその種族間で戦争になるかもしれない、それと領主を討つと領主間に蓄積  
されてる資源を3割手に入れることができて10日間街を占領して税金を自由にか  
けられる。」

「そんなことが……」

「だからね、キリトくん、セツナくん……これはシルフ族の問題だからこれ以上君たちが付  
き合ってくれる必要はないよ……多分会談場に行ったら生きて帰れないから、またスイル  
ベーンから出直しろうしね……ううん、もつといえ……世界樹の上に行きたいなら  
君たちはサラマンダーに協力するのが最前かもしれない……」

リーファの足が止まる。

「ん？……」

「サラマンダーがこの作戦に成功すれば万全の状態で世界樹攻略に向かえる、君たちの  
強さなら傭兵として雇ってもらえるかも……だからここで私を切っても文句は言わない  
わ……」

「……所詮、ゲームだからなんでもありだ。殺したかったら殺すし、奪いたければ奪う。そんなこという奴らに嫌ってほど出くわした。一面ではそれも事実だ。俺も昔はそう思っていた。でもそうじゃないんだ、仮想世界だからこそ守らなきゃいけないものがある。俺はそれを大切な人に教わった。この世界で欲望のまま行動すればそれは現実の人格へと戻ってくる、プレイヤーとキャラクターは一体なんだ。：俺、リーファのことが好きだよ。友達になりたいと思う。たとえどんなことでも自分の利益のためにそんな人を切ることは……俺は絶対しない。」

「…キリトくん…ありがとう…」

「ごめん、偉そうなこと言って悪い癖なんだ……」

「ううん…嬉しかった…」

「なるほど……キリトはそうやって女を口説くのか…覚えておこう…」

俺はキリトの肩に手を回す。

「セツナ…」

「リーファ、俺はキリトみたいに気の利いたセリフは言えない。だがこれだけは言わせてもらおう。お前は1人じゃない、もう俺たちは仲間だ。だからお前は俺たちを頼ってくれていい。」

「セツナくん」

「それと俺も一応ケツトシーだ、サラマンダーの介入を止めに行く理由にはこれだけでも充分なはずだ。」

「うん……!」

「……よし、話もまとまったし行くか! ユイ、走るからナビよろしく!」

「はい!」

「じゃあリーファ、お手を拝借。セツナはついてこいよ!」

「うえ……?」

「わかってる」

するとキリトは力いっぱい走り出した。

するとあつという間に出口が見えてくる。

途中モンスターともすれちがったがこのスピードだ、問題はなかった。

「出口だ、飛ぶぞ!」

「了解!」

キリトと俺は出口から飛び出た。

リーファもなんとか飛んだようだ。

「よし、リーファ。会談の場所まで案内頼む。」

「うん、じゃあ飛ばすわよ!」

俺たちは会談の場所まで全速力で飛んだ。

## 第十九話 戦闘―セツナ―

俺たちはルグルーから走って外に出た、現在は飛んでいる途中である。

「まったく、寿命が縮むかと思つたわよ！」

「ははは、時間短縮つてな」

「もう……………んっ?」

俺たちの目線の先には大きくそびえ立つ木があつた。そう、世界樹の木だ。俺たちはその雄大さに見とれてしまったのだ。

「……………! そうだ、領主会談の場所つて」

「北西のあの山の向こうよ」

「時間は?」

「あと20分」

「間に合うか…」

俺たちは更にスピードをあげる

――  
「パパ、お兄ちゃん、リーファさん、プレイヤー反応です。前方に68人の大集団、おそ

らくこれがサラマンダーの強襲部隊だと思われます。」

俺は目標を視認する。

「さらに先には14人、そこがおそらくケットシー、シルフの会談場です。」

「……………間に合わなかったね…ありがとう2人とも、ここまででいいよ。君たちは世界樹に行つて、私はサクヤを助けに行くから短い間だったけど楽しかった、また会えるといいね。」

「ここで逃げ出すのは性分じゃないんだ。キリト、ここからの戦闘は俺ひとりでやる。手を出すな。」

俺は更に加速して会談場に向かう

「お、おい！セツナ！」

—————  
会談場ではすでにサラマンダーとシルフ、ケットシー側が一触即発の事態になつていた。

俺は両者の間に入るように着陸した。

……………少々荒っぽい着陸だがな…

「双方、剣をひけ！」

「だ、誰だあいつ…」

「ケットシー側の護衛か？」

サラマンダーどもがざわつく

「サクヤ。」

「リーファ、なぜここに？」

「簡単には説明出来ないんだけど……ここから先はあの人次第ってことよ」

「なにがなにやら……」

「指揮官に話がある、出てこい。」

すると群集の中から1人の男が出てくる。

「ケットシーの護衛は6人ではなかったのか？俺たちの索敵スキルに引つかからないとはどこに隠れていた。……まあどちらにせよ殺すには変わらないが、その度胸を買って話だけは聞いてやろう。」

「俺の名はセツナ、ケットシー、シルフ両者の代表としてスプリガン、ウンディーネ、インプとの同盟を結んで来た。その証拠にあそこにもスプリガンがいる。この場を襲うとは俺たち5種族と戦争をするということではないんだな？」

俺はキリトのいるほうを指さすと、キリトは「え、おれ？」みたいな顔をしていた。

サクヤたちにリーファも何か聞かれていたが首を横に振っていた。

「シルフだけではなくスプリガン、ウンディーネ、インプともだと……う？ふつ、護衛の1人もいない貴様が代表？笑わせる。」

「俺は同盟を結んだということを我々の領主に伝えるために来ただけだから、それに俺は1人でも強いからな。」

「たった1人、まともな装備も持たない貴様を信じるわけにはいかないな……」

男は剣を抜き

「俺の攻撃を30秒耐えたら信じてやろう。」

「気前がいいんだな。その条件なら簡単だ。」

俺はユージーンの前まで行き腰に装備していた短剣を構える

「まづいな……」

「え？」

「あのサラマンダーの武器、魔剣グラムだ。両手剣スキルが950ないと装備できないときぐが……」

「950!?!」

「それだけじゃないわよ!」

上から1人サラマンダーの少女が降りてくる。



「貴様！」

周りの兵士たちが警戒して剣を構える

「あ、いいのいいの！この人は！もう、なんで今降りてくるんですか、先輩！」

「いや〜可愛いすぐ……リーファとこつちでもお喋りしたくてね〜」

「リーファ、そのサラマンダーと知り合いなのか……？」

「うん、リアルでね。」

「話戻すわよ、あの人はユージョン將軍っていつてね、私たちサラマンダーの領主モイティマーさんの弟よ、リアルでもそうらしいけど。知の兄、武の弟。純粹な戦闘力じゃALLO内じゃ最強かも、私が勝てなかった唯一の人よ……いつか絶対寝首を掻くけどね」  
♪

「は、はあ……セツナくん……大丈夫かな……」

「ふくん、そのセツナって人がリーファの言つてた強い人なんだ……ん？セツナ……？セツナせつな刹那……？」

「ふん！」

ユージョンが急接近してきてグラムを振り下ろす。

「遅いっ！」

俺は短剣でガードした。

………がグラムは俺の短剣を通り抜け、俺を吹き飛ばし岩に叩きつける。

「何今の!？」

「魔剣グラムには剣や盾でガードしてもすり抜けてくるエセリアルシフトっていうエクストラ効果があるんだヨ。」

「そんな無茶苦茶な!」

「ぬああああああ!」

俺はユーージンに向かって飛んだ、そして剣同士の間迫り合いになった。

「ほう……よく生きていたな」

「さっきの攻撃はなんだ!」

俺は短剣で攻撃をするがかわらせる。

「ふん!」

ユーージンも攻撃してくるが俺はそれをかわす。

「くっ……もう30秒たったのではないのか……?」

「悪いな、斬りたくなった。首を取るまでに変更だ。」

「貴様……貴様は歪んでいる!!」

俺は再びユージーンに突進し、短剣で攻撃をする。

俺の剣はユージーンのグラムに防がれるが逆にこちらはユージーンの攻撃を防ぐ術がない。

「このままでは拉致があかない……」

俺はユージーンから距離を取る

するとユージーンが追いかけてくる。

「くっ……!」

俺は追いかけてくるユージーンに向かい煙幕魔法を使う

「ぐっ……目くらましか……こんなものでええ!」

ユージーンはグラムを横振りし、煙幕を払いのける

だがどこを見ても俺の姿はなかった。

「いないヨ?」

「セツナ……?」

「セツナくん……」

「もしかして逃げちゃったのかな?」

「セツナはそんなやつじゃない!」

「だっていないじゃん、ユージーン將軍に敵わないから逃げ出したんでしょ、どーせ」

「うおおおおおおお！」

俺は左手に片手剣、右手に短剣という装備でユージーンの上空から襲いかかる。

「貴様！」

グラムで迎撃してくる、俺はそれをかわす。

「俺の攻撃をよけただど?!」

「なんのためにこの恥ずかしい格好にしたと思ってるんだ！お前の攻撃は全て見切った

！」

「何を!!」

ユージーンはグラムで攻撃してくるが俺は全てかわす。

「見切ったと言ったはずだ！」

俺はユージーンの頭を左腕で掴む。

「はあああああああ！」

右腕の短剣でメッタ刺しにする。

「ぐあああああああ！」

「貴様は歪んでいる！その歪み！俺が直す！」

「ぐっ！離せ！」

「ああ、離してやる…そしてこれで終わりだあああああああ！」

短剣をユージーンの首元に刺し、手を離す。

そして左腕の片手剣でユージーンをまつぶたつに切る。

ユージーンはリメインライトとなる。

「よし！」

「ナイスだセツナ！」

「見事！見事だ！」

「すごい、ナイスファイトだヨ〜！」

うおおおおおおお！

いいぞー！

ナイスファイトだ！

周りから歓声を浴びる。サラマンダー側からもだ。

「ず、すごい…あのユージーン将軍に勝っちゃった……」

――

ユージーンのリメインライトにサクヤが回復魔法かけている。

「ん……………」

ユージーンは肩を回したりして調子を確かめてる。

「見事な腕だった、俺の知る限り貴様は最強のプレイヤーだ。」

「俺なんてまだまだだ、あそこにいるスプリガンのやつの方が強いとおもうぞ」

「そうか、ケットシーにもこんな男がいたとはな……………世界は広いということか……………」

「俺の話、信じてくれたのか？」

「……………」

「將軍、ちよつといいかしら」

ネーナという少女がユージーンに話しかける

「ネーナか……………」

「昨日私のパーティーが壊滅したのは知ってるわよね？」

「ああ」

「壊滅させたのはこの人たちんだけど、確かにその時はインプとウンディーネがいたわ」

「そうか……………そういうことにおこう……………現状でスプリガン、ウンディーネ、インプとことを構えるつもりは俺にも領主にもない。この場は引こう。だが貴様やそのスプ

リガンとはまた戦いたいな……」

「ああ」

「俺もアンタとは戦ってみたかったぜ」

俺たちは握手をしてユージーンたちサラマンダーは去った。

-----

「ありがとな、口裏合わせてくれて」

「いいのよ別に、それよりセツナって言ったっけ？君」

「なんだ？」

ネーナという少女がいきなり抱きついてくる。

「んなっ!？」

「ああやって敵に容赦しないところとかすっごく好みかも！」

「なにつ!?! 離れろ！麗奈！」

「っ!?!」

ネーナの動きが止まる。

「すまない、つい妹の名前を……感じが似てたんだ。悪気はない……」

「セツナ……刹那……!?! 聖永 刹那？」

「なぜ俺の名を!?!まさかお前！麗奈なのか？」

「なんで刹那がここにいんのよ!？」

「それはこっちのセリフだ!」

「セツナのやつ妹いるって言ってたけどまさかあれがねえ……………」

「あははは、先輩……………」

「すまんが状況の説明を頼む」

サクヤがそう言うのと俺はキリトに連れてこられた。

麗奈……………ネーナはリーファにだ。

……………まったく……………こっちが説明してほしいくらいだな……………

—————  
リーファはこの一件がシグルドによるものだど伝え、それを聞いたサクヤはシグルドをレネゲイドとしてシルフから追放した。

「リーファ、礼を言うよ。君が助けに来てくれなかったら今頃……………」

「私は何もしてないよ、お礼ならセツナくんに言って」

「そう言えば……………」

みんなの視線が俺に集まる……………



「ねえ、君…私は君にインプとウンディーネとスプリガンに同盟とつてこいなんて言っていないし、君のこと知らないんだけどナ〜?」

「……………すまない、あの時はつい口からでまかせを…反省してる。」

「まさかあんなところで堂々とそんな大嘘を付けるとはな…」

「……………嘘は苦手だからあの時は緊張した。」

「君、嘘つきくんにしては随分強いネ。もしよかったら私の下で働かない? 三食昼寝おやつつきだよ?」

俺の左腕にアリシヤが抱きついてきた。

「セツナくんだったかな? 個人的興味もあるし、この後スイルベーンで一杯…?」

右腕にはサクヤが

「あー!ズルいヨー!サクヤちゃん!色じかけ反対く、それに彼はケットシーなんだからサー!」

「お前こそ密着しすぎだ。それに彼は今見たところフリーじゃないか?」

「あーもう!あんまりくつきすぎるな!セツナは私のお兄ちゃんなんだからっ!」

ネーナが強引に俺を2人から引きはがす。

「俺は誰のものでもないんだが……………それに、俺はキリトやリーファと一緒に世界樹に

行く約束をしてるんだ。2人の誘いは嬉しいが今はこっちが最優先だ。」

「ほう……それは残念。リーファ、アルンに行くのか？物見遊山か？……それとも……」  
「領地を出る……つもりだったんだけどね。いつになるかわからないけど必ずスイルベーンに戻るから」

「そうか、ほっとしたよ。必ず領地に戻ってきてくれよ、みんなと一緒にな。」

「途中でウチにもよってネ、大歓迎するヨ！」

「うん」

「わかった。」

「了解した。」

「今日はホントにありがとう、リーファ、キリトくん、セツナくん、私たちが討たれていたらサラマンダーとの格差は取り返しのつかないものになっていただろう。何か礼をしたいのだが……？」

「俺は戦いたいから戦っただけだ。」

「俺も特には」

「ねえ、サクヤ、アリシャさん……この同盟って世界樹攻略のためなんだよね？」

「究極的にはな」

「その攻略に私達も参加させて欲しいの……できるだけはやく」

「同行は構わない、むしろこちらから頼みたいくらいだ……だがなぜそんなに急いでいる？」

するとキリトが

「俺がこの世界に来たのは、世界樹の上に行きたいからなんだ。そこにいるある人に会うために……」

「それって妖精王のこと？」

「違う、お前は少し黙ってる」

「むう……」

ネーナには少し黙ってもらおう……うん……それがいい……

「リアルで連絡が取れないんだけど……必ず会わなきゃならないんだ……」

「でもメンバー全員の装備を整えるのに時間がかかるんだヨ、とても1日や2日じゃ……そうか、そうだよな……俺もとりあえずは木の根本まで行くのが目的だから、なんとかするよ……あ！そうだ、良かったらこれ資金の足しにしてくれ」

キリトは袋いっぱいのお金を出し、アリシヤに渡す。

「うわっ………サ、サクヤちゃん、見て！」

「ん？」

「10万ユルドミスリル貨がこんなに!? 一等地にちよつとした城が建つぞ?」  
「俺のも使つてくれ。」

キリトに続いて渡す。

「2人とも助かる。」

「これで目標金額にだいぶん近づいたヨ〜!」

「準備が出来たら連絡するな」

「ああ、助かる。」

「ありがとー! また会おうネー!」

サクヤ、アリシヤを筆頭に帰ってゆく。

「なんだかさつき<sup>3</sup>の出来事が嘘みたいだな…」

「ああ……」

「先輩はなんで帰らなかつたんですか?」

「うるさい! いいじゃないの別に!」

「いや〜セツナくん…領主さんたちにくつつかれてる時いい顔してたね〜ユイも見てたよな〜」

「はい! ばつちりです!」

「これはリズに報告だな」

「キリト！ユイ！お前ら〜！」

「さっきの仕返しだ！」

「まったく…キリトくんもセツナくんも……」

「セツナにい……」

「リーファ、セツナ行こうぜ、遅くなっちゃうよ」

「あ！キリトくん待って！」

「……ネーナ、お前も来るか？」

「え？」

「お前のこと頼りにしている、来るか？」

「しよ、しようがないわね、セツナがそこまで頼むなら行ってあげるわよ！」

「ふっ……」

こうして世界樹に向かう俺たちに仲間が1人増えたのであった。

## 第二十話 真実—現実—

「だから！なんで刹那がこのゲームをやってるわけ！」

「それは俺の勝手だ、いちいちお前に報告しなければならぬのか？」

「そういうわけじゃないけど……やってるなら教えてくれた方がいいじゃない！」

「お前がやってると知ってたら教えてた。」

「むう……」

「ネーナ？だっけ？ほら落ち着けて」

「うっさい！真っ黒黒すけ！なんで全身真っ黒なの？馬鹿みたい」

「うっ……セツナ……お前の妹怖すぎだろ……」

「こいつはこういうやつなんだ、ほっといてくれ」

「あはははは……先輩もいすぎですよ？」

「だつてリーファあ……」

「おい、あれって……？」

キリトが指をさす、すると目の前には大きな都市が。

「……ここがアルン……」

「うん、間違いない。ここがアルヴヘイムの中心、アルンだよ。」  
「ようやく着いたか。」

「私、こんな大きな街来たの初めてです。」

「私も、鉾物棟の光がまるで星屑みたい。」

大きな鐘の音がする。

「本日1月22日、午前4時から午前7時まで定期メンテナンスのためサーバーがクローズされます。プレイヤーの皆様は10分前までにログアウトお願いします。繰り返しします………」

「んー！じゃあ今日はここで落ちよっか♪」

「そうですね、いちおう宿屋でログアウトしましょうよ」

「そうね♪」

「俺たちは素寒貧だからな、安いところ探さなきゃ」

「俺は宿代程度は残してある。そういうことでキリトは野宿だな。」

「おい、待てよ！待ってくれええええ！」

結局、キリトのせいでみんなでひと部屋借りてそこでログアウトすることになった。

翌朝、俺は目を擦って起きてくる麗奈を見て

「最近眠そうだったのはこれが原因だったのか」

「ん〜うるさい……刹那にいだって同じ時間まで起きてたじゃん……」

「俺は4時間寝れば充分なんだ。お前は夜更かししすぎると美容とかに悪いのではないのか？」

「大丈夫大丈夫……素がいいから私……」

「確かに一般レベルより可愛いが自分で言うとか小者っぽいで」

「はいはい……」

そんなことをいいながら朝食をつくり、食べる

「今日は少し出かけてくる。」

「？ALOやんないの？」

「お前が先にログインしてキリトたちに遅れると伝えといてくれ」

「どこ行くの？」

「里香からの呼び出しだ……」

「ふ〜ん……私も行っていい!？」

「なにっ？」

「私も行きたい〜!」

「……………大人しくしてるんだぞ？」



「らーじゃっ♪」

駅、里香との待ち合わせ場所だ。

「刹那〜!」

「里香、なんだか久しぶりな感じがするな」

「実際会うのは久しぶりじゃない?今日は麗奈ちゃんも来たんだ。」

「里香さん久しぶり♪」

「どうしても付いてきたいって言うからな、それで今日はどんな用で呼び出したんだ?」

「んー、麗奈ちゃんは何したい?」

「え!?私!?んー……買い物かな♪刹那には私と2人じゃ行つてくれないもん」

「じゃあ刹那、買い物ね」

「(今日は特にキリ……和人たちと約束してないから無理に入らなくても大丈夫だろう……」

和人も無茶はしないだろうしな……) わかった、付き合おう。」

「「いえーい!」」

里香と麗奈はハイタッチをする。

刹那の考えとは裏腹に、和人は今日もログインしていた。

キリトがログインするとリーファがベッドに座っていた。

「リーファ?…どうしたのリーファ?」

「あの……あのね……キリトくん……私……失恋しちゃった……ごめんね……会ったばかりの人にこんなこと言っちゃって……ルール違反だよ、リアルの問題をこっちに持つてくるなんて……」

キリトは隣に座りリーファの頭を撫でる。

「向こうでもこっちでも……辛いときは泣いていいさ……ゲームだからって感情を出しちゃいけないなんて決まりはないよ……」

「キリトくん……」

リーファはキリトの肩に捕まり泣く。

私はお兄ちゃんが好き……でもこの気持ちは口にしちゃいけない……胸の深いところにしまつとかなきやいけない……いつか……忘れられるように……

「もう大丈夫……ありがとう……キリトくん……優しいね君」

「その反対のことはよく言われたけどね」

キリトは頭をかく

「今日は落ちる? セツナたちとも約束してなかったし、それにここから先は俺一人でも

なんとかなると思うし」

「ううん……ここまで来たんだもん、最後まで付き合うよ……さあ行く?」

リーファは手を出す、キリトはそれを握り立ち上がる

「ユイ、いるか?」

「ふあ……おはようございます、パパ、リーファさん。」

「おはよ、ユイちゃん。ねえ、昨日から気になってただけどナビピクシーも夜は眠るの?」

「まさか、でもパパがいらないあいだは入力経路を遮断して蓄積情報の整理をしていますから人間の睡眠に近い行為かもしれません」

「でも今あくびを?」

「人間って起動シークエンス中こういう動きするじゃないですか、パパなんて平均8秒くらい」

「妙なこと言わなくてよろしい」

「うふふっ」

「さて、セツナにはメッセ飛ばしといてつと……行こうぜ!」

「うん!」

---

キリトたちはアルンの中心街に来ていた。

「すつごく賑やかだね〜」

「さすがアルヴヘイムの中心」

「ここには大陸全土の妖精たちが集まってるみたいです。」

周りを見てみると確かに他種族同士が混じって楽しみあっている

しばらく歩いてみると世界樹が目の前に現れる

「うわあ〜!」

「これが…世界樹…」

「こうして近くで見るとすごいね…」

「えっと…たしか、あの木の上にも街があつて…そこに…」

「妖精王オベイロンと光の妖精アルフが住んでいて王に最初に謁見できた種族をアルフ

に転生出来るって言われてるわ」

「あの木には外側から登れないのか?」

「幹の周辺は侵入禁止エリアになってて、木登りは無理みたいね。飛んでいこうにも上

に行くまでに羽の限界が来ちゃうみたいよ。」

「肩車作戦は?」

「あれね、枝のギリギリまで行ったらしいけどGMも焦つてあの雲の上くらいから障壁

作っちゃったんだよ」

それからしばらく歩いてしているとユイが突然出てくる。

「おい、ユイ？どうしたんだよ？」

「ママ……」

「え……？」

「ママが……います……」

「ほんとうか!？」

「間違いありません、このプレイヤーIDはママのもんです！座標はまっすぐこの上ですー！」

「……………」

キリトは上空に急上昇する。

「ちよつと！キリトくん!？」

キリトは上昇していく、どんどんと高く……

「(キリトくん……どうしたっていうの？……世界樹の上にいる人がそんなに大事だっていうの……?) 待ってキリトくん！すぐに障壁があるよ!？」

「ぐっ!？」

キリトは障壁に勢いよくぶつかる。

「キリトくん!？」

キリトは体制を立て直し再び障壁にぶつかりに行く

「だめっ!!」

またぶつかる

「くっ!!」

キリトがまたぶつかりに行こうとするとリーファがキリトの腕を掴む。

「ダメだよキリトくん、そこから上はもう行けないの!!」

「行かなきゃ……行かなきゃいけないんだ!」

「……………っ」

「ママ…私です……………ママあああああ!」

—————

世界樹の上にある鳥籠の中にアスナはいた。

アスナは鳥籠の中央のテーブルに突っ伏していた。

『ママ……………』

「はっ……………!？」

アスナは声に気付き、周りを見渡す。

『ママ…!?!』

「ユイちゃん?…どこ?!」

『ママ、ママ…私はここにいるよ!』

アスナは鳥籠の中を歩き回り、外、下を見る。

「……………私は……………ここだよ……………ここにいるよ!ユイちゃん!……………キリトくん……………くっつ……………そうだ!……………ここから何か外に落とせるものは……………」

「くっ!!」

キリトはなんども障壁に殴りかかっていた。

「なんなんだよこれは!」

「私も…警告モードで呼びかけてみたのですが……………」

「……………」

キリトは剣を握る。

すると上から何か落ちてくる

「……………あれは……………」

キリトは落ちてきたものを拾う。

「……………カード?」

リーファが近づいてくる。

「リーファ、これなんだかわかる？」

「ううん、そんなアイテム見たことないよ。」

キリトはカードを何回か触ってみる。普通ならウィンドウが出てくるはずだ。

「ウィンドウも出ないか……」

ユイがカードに触る。

「これ……はっ！……これはシステム管理用のアクセスカードです！」

「じゃあこれがあればGM権限が行使できるのか!？」

「いえ……ゲーム内からシステムにアクセスするには対応するコンソールが必要です……」

私でもシステムメニューは引き出せないんです」

「そうか……でもそんなものが理由もなく落ちてくるわけないよな……これは多分……」

「はい！ママが私たちに気付いて落としたんだと思います！」

これはアスナが自力で脱出して、それこそ命懸けで手に入れたカード……アスナの魂の

こもったカードだ。

アスナ……

「リーファ、教えてくれ……世界樹の中に通じるゲートはどこにあるんだ……？」

「えつと……木の根本にあるドームからだけど……でも無理だよ！ドームはガーディアンに



守られててどんな大群でも突破出来なかったんだよ!」

「それでも行かなきゃならないんだ……」

キリトはリーファの手を握る。

「今まで……本当に……ありがとう……ここからは俺ひとりでやる……」

「え……あ……う……」

キリトはリーファから離れ落ちるように降りていく。

「パパ、お兄ちゃんは待たなくていいんですか？お兄ちゃんがいれば戦力はだいぶ上がりますよ？」

「いつ来るかわからないだろ、それに俺ひとりだって……!それにな……もう1秒でもグズグズしてたら発狂しちまいそうだ……」

ドームの目の前まで来る。

「ユイだって……ママにはやく会いたいだろ？」

「……はい」

ドームに向かい歩数をすすめると門の前に立つ石像が動く

『未だ天の高みを知らぬ者よ、王の城へ至らんと欲するか？』

クエストに挑戦するかの確認ウインドウが出てくる。

「待つてろよ……アスナ……すぐ行くからな……」

当然キリトは○を押す。

『さればそなたが背の双翼の天翔るにたることを示すが良い』

そう言い終わると門番が再び動き、門が開く。

キリトは剣を構える。

「行くぞユイ、しつかり頭を引つ込めてろよ…」

「パパ…頑張つて…」

ユイはキリトの胸ポケットに入る。

そしてキリトは門の中に入っていく。門の中はドームになっていて、天井に×字が刻まれている。

そして内装は所狭しと光の玉みたいなのが壁に埋まっている。

「行っけええええええええええ！」

キリトは叫ぶと同時に飛び上がる。

するとひとつの光の玉からガーディアンが出てきてキリトに向かってくる。

「そこを…！どけええええええええええ！」

ガーディアンの首元に剣をさし、そのまま切り落とす。するとガーディアンは爆散する。

「行ける……」



今度は矢ではなく先程までガーディアンを持つていた剣が投げられていた。

それが一気に数本投げられ、キリトに直撃し刺さる。

「ぐはっ……ぐ……あああああああああ！（あと……少し……）」

キリトは手を伸ばすがついに自分のHPが0になる。

そして視界は炎に包まれる。

—————

俺……俺は……死んだのか……

キリトは現在リメインライト状態になっている。ガーディアンたちは目標を狩り終えて光の玉の中に戻っていった。

この世界のことを……心のどこかで……ただのゲームだと思っていた……これはその報いか……俺の強さなんて……所詮スキルやステータスの数字でしかないのに……俺はゲームの枠を越えて、限界を越えて……なんでも出来ると思っていた。……アスナ……するとキリトの目の前を通っていたガーディアンが入口のほうを見る。

一体だけではなく他数体も見る。

そこにはリーファが来ていた。

だめだ……来るな!

リーファはガーディアンに阻まれながらもキリトのところまでなんとか来て、キリトのリメインライトを回収し、ドームから出た。

「はあ……はあ……はあ……はあ……キリトくん……」

リーファはアイテムストレージから世界樹の雫を出し、それをキリトに垂らした。するとキリトは復活する。

「キリトくん……」

キリトは自分の手を握ったりして復活したのを確認してから、リーファの元まで屈み、リーファの手を握る。

「ありがとう、リーファ」

「べ、別に……」

「でももうあんな危ないことはやめてくれ、俺は大丈夫だから……これ以上迷惑はかけたくない……」

「迷惑なんて……私……」

キリトは再びグラウンドクエストに挑戦しようと立ち上がる。

「キリトくん……!? 待って、一人じゃ無理だよ!」

「そう……かもしれない……」

「そうだよ！だからせめてセツナくんだけでも！」

「でも！それでも…行かないきゃ…ならないんだ…」

リーファがいきなりキリトに後ろから抱きつく

「もう…もうやめて…いつものキリトくんに戻ってよ…私…私…キリトくんが好き…」

「…っ！………リーファ…」

キリトはリーファの手を握る。

「ごめん…あそこに行かないと何も終わらないし…何も始まらないんだ…会わないきゃいけないんだ…もう一度…もう一度アスナに…」

「っ!?今………今なんて…」

「ああ、アスナ…結城明日奈…俺の探してる人の名前だよ…」

リーファがキリトの背中から離れる。

「で、でも…だってその人…はっ!?………お兄ちゃん…なの?」

「え!?!………スグ…直葉?」

「………ひどいよ………あんまりだよ………」

「スグ………スグ!」

リーファは何も言わずにログアウトしてしまった……

「……………くっ」

直葉は自室のベッドの上で泣いていた。

「スグ…ちよつといいか？」

和人が直葉の部屋をノックする。

「やめて！開けないで…一人にしておいて…」

「どうしたんだよスグ…そりゃ俺も驚いたけどさ…またナーヴギアを使ったことを怒ってるなら謝るよ。でもどうしても必要だったんだ。」

「違うよ…そうじゃない…そうじゃないんだよ…」

「スグ…？」

直葉はベッドから立ち上がり扉を開ける

「私！私…自分の気持ちを裏切った！お兄ちゃんを好きな気持ちを…裏切った…全部忘れてキリトくんのことを好きになろうと思った…ううん、もう好きになつてた…なのに…それなのに…」

「す、好きって…俺たち兄妹じゃないか…？」

「知ってるの…」

「え？」

「私たち！本当の兄妹じゃない！私はそのことをもう2年も前から知ってるの…お兄ちゃんが剣道やめて、私を避けるようになったのは…ずっと昔からそれを知ってたからなんでしょ!?!私が本当の妹じゃないから遠ざけてたんでしょ!?!なら…ならなんで今更優しくするのよ!…私、お兄ちゃんがSAOから戻ってきてくれて嬉しかった…小さい頃みたいに仲良くしてくれて嬉しかった…ようやくちゃんと私のこと見てくれたって…そう思った…でも…こんなことなら冷たくされたままのほうが良かった…それなら…お兄ちゃんのことを好きって気付くことも…アスナさんのことを知って悲しくなることも…お兄ちゃんの代わりにキリトくんを好きになることもなかったのに!」

和人は直葉から目を逸らし

「ごめんな…」

そう言った。

「もう…ほっといて…」

直葉はそう言い、部屋に戻ってまた泣き始める。

キリトはその場から動けず、床に座り込んでしまう

「……………スグ……………」



## 第二十一話 妹と恋人―直葉と明日奈―

和人は未だ直葉の部屋の前から動けない、一方直葉も部屋でまだ泣いている。

あの頃から俺は家族との距離感さえ分からなくなつた。俺はこの家の本当の子供ではない……そのことを知つたのは10歳のときだ。この人は本当は誰なんだ……この人のことを本当に知っているのか……？その違和感が俺をネットゲームに向かわせたひとつの原因だ。誰もがお互いのことを本当に知らない偽りの世界……そんな心地いい場所に俺は耽溺していった。だがSAOでの2年間は俺をひとつの真理に導いた。現実も仮想世界も本質的には変わらない。その人が誰かという疑問に意味はない。出来るのはただ……信じ……受け入れることのみ……認識する誰かが本当のその人なのだから。現実に戻つた俺はスグの顔を見て心から嬉しいと感じた。俺は誓つた……この数年間で出来たスグとの溝を全力で埋めようと……でも俺は……

和人は立ち上がる

俺が……スグに出来ること……

「スグ？アルンの北側のテラスで待つてるから」

和人は自分の部屋に戻る。

「あんなに酷いこといったのに……強いね……お兄ちゃん……私は……そんなに強くなれないよ……」

直葉はアミユスファイアを付ける

ALO内、場所はドームの門前だ。

「はあ……でも……なんて言えば……」

「リーファちゃん！」

「んっ？うわっ！」

「もう、探したよリーファちゃん。」

「レ、レコン？サラマンダーに捕まったんじゃ……？」

「全員毒殺して脱出しました。」

「毒殺って……」

「それで、リーファちゃんを追いかけてきたんだ。あれ？そういえばあのスプリガンはどうしたの？」

「えつと……ね……私……私、あの人に酷いこと言っちゃった……口にしちやいけないこと言っちゃったの……私……馬鹿だ……」

リーファは涙をふく

「ごめんね、変なこと言っちゃって。」

リーファはドームから街へ繋がる階段を降りる

「あの人は…もう会えないから、帰ろ…スイルベーンに」

「リーファちゃん…」

レコンはリーファを追いかけ、追い抜き、手を握る。

「リーファちゃんは泣いちゃダメだよ！」

「な、なに…?」

「いつも笑ってなきやリーファちゃんじゃないよ！僕が…僕がいつでもそばにいるから！リアルでもここでも絶対一人になんかささせないから！」

「ちよっ！」

「ぼ、ぼ、僕…リーファちゃん、直葉ちゃんのが好きだ！」

「え…あ…その…」

目の前を見るとキスを迫るレコンの顔が

「何すんのよ！」

リーファの拳がレコンの腹に入り、レコンが吹っ飛び階段から転がり落ちる

「ごめん！大丈夫!?!」

「いったたたた…おかしいな…この展開なら僕に告白する勇気があるかないかだったの

に……」

「あんたってほんとバカね」

「うう……」

「……あつははははははは！ 私もたまにはあんたを見習ってみるわ」

———  
同じくALLO内、場所は変わる

「……お前と里香が時間をかけすぎるからキリトたちどっかに行ってしまったではないか……」

「いいじゃん別に！ 刹那にいだって里香さんがマフラー編んでくれるって言ったらすごい嬉しそうだったじゃん！」

「うっ……それは……あと前から聞きたかったんだがなんで俺のこと刹那にいと呼ぶようにしたんだ？ 最近はそう呼んでなかったと思うが……？」

「あーそれはね、あのユイってナビピクシーいたでしょ？ あの子が刹那にいのことお兄ちゃんって呼ぶからさ、この人は私のお兄ちゃんなんだぞーってことをわからせてやるために……ってなんでこんな恥ずかしいこと言わせてんのよ！」

「そうか、俺も昔みたいになんか言われて嬉しいぞ」

麗奈……ネーナは顔を赤くしていた。

俺たちは現在キリトたちと別れて行動している。

「ねえ、リーファたちと合流しなくていいの?」

「あとですればいい話だ、それより俺も世界樹攻略のために開発したい技…いや魔法か…魔法があるからな」

「へえ〜どんなやつ?」

「俺がS A O時代に使ってたTRANS—AMといって自分のすべてのステータスを一定時間3倍にするという技だ、まんま再現出来なくても近いものが出来ればいい……」

「う〜ん…じゃあ肉体強化系ってことね、いろいろ試してみよっか。」

「ああ、頼む」

-----

またまた場所が変わるがA L O内

キリトは1人で待っていた。

するとリーファがこちらに飛んでくる。

「やあ」

「お待たせ」

「……………スグー!」

「お兄ちゃん、試合しよ?あの日の続き」

「……今度はハンデなしだな」

お互いに剣を構える

「どうりでさまになってたってことね……行くよ!」

リーファはキリトに超速の突きを放つ、キリトはそれを防ぎ剣を横ぶりする。

…がそこにリーファはいなかった。

リーファは飛翔してかわす、キリトもそれを追いかける。

「くっ……!」

空中で激しく打ち合う。

リーファは小さな浮島に降り、剣を上段に構える。

キリトも同じく小さな浮島に降り剣を構える。

リーファが先に動く、飛ぶのではなく跳んだのである。上段に構えた剣を空中で手放す。

「っ!!?」

キリトも剣を離し、落ちてくるリーファを抱きしめる。

「はっ……っ?」

「なんで……」

「どうして……」

「俺、スグに謝ろうと思つて……でも……言葉に出来なくて……せめて剣を受けようつて」  
「お兄ちゃんも……？ 私の方こそ……」

「……俺、ホントの意味ではあの世界から帰つて来てないんだ、終わつてないんだよ。彼女が目を覚まさなきや俺は現実に帰つてこれないんだ。……だから、今はスグのことをどう考えたらいいかわからないんだ。」

「うん……私待つてる、お兄ちゃんが私たちの家に帰つてくることを……だから……私も手伝う！」

「うん！」

――――  
再びドーム前の門

「えくと……どうなつてんの？」

レコンが尋ねる。

「世界樹を攻略するのよ、この人とあんたと私の3人で」

「そう……つてええええええ!!？」

「ユイ、いるか？」

「はい？ どうしましたパパ？」

「あのガーディアンについてわかったことは？」

「ステータスはたいしたことありませんが、なんといってもあの圧倒的な数ですね。あれでは攻略不可能なレベルに設定されてるとしか……」

「総体では絶対無敵な巨大ボスと変わりないってことか？」

「はい、でもパパのスキル熟練度なら瞬間的な突破は可能だと思います」

「みんな…すまない、最後に俺のわがままに付き合ってくれ…なんだか…時間がない気がするんだ…」

「私に出来ることならなんでもする。それとコイツもね」

「ええ〜？まあ僕とリーファちゃんは一心同体だし。いてっ！」

リーファがレコンの頭を叩く。

「調子のんなー！」

「すみません…」

リーファはキリトの前に手を出す。

「頑張ってみよ。」

レコンはリーファの手に手を重ねる。

キリトもそれに重ねる。

「待ってー！ー！ー！」

ネーナが飛んでくる。



「はあ……はあ……」

「先輩!」

「サラマンダー!」

「レコン、この人は私たちの知り合いだから大丈夫よ。先輩、セツナくんは?」

「セツナには同じ片手剣を探して買ってくるって」

「何やってんだアイツ……」

「セツナには追いついてくるから先に行こ!」

ネーナは3人の上に手を重ねる。その上にユイが乗る。

「ああ……そうだな……みんな、いろいろ助かったよ……ガーディアンは俺とネーナがなんとかする。リーファとレコンは俺たちのヒールを頼む、ヒールだけなら狙われないはずだ。」

「りよーかい♪」

「うん!」

「はい!」

「行くぞ!」

-----

ドームの中に再びキリトはいる。

少し後ろにネーナ、そのさらに後ろにリーファとレコンが回復の準備をしている。

「行くぞネーナ！」

「よっしやー！ー！飛ばすわよー！」

キリトとネーナは次々とガーディアンを切っていく。

体力が減ると下の2人が回復してくれる。

「(いける……ネーナの動きも想像よりいい……)!!？」

壁に埋まつてる光の玉から数十……いや数百のガーディアンが出てくる

「なんて数なの……」

「怯むな……うおおおおおおお！」

キリトは大群の中に突っ込み切り続ける。

「私も負けるもんかああああああ!!！」

ネーナも同じように突っ込む。

「ぬおおおおお！」

キリトは襲いかかるガーディアンを払い除ける。

「はあああああ！」

ネーナも倒していく、がそれ以上にどんどんとガーディアンが増えていく。

「……ちっ……キリがないわね……っ!!！」

見るとガーディアンは剣を構え、一斉に突撃してくる。

「ぐあああああああ！」

「きゃああああああ！」

「！レコン！」

「うん！」

リーファとレコンがキリトとネーナを回復する。

するとガーディアンがリーファたちを狙う。

「なんで僕たちがターゲットされてるの!？」

「多分あいつらは外とは違うアルゴリズムを与えられてるんだわ、これじゃあ前衛と後衛にわけてる意味がない……」

リーファがガーディアンを倒しに行こうとするとレコンがリーファの手を握り

「待って！リーファちゃん……僕……良く分からないんだけど……これ、大事なことなんだよね？」

「うん……多分これはゲームじゃないんだよ、今は。」

「……………僕が！僕がなんとかしてみせる!!！」

「え!？」

レコンは補助コントローラーを押し、ガーディアンの軍団に突撃する



が空いていた。

「自爆魔法……？相当なデスペナルティなはずなのに……あんた……！ほんとバカだよ！」

「ネーナ！あいつの犠牲を無駄にするな！特攻するぞ！」

「うるさい！私に命令するな！」

キリトとネーナは穴に向かい全力で飛ぶ。

穴まで後少しというところでガーディアンが身を呈して穴への到達を防ぐ。

キリトとネーナは体制を崩す。するとそこにガーディアンたちは剣を刺してくる。

「ぐっ……ぐあつ……あああああ！」

「くっ……ああっ……あああああああ！」

「……………そんな……」

レコンが命をかけて開けてくれた穴ももうふさがってしまふ

「そんな……無理だよ……無理だよ……こんなの……」

リーファは2人の回復をする。

だが2人同時に回復させてる、それに2人のHPは赤だったので時間もかかる。そんなリーファに2体ガーディアンが攻撃しにくる

「……………うおおおおおおお！」

すると下から大勢の声が聞こえてくる。

それはシルフの大部隊であった。

「シルフ部隊？」

「どうして……」

次は背中に人の乗ったドラゴンが来る。

「ケットシーのドラゴン部隊!？」

「すまない、遅くなった。」

「ごめんね、全員の装備を整えるのに時間がかかっちゃってサ」

「……サクヤ! アリシャ!」

「ドラゴン隊! ブレス攻撃よーい!」

「シルフ隊! エクストラアタックよーい!」

「ファイヤーブレス! 撃てええええええ!」

ドラゴン部隊のブレス攻撃でガーディアンが大量に倒れる。

「フェンリルストーム! 放て!」

シルフ隊は剣先からレーザーのようなものを放つ。

「ありがとう! 2人とも!」

「礼には及ばんよ、君たちにはお世話になったからな。」

「それに攻略の準備だって彼らから貰った大金で準備したんだヨ?」

するとサクヤは一息ついて……

「全員！突撃！」

「「「「「うおおおおおおお！」「「「「「」

サクヤの合図で全軍がガーディアンに向かって突撃する。

「怯むな！行けええええええ！」

するとサクヤに向かってガーディアンが飛んでくる。

俺はそのガーディアンを火属性魔法で打ち抜く……

「来たのか!？」

「セツナにいい遅いよ!!」

「待ちかねたぞ、少年んんんんんんん!!」

俺は片手剣を右手、左手に持つ。

「キリト！この上に行ければいいんだな!？」

「ああ！そうだ、でも……」

「俺が切り開く！」

俺は上に向かい飛ぶ、だがガーディアンがすぐ来る。

「俺の道を！ 阻むな！」

2本の剣を使いガーディアンをなぎ払っていく。

「セツナ！」

キリトも敵を切っていく。

「2人に続け！」

ドラグーン隊、シルフ隊も次々と攻撃する。

「セツナにい！」

「ネーナ！ やるぞ！」

「うん！」

ネーナが俺のどこまで来て俺の肩を掴み詠唱をする。

「~~~~~」

「セツナ、ネーナ……お前ら何を……やって……」

キリトは不思議そうに俺たちを見る。

「ネーナの魔法でTRANS—AMを再現する……そして……」

「~~~~~」

ネーナの詠唱が終わるとセツナの身体が炎に包まれる。





サクヤの合図でドラグーン隊とシルフ隊が帰っていく。

「飛んで……どこまでも空を翔けて……世界の果てまで……」

「……キリト、アスナを助けてこい。お前にしか出来ないことだ。」

「セツナには行かなくてもいいの？」

「ああ……これはキリトの問題だ、俺がこれ以上介入する必要はない……。俺はキリトからいい知らせがあつたらすぐアスナのところに行けるように準備してるさ。」

「あー、近所の病院に入院してるんだもんね。」

「ああ……（キリト、アスナを助けなきや俺たちの戦いは終わらないんだ……）」

俺とネーナはドームから出てログアウトする。

—————

「……くっそ……どうなってるんだ？」

キリトは剣を突き立て無理矢理こじ開けようとする。

「ユイ……」

「はい！パパ！」

ユイは天井に触り、情報を解析する。

「パパ、この扉はクエストフラグにより閉ざされてるわけじゃありません。システム管理権限によるものです！」

「どういうことだ……?」

「つまりこの扉はプレイヤーには開けられません!」

「なっ!」

周りを見るとガーディアンが玉から出てくる。

「っ……待てよ……あれは……」

キリトはアスナが落としてきたカードを取り出す。

「ユイ!これを使え!」

ユイはカードに触り情報を取り込む。

「コードを転写します!」

ユイが扉に触ると扉が一瞬光り、次の瞬間扉が開く。

「転送されます!パパ!手を!」

キリトがユイの手を握ると転送される。

「パパ!パパ!」

「ん……(ハ)はっ!」

キリトが目覚めるとそこは周りが真っ白な道の上だった。

「わかりません。マップデータがないので……」

「アスナの居場所はわかるか？」

ユイは目を閉じる

「近い…かなり近いです…はっ！こっちです！」

ユイは走り出す。

キリトも追いかける。

ユイは途中壁に手を当ててその壁を破壊し、そこからの道を走っていく。

それを繰り返しているとついに外に出る。

そこはまさに世界樹の上、本来なら空中都市があるはずなのだが

「ここが…世界樹の頂上…ないじゃないか…空中都市なんて！なにがグランドクエストだ…全部嘘じゃないか…許されないぞ」

ユイがキリトの袖を引っ張る。

「ああ、そうだ。全てはアスナを救い出してからだ。」

キリトは今自分のいる位置とほぼ反対の位置にある鳥籠を見て、そこに向かって走る。

鳥籠の中、アスナは机に突っ伏していた。

「ママー」

ユイの声を聞いてアスナは飛び起きる。

「ママ!!」

アスナは思わず泣いてしまう

ユイは壁を破壊してアスナに飛びつく。

「ユイちゃん!」

「ママ!」

「……………ユイちゃん……」

「ママ……ママ……!」

2人が抱き合っているとキリトが部屋に入ってくる。

「……………キリトくん……」

キリトとアスナはオデコをあわせて目をつむる。

「……ごめん……遅くなった……」

「……うん……信じてた……きつと……助けに来てくれるって……」

オデコを放し、目を開ける。

「さあ、一緒に帰ろう。」

「……うん」

「ユイ、アスナをログアウトさせられるか?」

ユイは首を横に振る。

「ママは複雑なプログラムで校則されています。ログアウトさせるにはシステムコンソールが必要です。」

「私、ラボラトリーでそれらしいもの見たよ」

「っ!!」

何かが来る。キリトはそう思い剣をいつでも抜ける体制になる。  
すると嫌な感じが走る。

「な、何?! きゃっ!」

この場の重力が何倍にもなる。

「ぐ……ぐ……ぐ……」

キリトはアスナ、ユイに手を伸ばす。  
がそれすらも叶わないほどの重力がかかる。

「ユイ! この状況は!」

ユイの周りにプラズマが走る

「パパ! ママ! 何か! よくないものが!」

ユイは消滅した。

「ユイ(ちゃん)!!」

「あ、アスナ……！」

キリトとアスナはお互いに手を伸ばす、後少しで届きそうになったところでまたさらに重い重力がかかる。

「いや、驚いたよ、小鳥ちゃんの籠の中にゴキブリが迷い込んでいたなんてね。」

「お前は……須郷か!？」

「ちっ……ちっ……ここではその名で呼ぶのはやめてくれないか？妖精王オベイロン陛下と……そう呼べえ!!」

オベイロンはキリトを蹴る。

「キリトくん……！」

オベイロンはキリトの頭を踏む。

「どうだい!?!まともに動けないだろ?次のアップデートで導入予定の重力魔法なんだけど、ちよつと強過ぎるかなあ?」

オベイロンはキリトの頭に足を擦り付ける。

「やめなさい……卑怯者……！」

キリトの頭から足を離す。

「いやいや、それにしても桐ヶ谷くん。いやキリトくんと呼ぶべきかな?どうやってここまで登ってきたんだい?さつき妙なプログラムが動いていたが?」





須郷はこちらを向き、不敵な笑みを浮かべ指を上にあげると手錠のつけられたアスナは宙吊り状態になる。

「ははっ…ハイ！」

重力がさらに重くなる。アスナの顔は苦痛で歪む。

「いひっ！いいい！いいねえ！やっぱりその顔はNPCの女じゃ出来ないよね！」

オベイロンはアスナの髪の毛の匂いを嗅ぐ

「はあ…いい香りだ…現実のアスナくんの香りを再現するのに苦労したんだよ…病室に解析機まで持ち込んだ僕の苦労をたたえて欲しいなあ」

オベイロンはアスナの頬と自分の頬を重ねる。

「おい！須郷！」

キリトは立ち上がろうとする。

「まったく…観客は黙って見てろ…いろいろい…」

オベイロンはキリトの剣を再び持ち、キリトを蹴る。再び倒れたキリトに剣を深くさす。

「キリトくん!!」

「システムコマンド！ペインアブソーバー、Lv10からLv8へ！」

「ぐっ…！あああああああああ！」

「痛いだろ？段階的に強くしてやるから楽しみにしてるんだね。もつともLv3以下にすると現実にも影響があるはずなんだけどね」

オベイロンはアスナの身体を撫で始める。

「須郷！貴様！」

「大丈夫だよ、キリトくん…私はこんなことで傷つけられたりしない！」

「そうでなくちゃ…なるべく長引かせてくれたまえ!!」

オベイロンはアスナの上の服を破る。

「くっ……」

「くふふふ、今僕が考えてることをおしえてあげようか？まずはここでじっくり君と楽しむ。そのあと君の病室に行く。大型モニターに今日の録画を流しながら現実の君とじっくり楽しむ。君の本当の体でね…」

「ひっ!?!」

「あひやひやひやひや!…くひひひひひひひ…」

「う…うう…」

アスナは耐えきれず涙を流す。オベイロンはそれを舐める

「甘い…甘いよ!甘い!!」

オベイロンはアスナの顔を舐め回す。

「須郷！貴様！貴様あ！絶対に……！絶対に殺す……！」

オベイロンはキリトに見せつけるようにアスナを舐め回す。

これは報いなのか？？俺はゲームの中では無敵でアスナを自分の力で助け出せると  
思ってた。なんの力もないのに……

逃げ出すのか？

……

逃げ出すのか？

そうじゃない……現実を認識するんだ。

屈服するのか？かつて否定したシステムの力に

仕方ないじゃないか……俺はただのプレイヤーで向こうはGMなんだから……

それはあの戦いを汚す言葉だ……私にシステムの力を上回る人間の意志の力を見せ、未  
来を悟らせた……我々の戦い……

お前は……

立ちたまえ……キリトくん……

その頃オベイロンはアスナの下半身に夢中になっていた。

「ぐっ……ああっ……」

キリトは少しずつだが立ち上がる

「こんな魂のない攻撃に、あの世界の刃は

もつと重かった！もつと痛かった！」

キリトはなんとか立ち上がる。すると剣も抜け落ちる。

「やれやれ……妙なバグがのこっているなあっ！」

オベイロンはキリトに裏拳を放つがキリトにあっさり止められてしまう。

「システムログイン……ID ヒースクリフ……」

キリトの周りにいくつかウインドウが出てくる。

「な、なんだそのIDは?！」

「システムコマンド、管理者権限変更。IDオベイロンをLv1に」

「僕より高位のIDだと?僕は創造者だぞ!?!この世界の!神!」

「そうじゃないだろ……?お前は盗んだんだ、世界を!その世界の住人を!盗み出した玉

座の上で踊ってた泥棒の王だ!」

「この……ガキ……この僕に向かってえ……システムコマンド!オブジェクトID!エク

スキャリバーをジェネレート!いうこと聞けえ!このポンコツがあ!神の!神の命令

だぞぞお!」

「待っててくれ、アスナ……すぐ終わるから」

「うん……」

「システムコマンド！オブジェクトID！エクスキャリバーをジェネレート！」

キリトの目の前にエクスキャリバーが出現する。

「……コマンドひとつで伝説の武器を召喚か……」

そしてそれをオベイロンに渡す。そしてキリトは落ちていた自分の剣を持つ。

「決着をつける時だ。泥棒の王と鍍金の勇者の。システムコマンド！ペインアブソバーをLv0！逃げるなよ。あの男はどんな場面でも臆したことはなかったぞ。あの茅場晶彦は。」

「かや……茅場!!そうか……あのIDは……なんで死んでまで僕の邪魔をするんだよ!あんなはいつもそうだ!何もかも悟ったような顔をして!僕の欲しいもの何から何まで端から攫って!」

「須郷……お前の気持ちも少しはわかるぜ。俺もあいつに負けて家来になったからな。でも俺はあいつになりたいとは思わなかった。お前と違ってな」

「……」の……ガキがああああ!」

オベイロンの攻撃は素人のそれだった。キリトは軽くそれをいなし、頬に軽く傷を付ける。

「痛あああああああ！」

「痛いだ…？お前がアスナに与えた苦しみはこんなもんじゃない！」

キリトは剣を振り下ろす、オベイロンは剣を持っていてるほうの手で身を守ろうとするが手ごと切り落とされる。

「いひやあああああああ！手があ！僕の手があ！」

「セツナの親父さんやお袋さんだつてなんでお前なんかのために殺されなきゃいけなかつたんだ！」

キリトは剣を横に振る。

「おわあああああああ！」

オベイロンの下半身が消滅し、残った上半身は地面に倒れる。

キリトはオベイロンの髪を持ち、上に投げる。

「きっ……！」

「おわっ！……おわあああああああ！」

キリトは剣を落ちてくるオベイロンにさす。

串刺し状態になったオベイロンはそのまま消滅した。

「ふう……！」

キリトはアスナの鎖を切る、するとアスナの手錠も消えた。

身体の体勢が安定しないアスナをキリトは抱きしめる。

そして抱きしめ、お互いの顔を合わせるとキリトは泣き出してしまう。

「う……うう……う……」

「信じてた、ううん、信じてる。今までもこれからも。君は私のヒーロー。いつでも助けに来てくれるって。」

アスナはキリトの頭を優しく撫でる。

「違うんだ……俺には何の力もないんだ……うう……で、でも……そうなるように……頑張るよ」

「うん……」

「さあ、帰ろう。現実世界はもう夜だ。でもすぐに君に会いに行くよ。」

「うん、待ってる。現実世界で一番最初に会うのはキリトくんがいいもん。ああ……とうとう終わるんだね、帰れるんだね。現実の世界に……」

「いろいろ変わっててびっくりするぞ?」

「いっぱいいろんなところ行くこうね。」

「ああ……」

再び2人は抱き合う。

するとアスナの体が光だし、足元から消えていった。

「……………これで、すべてが終わったのか…そこにいるんだろ、ヒースクリフ。」

「久しいな、キリトくん。」

「生きていたのか？」

「そうであるとも言えるし、そうでないとも言える。私は茅場晶彦の意識のエコー、残像だ。」

「相変わらずわかりにくいことを…まあとりあえず助かったよ。」

「礼など不要だ。君と私は無償の善意などが通じる中ではなからう。もちろん代償は必要だよ。常にね」

「何をしろというんだ？」

すると上から光り輝く卵のようなものが降りてくる。

「これは…？」

「それは世界の種〈ザ・シード〉だ。芽吹けばどういうものかわかる。その後の判断は君に任せよう。消去し、悪れるのもよし。だがもし君があの世界に憎しみ以外の何かを抱いていたのなら……………では私は行くよ、セツナくんにもよろしく伝えといてくれ。……

また会おうキリトくん」

そう言い茅場晶彦は消えていく。



それと同時に眩い光が広がっていく。

光が開けるとそこは今までアスナがいた鳥籠の中だった。

「ユイ！大丈夫か！ユイ！」

「パパ！」

ユイが空中から現れキリトに抱きつく。

「無事だったか！」

「はい！パパのナーヴギアに避難したので！ママは？」

「帰ったよ、現実世界に。」

「そうですか！よかったあ……本当に……」

キリトはユイの頭を撫でる。

「また直ぐに会いに来るよ。……この世界はどうなるんだろうな……？」

「私はパパのナーヴギアの中にいるのでいつも一緒です！」

「そうか……じゃあ俺は行くよ。ママを出迎えに」

「はい！……パパ！大好きです！」

キリトはユイの頬にキスをしてログアウトしていった。

現実

目を開けると目の前に直葉がいた。

「わっ！ごめんね！あんまりにも遅いから！」

「ごめんな、遅くなつて。」

ナーヴギアをとる。

「全部終わったの？」

「ああ、終わったよ。何もかも。」

「…よかった！」

直葉は笑う。和人はその姿をリーファと重ねる。

「本当に…本当にありがとな、スグがいなかったら俺なんも出来なかった。」

直葉が和人に寄り

「ううん、私嬉しかった。お兄ちゃんの世界でお兄ちゃんの役に立てて。」

和人は優しく抱きしめる

「取り戻したんだね、アスナさんを」

「ああ…ようやく帰ってきた。……スグ、俺……」

「行つてあげて、きつとお兄ちゃんを待つてるよ！」

「刹那にも終わったって連絡しなきゃな……」

和人は自転車で病院に向かう。外は雪が降っている。

「じゃあお兄ちゃん、アスナさんよろしくね！」

「ああ！今度ちゃんと紹介するよ！」

キリトは病院へと自転車を急がせた。

俺は自室で和人からの連絡があるのを待っていた。

ピリリリリ！

携帯が鳴る。メールだ。

文面は『全て終わったよ。俺はこれからアスナに会いに行くから。』

そうか……あいつのほうは全て終わったか……あとは俺の……

俺は麗奈のいるリビングまで行き。

「麗奈、俺は病院に行ってくる。多分俺たちのほうもこれで全て終わる。いや、終わらせてくる。俺の手で！」

「私も行くよ、病院までそんな遠くないしよ！」

麗奈はあまり連れてきたくないんだが……こいつにも知ってもらったほうがいいか……

「風邪ひかないようにあつたかくして行くんだぞ？」  
「らーじゃっ♪」

## 第二十二話 帰還―ただいま―

キリトは病院についた。

「アスナ……アスナ……！」

病院の駐車場を走っていると車の影から人が出てきたのでそれを避ける。

するとキリトの腕に痛み、見ると血が出ていた。

「遅いよ……キリトくん……僕が風邪ひいたらどうするんだよ……！」

「す、須郷！」

「ひどいことするよね……まだ痛覚が消えないよ……！」

「須郷、お前はもうおしまいだ……大人しく法の裁きを受ける……！」

「おしまい？なにが？僕を欲しいって企業は山ほどあるんだ。研究を完成させれば僕は

この世界の王に、そう神になれる。その前に、君を殺すよ……キリトくん！」

須郷は和人にナイフで襲いかかる。和人は倒れる。

「おい、立てよ。立てって……！」

須郷は倒れた和人に蹴りを入れる。

和人は右手から流れる血を見て驚く。

「お前みたいなクズが、僕の足を引つ張りやがって……その罪に対しての罰は当然死だ。死以外ありえない。」

ナイフを和人の前に降ろす。

「あれ？右目がぼやけるから狙いが……クズが……お前なんか！本当の力は何も持つてないんだよおおおおお！」

須郷……お前だつて同じだろうが……

「死ねええええええ！小僧おおおおお！」

須郷がナイフを和人に振り下ろそうとする

「うおおおおお！」

和人の目の前に刹那が出てきて須郷を殴った。

—————

「夜だけど勝手に入っちゃつても大丈夫なの？」

「大丈夫だ、もう和人もきてるようだしな。」

入口に置いてある自転車を指し、中に入る。

入つて歩いていると麗奈が人が揉み合っているのを見つける。

「刹那にい、あれ……」

それを指さす。

「どうした？……あれは！」

俺がそれを見つけるとすぐに走り出した。

「あ！どうしたのよ！」

須郷……あいつは！あいつは！

「うおおおおお！」

俺は和人にナイフを振り下ろそうとする須郷を力いっぱい殴る。

「ぐほっ！」

俺に殴られた須郷は軽く横に吹っ飛び、ナイフを落とす。

「和人、大丈夫か？」

「あ……ああ……」

「だがお前怪我を……」

右手から血を流してる。

麗奈も追いかけてくる。

「まったく……急に走らないでよね……」

「すまない、麗奈は和人の怪我を見てやってくれ。」

「和人？」

麗奈は和人を見る。

「麗奈ってことは君がネーナか、刹那と一緒にであつちとこつちでもそんなに変わらないんだな。」

「うっさい！黙つてろ！」

「は、はい…（気の強いつていうか…なんか怖いな）」

麗奈は持つてたハンカチで傷口を直接圧迫する。

「はい、おしまい。恋人さんのところ行くんでしょ？早く行きなさいよね。」

「ありがとう、ネーナに刹那！」

キリトはアスナの病室によるよると向かう。

「う…君は…刹那くんか…」

そして須郷が起きる。

「まったく…君も！君の親も！君たちはなぜ僕の邪魔をするだあつ！」

「俺の両親は邪魔したくて邪魔したわけじゃない。」

「結果的には邪魔をしたんだ！君も親のところに連れて行ってやる！」

須郷はナイフを拾い俺に襲いかかってくる。

「貴様は歪んでいる！」

俺は左手でナイフを持つてる手を掴み、右手で須郷の顔を何度も殴る。

「ぐぼっあ！」



「なぜ貴様なんかのために父さんと母さんは死ななければならなかった！なぜ俺や麗奈が苦しまなければならなかった！」

俺はそのまま須郷の顔を掴み車の側面に叩きつける。その時に落としたナイフを俺は拾い須郷の首元に当てる。

「殺して……やる……殺してやる！」

ナイフが少し首に当たり血が出る。

「ひゃあああああああああああ！」

須郷は失禁してしまう。

「刹那にい、もう……いいよ……。殺しちゃったらこの人と同じになっちゃおうよ？」

「……はあ……はあ……ああ……ああ……そうだな……」

俺が手を離すと須郷はそのまま倒れる

「刹那にい、この人どうする？」

「写真でも撮ってツ○ッターにでもばらまいとけ」

「誰がやるの？」

「俺はやつてない。」

「えー！じゃあ私!?嫌よ！こんなおっさんと写真なんて！」

「冗談だ、警察に通報しとけ。こいつがSAOプレイヤー300人を監禁、実験していた

犯人だつて」

「そうなの?」

「いや、わからない。」

「はあ?なに訊わからないこと言つてんの?」

「なんとなくそう思つただけだ。とりあえず3年前の暴走車両の事故の犯人という事で警察に通報はしとけ。300人のことはのちのちわかる」

「了解」

病室

和人は明日奈の病室やつてきた。

「……」

和人は入るのを少し躊躇していたがどこからか『待つてるよ?』という声が聞こえたので勇気を出して入る。

するとそこには月明かりを浴びている明日奈の姿が

「キリト……くん……?」

聞こえるか聞こえないかの小さい声で言い、和人に向かい手を伸ばす。

和人もそれを掴み、明日奈を抱きしめる。

「これ…」

明日奈は和人の右手の傷を見て

「最後の…最後の戦いが終わったんだよ…」

「ごめんね…まだ耳がよく聞こえなくて…でもキリトくんの言ってることわかるよ…終わったんだね」

「ああ…」

2人は離れお互いの顔を見る。

「はじめまして、結城明日奈です。よろしくねキリトくん。」

「はじめまして。桐ヶ谷和人です。よろしく、明日奈。」

お互い目を瞑り2人はキスをする。

病院の外では

「刹那には行かなくていいの？心配してたんでしょ？」

「2人の時間を邪魔しちゃう悪いだろ？それにこれからは会おうと思えばいつでも会える。帰るぞ。」

「は〜い」

俺たちは病院から出る。

終わったんだ、俺たちの…戦い、残りのSAOプレイヤー300人を解放したことで俺たちの戦いは終わった。

—————  
2025年、4月25日金曜日

俺たちはSAO生還者を集めた学校に通っていた。

「今日の授業はここまで、課題ファイル25と26を転送するので来週までにアップロードしとくように。」

あー終わったー

飯食いに行こうぜー！

「和人、一緒に食事どうだ？」

「わりいな、俺明日奈と約束があるんだ。」

「…そうか」

「お前もリズと仲直りすればいいじゃねえか？」

「いや…それはだな…」

俺は里香と3日前に喧嘩した。

理由は麗奈がうっかり俺がALOをはじめたことを里香に行ったからだ。

里香は勝手に俺がナーヴギアを使ったことについて怒ってるのではなく、誘わなかったことについて怒っていると麗奈が言う。

「まあいいや、頑張れよ〜」

和人は行ってしまった。

「あ……」

俺は喧嘩の仲直りの方法なんて知らない…

どうすれば…

「とりあえず外のベンチで食べるか…」

俺は外のベンチに行きコンビニで買った焼肉弁当を食べている。

「里香に謝ったほうがいいんだろうか……」

そんな独り言を言っていると気付かなかったが後ろのベンチでカップルが食事をして  
いるようだった。

「（この雰囲気は今の俺には耐え難いな……）…残りは食堂で食べるか…」

弁当を半分残し食堂に移動しようとする

「刹那くん？」

「……………なんだ、明日奈と和人か…あんまり人前でイチャ付くなよ。この場所は食堂の窓から丸見えだからな。」

俺はそう言い移動する。

「あ！刹那くん！」

「まったくあいつは……………」

俺は食堂に向かった。

俺が廊下を歩いているときに食堂では

「あーキリトとアスナあんなにイチャついて…けしからんなあ」

里香が食堂の窓から外を覗いている。

「もうリズ…里香さんだって刹那さんと仲直りすればいいじゃないですか？」

「仲直りつたって……………」

「こう後ろからギュ…つてすれば許してくれますよ、きつと！」

「珪子アンタね！そんな恥ずかしいこと…」

里香は顔が赤くなる。

「じゃあアンタはキリトにそういうこと出来るっての!?!」

「き、キリトさんは関係ないです！」

珪子も顔が赤くなる。

「わかりました！もし里香さんが刹那さんに謝ることが出来たら私もキリトさんに抱きつきますー！」

なぜかここで反抗してくる佳子。

「じよ…上等じゃないの！私達これでも恋人同士なのよ！そんなハグくらい簡単に「里香、そんなに騒いでどうしたんだ…？」…刹那!？」

「あ、刹那さんこんにちはー！」

「珪子か、いつも里香が世話になってるな。」

「いえいえ、お世話になってるのはこちらですよ。ねえ、里香さくん。」

珪子が里香に目で何かを訴えてる。

「そ、そ、そんなことより刹那！アンタなんで学食来たのよ！いつもは教室でキリトと食べてるでしょ!？」

「あいつは明日奈と食べると言って俺の誘いを断った、それで俺は中庭のベンチで食べてたらそこでその2人に会い気まづくなったのでこちらに来たということだ。」

「つまり居場所がなくなつたと…？アンタって自分から友達作りに行かないわよね」

「キリト、クライイン、エギルもあつちからだし、里香もそつちからだろ？それに明日奈も

圭子も直葉も流れで友達になつたからな……確かに俺からというのではないかもしれない……」

「アンタの性格からして自分から友達作るのは難しいわよね」

「中学でもあまり友達はいなかつたからな」

「あと弁当食べるくらいなら私を誘いなさいよね、なんでいつも来ないのよ？」

「上級生の教室が苦手だ……」

「じゃあこれからこの学食で待ち合わせして一緒に食べましょう？」

「了解した。」

すると圭子が

「2人とも喧嘩してたんじゃないんですか？」

「そういえばそうだったな」

「なんか普通に話してたから忘れてたわ」

「……里香、その……すまなかつた……誘わなくて……今度一緒にやろう……」

「あ、うん……私のほうもごめんね、なんか勝手に怒っちゃつて……」

こうして俺たちは仲直りした。若干圭子が不満そうな顔をしていたのはよくわからなかつたが……

「そういえば！刹那さん今日のオフ会来ますよね？」





「里香さんお久しぶりです♪」

「……麗奈、離れてくれないか…周りからの視線が痛い…」

特に男子生徒からのな……

エギルの店

Dicey cafe

どうやら和人、直葉、明日奈は里香があらかじめ遅い集合時間を教えてたので遅くなるということだ。

「よおセツナ！」

「クラインか」

クラインがいきなり俺の肩に腕をまわし、耳元で

「お前……彼女居るのによお……なんであんな可愛い子まで連れてんだよ……？」

「あれは俺の妹だ」

「妹つてもよ、お前さ…妹？妹なんていたのかよ!？」

「ああ、和人…いやキリトも知ってるしエギルも知ってるはずだ。知らなかったのはお前くらいだ」

「こんにちは、刹那にいの双子の妹の麗奈って言うの、よろしくね。えくと…？」

「クラインだ、こいつにはあまり近づかないほうがいい。いつ襲われるかわからないからな」

「おいセツナ！ 適当なこと教えてんじやねえ！……よろしくね、麗奈ちゃん。」

「は……はあ……」

クラインがなにやら決め顔で麗奈に寄って話しかけてたが麗奈は困った顔をしていった。

「刹那、そろそろキリトたち来るわよ」

里香は俺にクラツカーを渡して来た。

「なるほど……了解した。」

ちようど和人たちがやってくる。

入ってくると和人は少し驚いた顔で

「俺たち……遅れてないよな？」

「う、うん……そのはずだよ？」

「アンタたちにはわざと遅い時間を教えたの！ 主役は遅れてっつてね」

和人と明日奈、そして後ろにいるのが和人の妹の直葉であろう。

和人たちが入店してくる。

和人は里香に手を引かれ、ちよつとした段差の上に登る。

「えー皆さんご唱和下さい…：せーの!!」

「「「「キリト! S A O クリアおめでとー!」」」」

皆が一斉にクラツカーを鳴らす。

「かんぱーい!」

「「「「かんぱーい!」」」」

和人は始終驚きっぱなしだった。

なにやらキリトがエギルたちと難しい話をしていたそうだが……

俺たちはその後解散し、2次会は11時にイグドラシルシティに集合とのことだ。

—————

イグドラシルシティ

俺と麗奈は集合時間に少し遅れてやってくる。

「すまない、ネーナを睡眠から起こすのに戸惑ってな」

「余計なこと言わないで!」

「よし、セツナとネーナちゃんも来たし!あとはキリトとリーファちゃんだな」

「あいつが遅れるなんて珍しいな」

クラインとエギルがそう言って周りを見渡す。

「アスナなんか聞いてない?」

「何も聞いてないわ」

「う〜ん…シリカは？」

「私も何も聞いてませんよ？」

リズベット、アスナ、シリカも同じような会話をしている。

なぜすぐに彼らだとわかるかというと、以前キリトがアスナを助けた際に意識体である茅場晶彦から託された世界の種子へザ・シードが関係している。

その種はVRMMOの素であったという。それをキリトはエギルに頼み、世界中のサーバーでダウンロード出来る環境にした。

つまり世界中の小企業、大企業、個人などそこそこの大きさのサーバーがあれば誰でもVRMMOを展開することが可能となる。

それに加え新たに展開されたVRMMO同士は繋がりにある。

つまり他のVRMMOで作成したキャラクターをまた別のVRMMOにコンバートすることも可能になった。

つまりリズベットやアスナ、クライアントたちもSAOのAvatarをこちらの世界、ALOにコンバートしたということだ。

ちなみに俺もしようと思ったのだが周りに止められた…俺も種族変えたかったのだが…

「あ、そう言えば！」

ネーナがいきなり声をあげる。

「リーファ、なんか1次会するとき周りに馴染めてなかった気がするんだけど？」

「リーファが？」

「うん、なんか端にずっと独りぼっちでいたような」

「そうだったんだ…悪いことしちゃったね、じゃあキリトくんもリーファちゃんのところに行く？」

「その可能性は高いな…よし！じゃあキリトたちを探しに行くか！」

「待てクライン」

「なんだよセツナ！」

「キリトならあそこだ」

俺は上空を指さすがそこには何も無い。ただ雲がかかっているだけだ。

「何もねえじゃねえか！」

「違う、俺はあの雲の上だと言っている」

「雲の上だあ？」

「ああ」

「……………まあ闇雲に探してもしようがねえしな、お前の感頼りにするぜ」  
クラインは俺の頭をポンポンと叩いてきた。

「それにしても猫耳のセツナってのも面白いな」

「ぶっ飛ばすぞ…?」

—————  
俺たちはその後雲の上を搜索していた。

「キリトくくん！」

「キリトさくくん！」

「おいセツナ、いないじゃねえか！」

「たしかにこの辺感じたんだが……」

「?あれ…?セツナにい、たしかケットシーって目がいいんだったよね……?」

「ん?ああ…どうした?」

「あれって……」

ネーナが指さした先にはキリト、リーファが回っていた。いや、踊っていた。

「ふっ……妖精たちの舞…フェアリー・ダンスってことか…」

「くうく！キリトのやつめ！」

「綺麗ですね」

「うん…キリトくん…」

そしてキリトたちの舞が終わりキリトが空を指さす。

すると俺たちには決して忘れることの出来ないものを見る…そう、浮遊城アインクラッドである。

「あれは……………」

「そうか、お前さんはしらなかったんだな」

「みんなは知ってたのか…?」

「私はキリトくんに聞いたんだよ」

「私はアスナから内緒にしててごめんね、セツナ」

「私もキリトさんから」

「なぜ俺には…」

「とりあえず行きましょ！浮遊城アインクラッドに」

「……………今度こそクリアしてやる…！100層まで！」

こうして俺たちは新たなアインクラッドに向かって飛んでいった。



## キヤラ説明&用語

キヤラ

セツナ（刹那）：ALLO

アスナを救出するために再びナーヴギアを被り、ALLOにログインした。

種族はケツトシー。本人曰く、小回りが効きしかも目が良いという利点 だけ”に目が行き選択した。キリト曰く「目つきの悪い黒猫」だそうだ。

服装は初期装備の上に青いコートを羽織り、首に赤いマフラーを巻いている。

戦闘は短剣と片手剣で戦う。だがグランドクエストのときにもう1本片手剣を購入した。

魔法はごく簡単なものしか使用出来ない。だがネーナの強力もあり、擬似トランザムを発動させた。擬似トランザム中の新技としてトランザムライザーという技も使用した。トランザムライザーとは、2本の片手剣の先から炎のようなものを照射する技である。

ネーナ（麗奈）

刹那の双子の妹、赤みがかった茶髪が特徴的。気まぐれで無邪気な性格。

中学では剣道部に所属しており、その際直葉と知り合う。高校も直葉と同じ高校である。直葉の受験勉強などを手伝ったとか

ALOをはじめたきっかけは、刹那とまた昔のように遊んでもらいたかったから。もともと無口な彼は両親の事故死からさらにカラにこもるようになってしまった。その兄になんとか構ってほしいかったため、彼の世界、VRMMOについて知りたいということだ。

ALO内ではサラマンダーに所属しており、全プレイヤー屈指の実力の持ち主。

刹那のことを「刹那」と呼び捨てにしてたが、ユイが刹那のことを「お兄ちゃん」と呼んでたことに対抗してか知らないが「刹那にい」と呼びはじめた。すると現実でもそれが抜けなくなってしまう、結局その呼び方が定着してしまった。

リボンス・アルマーク

緑の髪に紫の目が特徴的な好青年、だが彼は米国の科学者。彼の出した人類進化の論文「革新者」は世界中から注目された。そして彼は茅場晶彦に誘われ共にSAO世界で

その「革新者」<sup>インベイター</sup>になりうる人物を探すことにした。他人を見下すような言動とることが多々ある。

SAO内では〈血盟騎士団〉のもう一人の団長。目立ったユニークスキル、エクストラスキルなどはないがその優秀な頭を使い知将として働いていた。だがいざ戦いに出ると堅実で冷静な戦い方で相手を圧倒する。ラフコフ討伐の時はリーダーのPohを素手で圧倒するという離れ業を見せつけた。

そして何を隠そう彼自身も革新者であったのである。SAO内の最終決戦、75層でのボス討伐後のセツナとのデュエルで革新者のみが見えるスキル、〈TRANS-AM〉を発動させセツナとデュエルした。

セツナのユニークスキル〈セブンソード〉の奥義、〈メテオ・コンビネーション〉により敗北した。

SAO世界の崩壊と共にセツナ、いや刹那に人類を革新者への進化という自分の夢を託し、茅場晶彦と共にデータの波に消えていった。

SAO世界崩壊後は茅場晶彦と同じように自分の脳に大出力のスキニングをかけ、自分の意識をデータ世界に写した。「僕にとつては身体すらただの入れ物なんだよ」と本人は言っている。

「革新者」  
イノベーター

リボنزの提唱した人類進化の到達点。

皆が革新者になれば地球からは争いがなくなるとまで言い切った。

その正体は、脳の完全覚醒。本来、人間の脳は15%しか使われてないと言われていた。だが残りの85%を使いきれたら、85%全てでなくても15%だけでも使えたら常人の2倍。つまりそういうことだ。

運動神経の向上や認識力の拡大、直感力的な第六感の発現なども見受けられる。

特に目立つのは認識力の拡大と直感力である。人よりもより多くの情報を取り入れ、それを処理する。つまり全ての人間が革新者になれば皆、解りあえる、ということだ。あとは直感力、これは読んで字のごとく常人の何倍も感が優れているということだ。

リボنزがSAO内で見つけた革新者候補は2人。セツナ、そしてPohであった。最初に見つけたのはPohでリボنزは自ら接触し、行動した。(ラフコフ討伐時にPohがリボنزの正体を知ってたのはそのため)だがPohには可能性はあったが覚醒のための何かが足りなかったため完全なる革新者になれなかった。次にセツナは本格的に〈セブンソード〉を使用しはじめてから革新者への扉が開かれた。

根本的にはまだ謎なところが多い。覚醒の方法や、革新者になりうるものの見分け方などもリボンスなき今謎に包まれたのである。ただ特徴として上げられるのはその力を使っている際や、感情が大幅に変化すると目が黄色くなり、瞳孔内に稲妻のようなのが走る。

## フアントム・バレット編

## 第二十三話 銃世界—GGO—

「おい！セツナくん！」

「……………あまり大声で呼ぶな」

2025年の12月、俺は総務省仮想課の菊岡に銀座のとある店に呼び出された。

夏に和人と呼び出されたときに余計なこと言わなければよかった…

「まあとりあえず座って座って、好きなもの注文していいかさ」

菊岡は席に座りメニュー表を渡してくる。

メニューを開くと値段がケタ違いなケーキなどがズラツと並んでいる。

「……………じゃあチョコケーキとコーヒーで」

菊岡もコーヒーを注文し、一息ついてから菊岡が本題を切り出した。

「セツナくん、単刀直入に聞こう…ゲーム内から人を殺すことができると思うかい？」

「……………どういうことだ？」

俺が質問すると菊岡は資料を見せてきた。

「これは？」

そこにはアミユスミアを被って死んでいる人物の写真が

「今回の事件の被害者だよ、死因は心不全」

「心臓が止まったってことか？」

「うん、マンションの大家が掃除をしているとき部屋からただよう異臭に気付き中に入ると……」

「アミユスミアを装着し、死亡してる被害者の姿が……」

「そう、しかも部屋の中は一切荒らされてなかった」

「だがそれとゲーム内から人を殺すのと何が関係がある」

「それがね……このプレイヤーが死亡した時刻とちょうど同じ頃GGO内のある場所で不信な行動をしたプレイヤーがいてね。話によると「裁き」とか「本当の力」とか言った後にこのプレイヤーが出演してた番組が放送されてるテレビに向かって銃を撃つたらしいんだ」

「ちよつと待て、こいつはテレビに出るほど有名人だったのか？」

「うん、GGO内での最強を決める大会「Ballet of Ballets」通称「BoB」の前大会優勝者さ」

「……………そうか、話を続けてくれ」

「それでそのプレイヤーは最後に「この銃と俺の名前は死銃」と言って去って行ったん

だ」

「…………その死銃というプレイヤーがこいつを殺したと…お前はそう言いたいんだな？」

「そうだね」

「…………偶然が重なっただけではないのか？この資料によるとこいつは一日中ログインしっぱなしで食事もまもととっていいない、推測するにそのようなことが何度もあったのだろう。度重なる不健康な生活が心不全に繋がったと俺は思う」

「つまりゲーム内から人を殺すことは不可能だど？」

菊岡はニヤリと微笑んで聞いてくる。

「ああ、ナーヴギアと違いアミュスミアには脳をマイクロウェーブで3分クッキングする出力は出ない。なによりこいつだけでは証拠不十分だ」

「それがね、もう1人いるんだよ被害者が」

「なんだと？」

菊岡はもう1人の資料も渡してくる。

それに目を通すと先程のプレイヤーと色々と類似していた。

「……………こいつも死銃に？」

「確証はないけど多分そうだね、近くにいたプレイヤーが「裁き」とか口にしてるのを聞



「いてるからね」

「……………そうか」

「それでも結論は変わらないかい?」

「……………変わらないな99%ありえない、もしあるとすればデ○ノートでも使ったんではないか?」

「……………」

菊岡は口をポカンと開けたまま固まっていた。

「……………どうした?」

「いや…君も冗談を言うんだなーって」

「……………すまない」

「いやいや、でも君と同じ結論でよかったよ」

「そもそもなぜ俺に聞く、政府のエリート共で話し合えば俺のような意見は山ほどあるのではないのか?」

俺は首をかしげ、聞くと菊岡はまたもニヤリと笑い

「我々凡人とは違う意見が聞けるかもしれないだろ、だって君は『革新者』イノベーターなんだから」  
「……………革新者イノベーターと言うがな、俺自身変化には気付かないんだ。強いていうとすれば運動神経や視力、聴力など各機能が常人より上になっただけだ。急に頭はよくなった

りしない」

「へえ、それだけでも充分な変化だ」

俺はこの男がなんか苦手だ…全面的に信用していいのかどうか…だが悪いものは感じないし多少の信用はしてるが……

「菊岡、本題を言え。こんな話をするために呼び出したわけではないだろ」

「ご名答、刹那くん…君にはこのゲームに参加してもらいたい」

「……つまり俺に撃たれてこいと？断る！俺はまだ死にたくないんだ」

席を立てて帰ろうとする。だが菊岡はそれを許さなかった。

「ゲーム内から人を殺すのは無理だって君も言ったじゃないか！」

「それでもだ！俺は断る、キリトにでも頼むんだな」

「……………君さ、夏に「何かあったら俺に言え」とか言つてプール行っちゃったじゃないか」

「う…………」

「ほらほら、ケーキもまだ頼んでいいからさ」

そこまで言われたら反抗出来ない…やっぱり苦手だ。

「じゃあコレとコレを持ち帰りで頼む」

店員にケーキを2つ注文する。

「妹さんへかい？」

「ああ、こうでもしないとキレるからな」

「そうなんだ、仲良しでいいね」

「……そんなことより聞きたいことがあるんだが」

「答えられる範囲ならなんでも答えるよ」

「……先程の2つの資料を見る限りこの死銃というやつが狙うのには条件があると思うのだが」

「流石だね。そうだよ、この被害者2人はGGO内ではかなり名の通ったプレイヤーだよ」

「……つまりゲーム内で有名にならなければ死銃には狙われない……菊岡、このゲーム内で手早く名を売る方法は？」

「近々BOBという大会があるんだ」

「最初の被害者が優勝した大会か……それだけわかれば充分だ、詳しいことはあとでメールしてくれ」

「ちよつとまだ話は……！」

俺は土産を受け取り、店を後にした。

-----

「ただいま」

俺は家に帰ってきて、リビングに行くよ

「あ、刹那さんお邪魔してます」

「直葉か」

麗奈が直葉を家に呼んでいたようだ。

「スグが宿題のわかんないとこあるから教えてって来たんだよ、もし良かったら刹那兄にも教えよつか？」

「残念ながら宿題は全て終わっている。麗奈、直葉、ケーキだ」

ちようど2個頼んであったのが功を奏したな。自分の分がなくなったのは残念だが

：

「ありがとうございます！」

「ありがとね〜」

喜んでくれたからそれでよしとするか。

「俺は部屋にいる、何かあれば呼んでくれ」

「らーじゃ♪」

そう言い残し、部屋に向かって歩いてった。

「刹那さんって優しいんですね」

「いつもは厭しいんだけどねえ〜あむっ……ん〜！このケーキ美味しい〜！」  
「ホントに美味しいですね」

「よくこんなお店知ってたなあ……こういうの興味なさそうなのに」

「いいじゃないですか、美味しいんですから」

「む〜……」

――――  
夜、俺たちはいつものメンバー（都合によりクライン不参加）でALOにログインしていた。

なんでもリズが作りたい武器の素材集めを手伝うとのことだ。

狩りのメンバーはネーナ、リズ、リーファ、シリカの4人。キリトとアスナの2人はどっかでイチャついているのだろう。俺か？俺も狩りに混ざろうと思ってたのだが「ネーナたちでやるからいいの！」とハブられたので現在は我が子の初狩りを見守るお父さんのポジションだ。

「はああああああああ！」

ネーナはソードスキル『レイジスパイク』を発動させ、中型モンスターの腕を切り落とした。

「てやあああああああ！」

次はシリカがソードスキル『ラピッドバイト』でモンスターの胴体に切込みを入れる。シリカが着地しようとしたらモンスターの触手が足に絡みつき宙吊りになりそうだった。

「へへへ、昔の私とは一味違いますよ！」

シリカはドヤ顔で宙吊り状態を回避したが今度はモンスターのほうがシリカより高く飛び、結果シリカは宙吊り状態になってしまった。

「きゃあああああ！リ、リーファさん！助けて下さい！」

シリカはスカートを手で抑え、もう片方の手で短剣をブンブン振り回している。また飛び直せばいいだろう……

「任せて！はあああああああ！」

リーファはシリカを捕まえてる触手を切断した。

「リーズさん！」

「任せんしやい！チエエストオオオオオオ！」

リーズが上空からソードスキル『パワーストライク』をモンスターの頭部に叩きつける。するとモンスターが横たわった。

「リーズさんナイス〜！」

「流石ですー！」

「いえーい！流石リズさんー！」

リーファ、シリカ、ネーナがモンスターを倒したりズを賞賛し、みんなでハイタッチしている。

だが、倒したであろうモンスターが未だポリゴン化していなかった。そしてそのモンスターが起き上がり、4人の後ろから襲いかかろうとしている。だが4人は気付いていない。

あの馬鹿がっ！

俺は自分の武器である片手剣　カーテナを投擲スキルで投げた、カーテナは4人の後ろのモンスターを貫通する。するとモンスターはポリゴン化し、消滅した。

俺はカーテナを拾ってきて、4人のところに向かう。

「ありがとうございます、セツナさん！」

4人のところに行くとしリカがお礼を言ってきた。

「4人共不注意すぎだ。ネーナ、お前は詰めが甘すぎだ。シリカ、お前ももっと臨機応変に対応しろ。リーファ、お前はソードスキルに頼らない戦い方に慣れすぎている、スキルのほうが威力は高いんだからもっと積極的に使っていけ。……最後にリズ……お前はネーナにも増して詰めが甘すぎる。敵はちゃんと倒せ！」

「「「はーい……」」」

4人は少し落ち込んだようだ。仕方ない、直しといたほうがいいことを教えたただけなのだから。

そうだ、リズには伝えないと、菊岡との話のこと、GGOのこと。またALOの時みたいに怒られるのも嫌だからな。

「ネーナ、シリカ、リーファ、リズを少し借りてもいいか?」

「リズさんですか? いいですよ」

シリカからの許可が出た。つまりOKということだろう。

「リズ、ちよつと空行くぞ」

俺はリズの手を引き、上空に向かった。

「ちよ、いきなり何よ?」

「……俺はこれからしばらくALOにログイン出来なくなる」

「どうしたの? 何かあるの?」

「ああ、GGOというゲームにコンバートしなくてはならなくなったからな」

「GGO!?!」

コンバートするゲーム名を聞くとリズは目を丸くした。

「どうかしたのか?」

「GGOって唯一プロがいるゲームじゃない!なんでそんなのやることにしたのよ!?!」



「……………菊岡の頼みでな」

「あの総務省の偉い人でしょ？」

「偉い人かどうかは知らん」

「……………なんか私あの人のこと全面的に信用出来ないんだよな」

「それは俺も同じだ、だが頼まれたからにはやらなくてはならない」

「そっか…じゃあ頑張つて来なさいよね！」

リズは笑顔でそう言ってくれた、大切なことをまだ言っていないが…大丈夫だろ

「ああ、頑張ってくる」

俺はリズを抱きしめた。リズも最初は戸惑っていたが抱きしめ返してくれた。

……………俺は…絶対に死銃と呼ばれているやつを掴まなければ…

しばらく抱き合っていると下からネーナたちの声が聞こえたので急いで戻った。

—————

次の日、俺は都内にある病院に来ていた。理由は菊岡に指定されてた場所がここだからだ。

ゲーム中に何かあっても病院なら何かと対処しやすいということもあってだ。

それともうひとつメールの内容で気になったことなのだが、どうやらこれには報酬が出るらしい。高校生が持つにはケタ違いな額だ。

「病室は……2025……ここか」

メールで指示された病室に入る、そこには既にGGOがインストールされているであろうアミユスファイアがあり、ベッド、医療器具、それと専属のナースがいた。

「刹那くん、お久しぶりね」

「お久しぶりです、あの時はありがとうございました」

柄にも無く礼儀正しく接する。この人は俺が現実に帰ってきてからリハビリなどを手伝ってくれた人だ。そんな恩人を軽く扱うなんてことは出来ない。菊岡は恩人ではないのかだと？ あんなやつ知らん。

「早速始めたいんですが……」

「ああ、ちよつと待って！ 電極とか貼りたいから服抜いじやつて」

「はい……」

俺は上裸になりベッドの上に寝た。

看護師が電極を貼り終わると俺はアミユスファイアをかぶる。

「数時間は潜りっぱなしになると思う……思います」

「了解、そのあいだはしっかり身体見とくからね」

「よろしく頼む……お願いします……」

目を瞑り、仮想世界へと入っていくための合言葉、いや掛け声を口にする。

革新者 イノベーター リンクスタート！

## 第二十四話

## 狙撃手たちースナイパー

リンクスタートと言つてしばらく経ち、再び目を開ける。

俺の目の前に広がった世界はS A OともA L Oとも雰囲気の違いはなんとも言えない世界だった。

周りを見渡すといかつい装備をしたプレイヤー、そして建物も重厚感満載だった。それと何か油臭い気が……気のせいかな

周りを見渡すために首を回しているといつもより髪が鬱陶しい、知らないあいだに伸びたのか？いや俺は重度の癖っ毛だ。こんな伸び方はしない……

近くのガラスに写った自分を見て確認する。ガラスの中には髪が肩のあたりまで伸び、とところどころが跳ねている。そして身体つきも少しだが細くなり、見ようによつては女にも見えなくもない。

……どうりで周りの男どもの視線が刺さるわけだ。

「お、お姉ちゃん可愛いね！俺たちとお茶しない？」

チャラ男風なやつが数人引き連れて俺に声をかけてきた。こういう馬鹿なやつが来

るんだ……まったく……

「残念だったな、俺は男だ。」

声は元のままだったか……よかった……だがこの容姿でこの声というの……

「お、お前！男だったのか!？」

ナンパをしてきたチャラ男は驚いていた。

「……………これからは男をナンパしたという黒歴史を胸に秘めながら生きていくんだな」

俺はそう言い放ちその場から離れる。離れる際に少し後ろを見たがナンパしてきた男は随分と沈んでいた。……少しやりすぎたか……まあいい……

俺はしばらく街中を歩いていて、その目的は武器屋と総督府？という建物の場所を誰かに聞きたいからだ。……当然だが周りにいる男どもは信用ならん……俺のことを好奇の目線で見てきたからな……どこかにいい人物は……

信用出来そうな人物を探して街を少し歩いているとこの世界に珍しい女性プレイヤーを発見した。

「すまない、聞きたいことがあるんだが」

そこまで言っただけ俺は気付いた、これでは先程まで俺をナンパしてきたやつらと変わらなではないか……

その女性プレイヤーは俺のほうをジッと見てから返事をした。

「なに、どうしたの?」

おそらくこの外見がここで役に立ったのだろう。…そうとわかったら不本意だがこれを活用しよう。

「あの…安い武器屋と総督府つてところを探してて…もし良かったら連れてってほしいんですが」

完璧だ、我ながらこの声真似は完璧だと思う。(実際には「ああ、こんな声の女子もたまにいますよね」レベル(声の創造はグラハム、ピリーと初めて会った時の刹那の感じで)「…あなた、見たとこ初心者よね? 安い武器屋はわかるけどなんで総督府に?」

「えつと…BOB?という大会に参加するために…」

「始めてすぐにBOB参加とは勇気があるのかそれともただの馬鹿なのか…いいわ、案内してあげる。まずは安い武器屋のほうでいいわね?」

「ああ、助かる…助かります。おr…自分はセツナといいます、よろしくお願いします」「私はシノンよ、よろしくね。さあ行きましょ」

シノンは快く案内を引き受けてくれた。……それにしても油断すると素が出てしまふな…気をつけなければ…

—————  
武器屋に着いた。シノンの話ではこの武器屋は街でもトップクラスの品揃えらしい。

「あなた今どのくらいお金あるの？」

「……10000くらいだな」

「バリツバリの初期金額ね……もし良かったら足りない分出してあげよつか？」

「……そんな、悪いですよ……どこかバツと稼げるところとかないですか？」

「……基本的には対人かモンスター狩りで稼ぐしかないけど……あとはオススメはしないけどアレ……とか？」

シノンが指差した先を見てみると25mほどのトラックの先に小屋があり、その前に機械仕掛けのガンマンが立っていた。

「？あれは何のゲームなんだ？」

「手前のゲートから進んで行って奥のガンマンにタッチすれば上に書いてある金額全額貰えますよってゲームよ」

「全額だと……!？」

上の金額の表示は30万程度あった。ケタ違いの額だ。

「だって無理だもん、あのガンマン8mラインを越えるとチート並の早撃ちしてくるんだから。予測線が見えた時にはもう手遅れ」

「予測線……?？」

俺が首をかしげるとシノンが説明してくれた。親切でいい子だな……騙してると思

うと心が痛い……

すると1人の男が挑戦するらしくそのゲート前に立っていた。

「見て、またプール箱増やしてくれるみたいよ」

「……………」

…お手並み拝見といくか……………」

「へへっ！今回はクリアしてやるぜ！」

その男は参加料の支払いをするパネルに触り、ゲートの前でスタートの姿勢を取る。

3……2……1……！！開始のブザーが鳴るとその男は走り出す。数m進むとその男

は左足と左手を奇妙な方向に上げて静止した。

何をやっているんだ…コイツ…

するところちょうど手や足のあいだを銃弾が通り抜けた。

「……………なるほど、今のが予測線……………」

「そう、防御的システムアシスト「バレットライン」狙われたプレイヤーに初撃を除き、

弾道が表示される」

「……………なるほど」

そうこうしてるうちにその男はもう問題の8mラインにまで達していた。

「チョロイぜ！」



男は残りの距離を一気に詰めようとするがガンマンは素早く5連射し、男の大勢を崩して倒れたところに弾丸を3発撃ち込んでゲームオーバーにした。

「はあ…やつぱダメかあ」

「行けると思ってたのになあ」

「…横に大きく動けるならまだしもほとんど一直線に突っ込まなきや行けないからどうやってもあの辺が限界なのよ」

「…予測線が見えた時にはもう遅い…なるほどな……」

「あ、ちよつとあなた…！」

シノンの説明やあの男のプレイを見てなんとかなると思い俺はゲート前に立ち、パネルに参加料を支払った。

「おいおい、ビギナーが挑戦かよ」

「今度のカモは可愛いじゃん！」

「ついでに見てってやるか」

「ん？あいつ…シノンか、それにあいつは…」

普通の野次馬共とは違う感情でシノンや俺を見ている視線にはこの時の俺はまだ気付かなかった。

「……………」

3... 2... 1... !!スタートの合図になると俺は全速力でコースを走った。数m走ると俺の目の前に赤い線が3本見えた。これが予測線……

俺はその予測線をよけるように横に飛ぶ、飛んだと同時にくらいに弾丸が俺の横を通り過ぎる。その後進む時は出来るだけ左右に動きながら走ることを意識しているとガンマンもそれに戸惑ったのか撃ってくる数が少なくなった。

「おお！すげえ！」

「もう10mだぞ?！」

「なんなんだあの子！」

ガンマンの撃ってくる弾丸の数と感覚がケタ違いになり、リロード時間も圧倒的に短縮された。だが俺は問題なくかわし続け、ガンマンのリロードタイミングと重なりちようど触れそうになった。

「これで……終わりだ……ッッ！」

ガンマンは銃から実弾ではなくレーザーを放ってきた。だが俺はその事態をある程度予測していたのといち早く気付いたので上空に飛び回避した。

「……………チェックメイトだ」

俺はガンマンの目の前に着地しガンマンに触った。

「Oh!Noooooooooooooooooo!!!!!!」

ガンマンがそう叫び膝を折ると小屋から大量のコインが出てきた。150万…やはり多いな。

俺はディスプレイを操作し、その150万を受け取った。そして周りを見てみるとシノンはもちろんギヤラーたちも口をあぐり開けて俺を見ている。しまった…目立ちすぎた……

「すげえ…あの子…」

「何者だよ…」

シノンは驚き顔でコチラに近づいてきて

「さ、最後…2mくらいのところのレーザー…あの距離なら予測線と実射撃のタイムラグはほとんどないはず…どうやって」

シノンの質問だがそれは周りのやつらも気になっているようだ。答えないと感じが悪いよな…

「それはだな…ハッ！…それはですね……だつてこのゲームって弾道予測線を予測するってゲームなんですよね？」

「……だ、弾道予測線を予測するう!？」

シノンの叫び声そのフロアに木霊した。

---

「……………どれにするか迷うな……このアサルトライフルとサブマシンガン、何が違うんだ……違うんですか？」

シノンはそれを聞き呆れたようにこつちを見た。

「そんなことも知らないであの回避技術を……コンバートって言ったわよね？前はどんなゲームやってたの？」

「S……ALOというゲームを仲間内でな」

「あの飛べるってやつよね？ふーん……あ、それでアサルトライフルとサブマシンガンの違いよね、それは……」

「??？」

俺はシノンに違いを説明してくれと頼んだだけなのだが彼女は銃の歴史を語りだした……よっぽど好きなんだな……

「ってこんなこと聞いてないわよね……」

シノンは正気に戻ってくれた。

その後シノンから武器の説明をいろいろと受けながら店の中を回った。

そこで俺はある武器が目に入った。

「……………これは……」

「それはフォトンソード、この世界での近接武器ね。でもみんなライトセイバーやら

ビームサーベルやら適当に言ってるわ」

「ビーム……サーベル……」

俺は今まで使ったことのない種類の剣に興奮にも似た感情を抱いた。そして迷うことなく白色のフォトンソード、ビームサーベルを購入した。

「ホントにそれでいいの……？超至近距離じゃないと効果を発揮しないのよ？」

「売っているということは使い道はある……ありますよ。あとビームサーベルが3本、実体剣が3本欲しいな……」

「……………そんなに買ってどうするのよ」

「冗談ですよ、流石にここまで来てセブンスソードなんて真似はしませんって。そんなことより他に何か買ったほうがいいものはありますか？」

冗談ではなく7割がた本気だったのだが……黙っておこう。

「そうね、あとは防具とか……あといくら余ってる？」

「15万くらい」

「光剣ってやったら高いのね。その値段なら……」

「あ、あとは任せます」

シノンがまたよくわからない専門用語ばかり言ってきたので残りのことは全てシノンに任せた。

俺はシノンの指示でFN—57?というハンドガンを購入した。

「ところでセツナは銃を撃った経験は？」

「…ありません」

するとシノンはそうなんだと言い、俺の袖を引つ張りどこかへ連れていこうとする。

そして連れて行かれた場所は鳴り止むことを知らない銃声が響く場所だった。

「……は？」

俺はあまりのうるささに耳を塞ぎながら質問する。

「ここは射撃場、お店で買った銃なら自由に試せるの」

なるほど、それでさっきの質問か

俺は空いているところへ行き、銃を構える。

「軽い……」

「強化プラスチックだからね、あと最初のうちは両手で構えて左目も開けたほうがいい

わよ」

「そうか……」

言われたとおり両手で構え、両目を開けた。そして的の中央をしつかりと狙う。すると視界に突然サークルが現れた。しかもそれは大きくなったり小さくなったりして

る。

「多分セツナの視界にはサークルが大きくなったり小さくなったりしてると思う。それは攻撃的システムアシストの「バレットサークル」弾はそのサークル内にランダムで当たる、つまり命中率に関わるってことね」

「…命中率を上げるには？」

「一番簡単なのは対処に近づくこと、でも射撃戦でそれは難しい。だから……落ち着くことよ、それは心臓の鼓動と直結してるから」

「なるほど……」

俺は言われた通りに落ち着いてみた、するとサークルはどんどん小さくなっていく。

まだだ…まだいける…

心を鎮める、何も考えないように……

「数発撃ってみてもいいか？」

「どうぞ」

「……………」

パンッパンッパンッ！

俺は3発連続して撃ってみた。

「以外に腕へと衝撃が来るのだな……」

俺が銃を撃った感想を述べているとシノン は練習場の横のパネルを操作し的にをコチラに寄せた。

その的は中心に穴が1つ空いているだけだった。

「すごいじゃない、初めてで中心に当てるなんて」

「…だが残りの2つは外れた…」

「いやいや、上出来よ」

そう言い、俺とシノンは店を出た。だがこの時俺達は気付かなかった。俺の撃った弾丸は全て中心を捉えていて全て同じところを通ったということ。

店を出ると外が若干暗くなっていた。

「すまない、時間を取らせてしまつて…：しましまして」

「ううん、大丈夫。それに女の子のプレイヤ―つてなかなかいないし。私もB O Bの予選が始まるまで特に予定もなかったから」

「…君も参加するんですか？」

「うん、このあと総督府に言つてー……」

シノンは素晴らしい俺の後ろにある時計を見た。俺も同じくそれを見た、時間は14：



50となつてゐる。

「まずい！受付終了まであと10分しかない！」

「なに!?すまない、俺のせいで」

「いいのいいの、私も不注意だったから。とりあえず急ぎましょー！」

シノン は走り出す、それに続き俺も走る。推測だが総督府というのは俺達の目の前にそびえ立つてるデカイ建物のことを言うんだろうな。

「ここから総督府までの距離は？」

「だいたい3kmつてとこね、エントリーに5分はかかると考えて……………間に合え……………お願い……………間に合つて……………」

「……………」

彼女は気を使つてくれたが実質俺のせいだ…クソ！これでは何の意味もない！何としても間に合わなければ！

俺は何かいい移動手段はないか辺りを見渡してみるとバイクのようなものが置いてある。

あれを使つてみるか…

俺はシノンの手を取りバイクにまたがった。そしてシノン を俺の後ろに座らせ稼働のための料金を払った。

「ちよ、ちよっとー！」

「黙ってる、舌を噛むぞ」

アクセルをめいっばい回し、バイクは瞬間的に加速した。

そして総督府までのルートを車をすり抜けて進んでいく。

「どうして!?!このバイク、操作が難しくって誰も乗れなかったのに!?!」

「現実でもつい最近友人の勧めで免許をとったんだ。だから出来て当然だ」

「……………じゃあもつと速くすることも出来るの?」

「当然だ」

俺はさらにアクセルを回し加速した。このペースなら総督府まであと一分もかからないだろう。

「あははははははは！気持ちいい！」

シノンは後ろではしゃいでる。おそらくこのスピードを体感したことがなかったのか…………

俺達は総督府に向かって進んでいる。

## 第二十五話

## 開幕—BOB（予選）—

「よし、5分前だ」

「まだ間に合う、急いで！」

俺とシノンバイクを降りて総督府に急行した。

シノンに連れられ総督府の中に入るとたくさん人がいた。

この中にデスガンが……

俺が周りをキョロキョロと見ているとシノンがはやくしなさい的な目で俺を見てきたので従わざるをえなかった。

そしてエントリー用の機械の目の前までやってきた。

「よくあるタッチパネル式のだけど……わかる？」

「問題ないです」

「そう、私はこつちでやってるから何かあつたら呼んでね」

そう言いシノンは自分のエントリーをしに行つた。

「さて……俺も」

タッチパネルを指示通り操作していき、最終項目までたどり着いた。だが

「な……現実の情報だと……」

そこには優勝賞金などを自宅や口座に送り届ける用の情報を入力しろと表示されていた。当然入力しなければ賞金も何も現実への還元は出来なくなってしまう。

「……………」

俺は多分ここ何年かで一番といえるほど悩んだ。

もし優勝なりしたら賞金なども当然で……それこそプロのいるゲームだ……額などは俺の想像を越えてるだろう……だが……

「終わった？」

「!!」

シノンが急に声をかけてきたため驚いてタッチパネルを触ってしまった。つまり住所などをいれないで登録してしまったということだ。

……まあこれで良かったのかもな……

「ブロックどこになった？」

「F—37です」

「私はF—19だから……良かった当たるとしても決勝ね」

「良かった……？」

「うん、各ブロックから本戦参加者は上位2名。つまり決勝に進めばその勝敗に関わら

「ずどちらも出場できるってことよ」

なるほど…そういうシステムか…何ブロックまであるのかは知らないが決勝リーグは十数人で戦うのだな、面白い

「でも、もし決勝で当たったら全力で勝負よ」

「……ああ、こちらでも本気で行かせてもらう」

大会登録をすませて俺達は予選会場に来ていた。

そこには大会前で和気藹々としているというより殺気立っているという表現のほうがいいというくらいに男たちがたくさんいた。

死銃……黒いローブに身を包んでいるらしいが……

俺はシノンに連れられ控え室に向かった。

シノンは控え室の椅子に座りため息をついた。

「まったく……お調子者ばかりで嫌になるわ」

「お調子者？あの人たちが？」

「ええそうよ！30分前からメイン見せびらかして、対策してくださいって言うてるよ

うなもんじやない」

「なるほど…そういう意味か」

「あなたも武器はギリギリまで装備しないほうがいいわよ」

そう言いシノンンは着替えを始めた。

「!!くっ……」

俺はとつさのことで目をそらした。

「??どうしたの、あなたもはやく着替えないと?」

シノンはこちらを不思議そうに見ている。

……この状況ではこれ以上誤魔化しきれないな

「………す、すまない…実はこういう者です」

俺は頭を下げ自分のプロフィールをシノンに送った。シノンはそれを開いて見ている。

「自己紹介ならさつきした………つてMaie!?だって…え!?…そのアバターで………確かに男にも見えるけど…喋り方とか………あつ!」

どうやらシノンは何か思い当たる節があつたようだ。静かになつたので顔を上げて見るとシノンが顔を真っ赤にしてワナワナと震えている。

「シ、シノン!悪かつた、謝る!」

俺のイノベーターとしての直感がこの状況は危険だと言っている……早急に対処を  
：

「うるっ！さいっ！」

シノンを手を大きく振りかぶって俺の頬にビンタをしてくる。そして控え室にはバ  
シノン！というとてもビンタとは思えないような音が響き渡る。

「す、すまない…シノン待ってくれ」

「ついてこないで…」

「まだ聞きたいことが」

「ついてこないで…！」

シノンは俺から逃げようと早歩きをしている。俺は先程頬にビンタを喰らったがま  
だお許しを得たわけではなかったようだ。シノンとしては騙されたことがよほど悔し  
かったのだろう…：まだ聞きたいことがあるのだが…

「他に知り合いもないんだが…」

「……………」

シノンはいきなり止まり肩を大きく上げた。しまった…現状は俺が嫌がる女の子を  
しつこく追いかけているという最悪な状況だ。仮に叫ばれたり騒がれたりすれば俺の

社会的死亡は確定だ……

「……はあ……………」

シノンには叫ぶのではなく大きくため息をただけだった。ため息した後俺のことを何か意味ありげな目で見てきた。……なんなんだまったく……

シノンは座れる場所まで歩き、長椅子のようなところに腰をかけた。

「それで……何を教えてほしいの？」

シノンはため息混じりに聞いてくる。

「ここから戦場までの移動方法、そして戦闘におけるの基本ルールだ」

「……まず対戦は1対1、フィールドは1km四方の立方体。プレイヤーは最低500mは離れた場所に転送される。勝敗がついたあとの武器のランダムドロップはなし。転移は時間が来れば自動的にするから」

「……助かる」

なんだかんだ言つて説明してくれるシノンはやはり優しい女の子なんだなと思いつつながら聞いているとこちらを見て

「絶対決勝まで勝ち上がりなさいよ……ここまでレクチャーしてあげたんだから……最後のひとつも教えておきたい……」



「最後のひとつ？」

「敗北を告げる…弾丸の味」

「……なるほど、そいつは楽しみだ…だがシノンには決勝まで勝ち残ることが出来るのか？」

さつきからシノンは自分が決勝に残るのを当然のように語っている、まあそのくらいの心意気がなければ勝負には勝てないのだが…

「予選負けなんかしたら引退する！」

「……君はこのゲームになぜそこまで…」

「これはゲームであっても、遊びではないのよ」

それを、いやそのフレーズを聞いた瞬間全身の毛が逆立つのに似た感覚を覚えた。

こ、こいつ……

「決勝リーグまで言って……強いヤツらを全員ぶち殺してやる…」

シノンは今まで見たことないような顔をして不気味に笑った。

まさか……な……

その時俺はこちらに近づいてくる2人の気配を感じた。それはシノンも同じようだった。

「シユピーゲル…ロックオン…」

1人は長い銀髪を後ろでまとめている青年、もう1人は茶髪を肩の辺りまで伸ばしている青年だ。

「シユピーゲルは大会に出ないんじゃないの？」

銀髪の青年はシユピーゲルという名前らしい：ゲルマン流忍術を使いそうだ

「うん、でも僭越ながらシノンとロックオンは応援にね」

「そう、ありがとう。ロックオンは何ブロックなの？」

「俺はDブロックだな。それよりシノン、お前来るの遅かったじゃねえか？何かあったのか？」

「ちよつと『ソコの人』に面倒なこと頼まれてね」

シノンは俺のほうをジツと見る。

俺はそれに対して手を振り答える。

するとシユピーゲルはどうもと挨拶をしてくる。

「へえ、シノンがこんなイケメンな彼氏を連れてくるなんてねえ」

「!？」

その発言に対して驚いたのが2人、いや俺もわずかばかりか驚いた。喋りさえしなければバレることはないと思っていたのだが…

「お、男？」

「ロックオン…あなたよくわかったわね…」

「座り方や細かな動作、それに決め手は目付きだな…あんな目を出来る女が何人もいたまるか」

ロックオン…こいつは周りのやつらとはひと味もふた味も違うな…面白くなってきた…

「それになあシノン、状況をしっかりと観察するのがスナイパーには大切だって教えただろ？」

「……そうだけど…とりあえずこんなヤツは彼氏なんかじゃないから！」

シノンは少し動揺した様子でいたので俺は少しイタズラをしたくなった。

「ふっ……先程までは親切にいろいろ教えてくれてたじゃないか、それに武器選びにも手伝って貰ったし」

「そ、それはアンタが女の子だと思ったからでしょ!？」

「それはロックオンが言ったようにお前の注意不足ではないのか？」

「くっ………いい!必ず決勝まで上がってきなさい!その頭ぶち抜いてやる!」

シノンは侮辱されたのがよっぽど恥ずかしいのか顔を赤くしてこっちに言ってきた。少しやりすぎな気もしたが……

「招かれたとあらば参上しないわけにはいかないな……俺と当たるまで負けるなよ」

俺は少し格好つけてその場から去る。

「くっ……」

「へえ、面白いやつじゃないか…決勝リーグで当たるのが楽しみだな」

「……………」

シノン、ロツクオン、シュピーゲルと各々の反応は違った。特にシュピーゲルからの反応は少し痛かったが…流石にやりすぎたな…

そう思っていると視界が急に白くなる。どうやら試合開始のテレポートが始まるようだ。

—————

真つ黒な空間に転移された。そして目の前には白い文字で対戦相手の名前が書かれており、試合開始までの時間のカウンtdownもされている。

「……………武器の装備を」

右手側にビームサーベル、左手側にハンドガンを装備した。

ちなみに俺の防具は水色と黒と白を基調とした身体に吸い付くタイプだ。それでシノンにこれでは目立つと言われて紺色のジャケットを上から羽織っている。

「……………ありえるのか…あのシノンが…死銃なんてことが……………」

俺は今日出会ったばかりだが彼女の色んな面を見れたと思っっている。あの「ゲームで

あつて遊びではない」「強いやつらを全員殺してやる」という発言……真意はわからないが……

「どつちが本当の顔なんだ……」

彼女は……とりあえず決勝で……彼女と……剣を……いや銃を交え……対話すれば……分かり合えるはずだ……

するとカウンtdownが0になり俺は対戦ステージへとテレポートされる。

「はあ……はあ……」

俺が転送されたのは古い遺跡あとのような場所だった。そしてマップの中央に向かえば敵と会えると思ひ俺はそこに向かった。

以前テレビか映画かで見ただのを見よう見まねして俺は柱の後ろに隠れた。

「相手にも動きがない……いや……すでに隠れて俺を狙っているのか」

俺は相手が隠れていそうな場所を探すために身を少し柱から出す。

するとその瞬間を待っていたかのように相手プレイヤーである「餓丸」は自分の武器であるH&K G3A3から弾を乱射する。

「くっ………！」

大量の弾道予測線が俺の身体に向かって飛んでくる。このままでは確実に蜂の巣に

なると思い俺は飛んで避けた。だがそれら全てを交わすことは出来ず足や肩などに被弾してしまふ。

「弾が多すぎる……ぐっ……」

柱の上に着地するが餓丸は銃の発射を止めない。俺もハンドガンを取り出し応戦しようとするが流石にここでは遠すぎる……

再び俺は柱の後ろに隠れ弾丸の嵐から身を隠す。

「確実に仕留めるにはもつと近づかなければ……」

その時俺は腰のビームサーベルを思い出す。

「そうだ……こいつで弾丸をうち落とせば……だがそれには弾道を正確に予測しなければ……いや弾道予測線がそれを補ってくれる……」

気付けば銃弾はもう飛んできていない、つまり敵は位置を変えるために移動をしていくということだ。ならばその隙を付く……物音を……僅かな物音を聞き取るんだ……

集中して周りに意識を広げていった。そして聞く。相手が移動の際に発する音を……

カサ……カサ……と俺の左側で不自然に動く音が聞こえる。

今だッ！

俺は音の聞こえる先にビームサーベルを出し突っ込んだ。

「な……ッ!」

相手もその予測外の行動に驚いたようで匍匐前進の状態から立ち上がり再び銃弾を発射する。

「弾道予測線は見えている！そんなものお！」

最初に襲ってきた銃弾をビームサーベルで切り落とす。

いける……！この戦法ならば！

俺の左手のハンドガンはあらかじめいつでも撃てるようにしてある、ある程度近づけば！

「くそっ！」

相手の弾幕は止むことなく俺に襲いかかってくる、だがそれをビームサーベルで切り落とし切り落とせないものは避ける。そうして相手との距離は十分に詰まった。

餓丸はマガジンが切れてリロードをしているがそんなことは知ったこっちゃない。

「はあああああああああ！」

A L O内のソードスキル「ヴォーパルストライク」を再現して餓丸の腹にビームサーベルを突き刺す。

「ぐ……ぐあああああああああ！」

どんとどんと相手のゲージは減っていく。緑、黄色、赤となり最終的には消滅した。

「……………ふう」

戦闘が終わり肩の荷が降りた。Congratulations Setuna  
winと表示され自分の勝利を確認する。

「この戦闘があと4回…先は長い…か」

再び光が俺を包み転移する。対戦相手の試合が終わっていればそのまま戦闘だ、だが終わっていなければ少しの休憩時間が得られる。

俺が目を開けると入ってきた光景は見覚えのある場所。つまりは先程までシノンといた地下の広場だ。

シノンはいないかと探しているとモニターを真剣な顔で見ているシユピーゲルの姿が見えた。つまりシノン…あとロックオンとかいうやつもないのか…

「シノンはどこで戦っているんだ…？」

シユーシユー

「ッ!？」

後ろから異様な気配を感じ取り俺は大きく飛びその場から離れ腰のビームサーベルに手を伸ばす。

「…お前、ホンモノ、か…？」

その気配の正体は黒いローブを被った大男、しかもその顔には骸骨のようなマスクを



している。

「ホンモノ？何を言っているんだ…？」

するとそいつはウインドウを開き、大会の組み合わせ表を拡大して俺に見せてくる。ちよūdとそこは俺の初戦のところだった。

「この、名前…もう一度、聞く、この、名前、あの、剣技…ホンモノ、か？」

…こいつ何者だ…俺は…こいつとどこかで出会ってるのか…剣を交えて…いるのか…  
まさかこいつは俺と同じSAO生還者…なのか…

そいつはウインドウを開いた手を下ろす。そしてその手首から見えたものは…

「ツ!!貴様…は…まさか!」

そう、その手首に見えたものは俺達SAO生還者ならばほぼ100%知っているであろうギルドエンブレム……かつてヒースクリフやリボンスが率いた血盟騎士団をはじめとする数個のギルドや俺やキリトなどのソロプレイヤーを集い討伐隊を編成してまで討伐に向かったギルド。そう、「笑う棺桶」である。

## 第二十六話 引き金—おもい—

「……」 「笑う棺桶」 ……だ…

「笑う棺桶」とは…ヒースクリフやリボンズ、彼らとは違うカリスマ性を持ったプレイヤー『P O H』によって立ち上げられた殺人ギルドであった。レッドプレイヤーの集まり、あの世界で超一級の犯罪を犯したプレイヤーたちを集めたギルドということだ。殺人を快楽と思うようなプレイヤーの集まり、そんな危険なやつらは放っておけないこのことで血盟騎士団、聖竜連合などの数ギルド、そして俺やキリトのようなソロプレイヤーが集められ討伐に向かった。予定では奇襲をかけるため案外楽勝に終わるはずだった。だがこちらの情報がどこからか漏れていたため逆にこちらが奇襲をかけられることになってしまった。リボンズの手によりリーダーのP O Hを排除、キリトと俺の手により幹部たちの無力化。残りのギルドメンバーは何名かが死んでしまったがおおよそのメンバーは投降。それで笑う棺桶との決着は着いたはずだ…

「今更笑う棺桶が俺に何の用だ…あの時の復讐というわけか…?」

俺はそのボロマントを睨みつける。だがボロマントはそれに臆することもせず

ける。

「復讐……そうとも、言うだろうな……お前は、ジョニーブラックたちを、殺したのだから、それに対しての、復讐と言っても、過言ではない……」

俺が……殺した……？

ジョニーブラック……？たち？

その言葉を聞いた瞬間、俺は強烈な嗚咽感を覚える。意識が遠くなるのを感じた、強制ログアウトされなかったことが奇跡に感じるほどの。

そうだ……俺はあの時……殺してしまったんだ……逆上して、幹部の1人を……そして錯乱して他のプレイヤーも……

受け入れたはずだった。そう、確かにあの世界の中では人殺しとしての意識を持っていた。だが忘れてしまった。あんなに苦しかったのに……あんなに……あんなに後悔したのに……

「雪崩……いや、セツナ、俺はお前を、必ず殺す、そして本当の力を、見せつけてやる、お前達……」

そう言っつてそのボロマントはどこかへ行っつてしまった。俺はその男の放つ異様なプレッシャーから開放され地面に膝を着いた。

「笑う棺桶……」

俺が殺してしまったやつが俺に復讐をしにこのVRMMO世界に帰ってきたのかなどと考える。わかつてる、ありえない。あの世界で死んだ者は現実世界でももう…でなければあんなに悩まなかった…

そのように考えているとまた違うことが頭の中に浮かんできた。

「本当の力」やつのその言葉が俺の中に引つかかった。それにやつのあの声…どこかで聞いたことのある声だ。

「……………まさか！」

あいつが…あのボロマントが死銃だというのか…!?あいつが…笑う棺桶が…またこの世界から…現実世界の人間を殺していると…

そう考えると全身に寒気が襲ってくる。なんてことだ…また…奴らが…

全身が震える、強制ログアウトしそうになるのを何度も抑えた。プラスに考えるんだ…奴の…死銃の注意を引くのが当初の目的だ…それなら目的は達成された…そのはずだ…だがこれでは…

「あんたなんて顔してるのよ…そんなに苦戦したの?」

俺がうつむいていると頭上から声が聞こえた。その声の主は一回戦を戦い、勝ち抜いたシノンであった。

「シ、シノン…」

俺は今にも消えそうな声で言う。その様子を見てシノンは眉を潜めた。

「あんた…そんな様子じゃ予選突破なんて難しいわよ…じゃあ私も二回戦あるから、これであんたともお別れね、さようなら」

シノンは歩き去ろうとした。だが――

「ちよつとあんた…何してるのよ…」

シノンは再びこつちを見てくる。そして視線を落とす。

…なぜ俺はシノンの手を…

俺は無意識にシノンの手を掴んでしまったんだ…今は誰かに頼りたいという俺の意志が…シノンの手を無意識に…

私が一回戦を終えて戻ってくると、試合開始前に私自身が必ず倒すと決めた相手が無様に地面に座り込んでいた。

どうかしたのかと思いついてみて声をかける。

「あんたなんて顔してるのよ…そんなに苦戦したの？」

心配してしまった、柄にもなく第三者を。それもよりによつてつい先刻まで自分を女性だと騙していた相手を。

「シ、シノン…」

予想以上に深刻な状況にあるようだ…私が倒すと決めた相手はこんなにも弱気な人間だったのか…：私を感じた強さは勘違いだったの？

「あんた…そんな様子じゃ予選突破なんて難しいわよ…：じゃあ私は二回戦あるから、これであんたともお別れね、さようなら」

この人なら…：私の求める強さを教えてくれると思ったのに…：拍子抜けだったかな…

こえからこの人とは関わることはないだろうと思いついてその場から離れようとした…：だがそれは叶わなかった。

「ちよつとあんた…：何してるのよ…」

彼が…：セツナが私の手を掴んで離さなかったから。振り払おうと思えば出来た。でもそれは出来なかつた…：なぜ？彼が今なお死にそうな、何かに押し潰されそうな顔をしているから？同情してるの？…：この人も私と同じように見えない何かに怯えているように感じたから？いろいろと考えていると彼の身体が光だした。次の対戦相手のところに転送されたのだろう。

どのみちあの様子じゃ決勝戦までくるのは無理でしょうね…

—————

———予想外だった。彼は光剣とハンドガンだけで決勝戦まで生き抜いたのだ。光剣で致命傷になる箇所の弾をはじき、残りの弾を極力交わすというGGOの中では見

た事のない動きをして。それは一瞬、まるで通り過ぎたあとには何も残らない雪崩のよう……

どれが本当のセツナなのか……一緒に買い物をしているときの分かりづらいがそれでも伝わってくる笑顔、男だとバレて開き直ったのか人を食った飄々とした物腰、一回戦後に何かに怯えていたような弱々しき、そして一瞬のうちに敵を斬り伏せる鬼神の如き姿……そしてなぜ自分がそんなことを考え続けているのか……何にせよ私も決勝戦まで勝ち抜いた。勝つにせよ負けるにせよこれで本戦への出場権を勝ち取ったことになる。だけどこの決勝戦は全力でやる。彼に宣言したのだ、敗北の弾丸の味を教えろと……

—————  
決勝戦へのステージへと転移が終了した。ステージは高速道路のようだ。

私は見渡しのいい場所、ひとまずはボロボロになったバスの中に隠れた。そして愛銃のヘカートIIを構え、スコープを覗いた。

多分あいつは物陰に隠れながら近づいてくるはず……チャンスは予測線が出ない最初の一発……少しでも顔を見せた瞬間そのムカつく顔を撃ち抜いてやる……!

私はなぜこんなにもあいつに勝ちたいんだろう……似ている? いやそんなことはない、私のこの気持ちが変わる人なんて……ましてや似ている人なんて……

そこで考えるのを止めた。視線の先で何かが動くのを感じたからだ。きつと彼だ。

私はそう思いスコープを覗き、狙いを定めた。

「……………なっ……」

私は驚きを隠せなかった。それは彼が予想とはまったく違う動きをしたからだ。彼は道路の真ん中をゆっくり歩いてこちらに進んできている。一步、また一步とこちらに近づいてくる。隠れる気はまったく言っていないかのように。

私の……私の狙撃は隠れるに値しないって……予測線なんかなくたって交わせるって……

動悸が激しくなりサークルがそれに反応し、大きく動く。

「……けるな……………ふざけるなああああああー」

声を荒らげたのと同時にトリガーにかけていた指にも力が入り、弾を撃ってしまふ。

その弾は彼の顔の横を通り過ぎ後ろのバスに当たる。

「はあ……はあ……………くっ！」

彼はそれでも歩みを止めなかった。私は一発、また一発と撃っていくがこんなに冷静ではない状態では当たるはずがなかった。彼もそれを知っているかのように一步、また一步と近づいてくる。

「くっそー！」

私はバスから路上に降り、彼、セツナに向かって走り出す。そしてセツナから5mく



らしいの距離まで近づき銃口をセツナに向ける。するとセツナも足を止め、こちらを見る。

「……………なんでよ……」

セツナはこの言葉に込められた意味と非難を感じ取ったようで、少し俯きながら答える。

「…俺の目的は明日の本戦に出ることだ、もうこれ以上戦闘する意味はない」

ある程度予想された答えではあった。しかしだからこそ許せないという感情が強く胸に溢れ、さらなる言葉を押し出した。

「なら自分の銃で頭を撃ち抜けばいいじゃない！弾代が惜しかったの？それともわざと撃たれば私が満足するとも思ったの…!？」

俯き続けるセツナに一步近づき……

「たかがVRゲームのたかがワンマツチ!?アンタがそう思うのは勝手よ！でもその価値観に私まで巻き込まないでよ…!!」

震える声でそう叫んだ。自分が勝手なことを言っているのは自覚している。でも……それで自分も自分を止められなかった。自分の愛銃であるヘカートを抱える両腕が震えるのを、顔がくしゃくしゃに歪むのを、そして両眼の縁から雫が零れるのを止めることは出来なかった。

「……………俺も…俺もいつか誰かをそうやって責めた気がする……………」

「……………」

セツナは俯いた顔をあげ、こちらを見る。そして頭を下げた。

「すまない…俺が間違っていた。たかがゲーム、たかがワンマッチ、だからこそ全力を尽くさなければならぬ…でなければ俺はこの世界に生きる意味も資格もない。俺は、それをわかつていたはずなのに……………」

そこまで言うのとセツナは顔を上げ、私の目を見て言った。

「シノン、俺に償う機会をくれないか。今から俺と勝負してくれ」

予想外の言葉に一瞬憤りを忘れて眉を寄せた。

「今から、って言っても……………」

この大会は敵の位置がわからないところから開始される遭遇戦だ。それがこうして顔を合わせてしまったらどうやっても開始時に戻れるわけがない。

するとセツナは腰のハンドガンを手を取った。反射的にこちらも身構えてしまうがセツナは待つてくれと言い、一度スライドを引く。排出された弾薬を空中で器用にキャッチし、銃をホルスターに戻す。

「そちらもまだ弾は残ってるな？」

「……………ええ、一発だけ」

するとセツナは軽く笑って言った。

「ならば決闘スタイルでいこう。10 m離れてそっちはライフルを、俺は剣を構える。この弾を投げて地面に落ちたら勝負スタート。どうだ？」

……呆れた。これが今の感想だ。先程までの憤りがいつの間にか薄れてしまっていることにも気付かず口を動かす。

「あのね……それで勝負になるとおもってるの？ たった10 mからなら、このヘカートの弾は絶対に当たる。私のスキル熟練度とステータス補正、それにこの子のスペックが重なるから、なのよ。剣を動かす暇もない。結局はあんたの自殺と一緒にじゃない」  
「やってみないと判らないだろ」

不遜にもそう言い放ちセツナはにやりと笑みを浮かべた。

その表情を見た瞬間、背中にビリっとはしるものを感じた。

本気だ……こいつは本気で私とウエスタン・スタイルの決闘をして勝つつもりなんだ……システムを物ともしない何かがある……見たい……それを見たい。どうしても。

次の瞬間、私はこくりと頷き、言っていた。

「いいわ、それで決着をつけてあげる」

そして振り向き、セツナと反対方向に歩いてもう一度向き直った。

2人の距離は、正確に10 m。抱えていたヘカートを持ち上げ、ストックを右肩に押

し当て、両足をしつかり開き構える。

「…行くぞ」

それを見たセツナは躊躇なく左手の指を弾く。

セツナも光剣を構え、集中する。

それはこちらにも伝わってくるくらいだ。一切の力みを感じない。緩い立ち姿。しかしそれでいて心臓をライフルに狙われているかのようなプレッシャーが彼から放たれる。

私もまた自らの感覚が急激に高まっていくのを自覚していた。

そしてついに、くるりくるりと回転していた弾薬が路面に近づき——

キン。

と小さな音を響かせた瞬間、右手の人差し指がトリガーを引き絞った。

続く1秒のあいだに起きた幾つかの現象を、シノンは加速された意識の中で鮮やかな色彩とともに知覚した。

ヘカートの大型マズル・ブレーキからオレンジ色の光が迸り。

その向こうで、青白い雷閃が夕闇を斜めに切り裂き。

流星のように輝く小さな光が2つ、右と左に分かれて彼方へと飛んでいった。

斬ったのだ

合図とほぼ同時にセツナは光剣を斜めに斬り上げ、自分に命中するはずの弾丸を切断した。私が見た流星はセツナによって切断された弾丸の欠片だ。

有り得ない……！

弾の軌道に山を張り、一か八かで剣を振ったならむしろ理解できる。でも私は彼の中心ではなく左脚を狙っていたのに……

ヘカートのような大口径銃は追加効果で腕や足でも充分HPを全損させることが出来る。だけどそんなことあいつが知ってるとは到底思えない。

なん……で………！

という一瞬の驚愕の隙にセツナは10mという距離を稲妻のようなダツシュで詰めてくる。

後ろに回避しようと飛んだが先程のヘカートの衝撃もあり、うまく足が動かず後ろによろめいた。

斬られる！

そう予感しつつも瞼だけは閉じなかった。見開いた両眼の先で巨大な夕日を背景にして――

そして全てが静止した。

セツナの左手が背中を支えているからだ。

そして右手は仰け反る私の無防備な喉元に光剣の刃をぴたりと捉えていた。

「ど……どうして私の照準が予測できたの？」

エネルギーブレードの向こうで唇が小さく動いた。

「スコープのレンズ越しでもお前の眼が見えた」

眼？視線ってこと……？それで私の……ヘカートの弾道を読んだと？強い……もうVRゲームの枠を越えている……

「それほど強さがあつて、あなたは何に怯えるの？」

セツナはわずかに瞳を揺らして、何かに耐えるような声で答えた。

「こんなのは強さじゃない。ただの技術だ」

それを聞いた途端喉元の刃の存在を忘れ、激しく首を振った。

「嘘、嘘よ！テクニクだけでヘカートの弾を斬れるはずがない！あなたは知ってるはず……どうすればその強さを身につけられるの！？私は……私はそれを知るために……」

「ならば聞くが」

突然セツナが低く、だがとても意思の籠った声で囁いた。

「もしその銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーを本当に殺すとしたら……殺さないと自分や誰か大切な人が殺されるとしたら。その状況で、それでもお前は引き金を引くことが出来るか!!」

「……………!!」

知っているの!?

一瞬そう思った。この男は私の過去を黒々とした闇に染める、あの出来事を知っているのか。

「……いや違う、多分彼も……昔……」

背中を支える左手が固くこわばり、すぐに緩んだ。そしてセツナは力なく首を振り、眩いた。

「……俺にはもう出来ない。だから俺は強くなんかない。俺はあの時斬った人数だって覚えていない……受け入れたつもりになっていたが、本当はただ……目をつぶり、耳を塞いで、何もかも忘れていただけなんだ……」

その言葉の意味は解らなかつた。だが一つだけ確かなことは、セツナがその内側に私と同種の闇……恐怖を隠している。そしておそらくは待機ドームで埋めたはずの闇が再び溢れてしまうような何かがあったのだ。そう、何かが。

私の空いた左手は見えない糸に引かれるように持ち上がり、光剣の刃越しにセツナの褐色がかった肌、頬に近づいた。

指先が触れる。その寸前……

不意にセツナの表情にそれまでの感じが戻った。瞳の奥にはまだ痛々しい光が残っ

ているようだが、それでもセツナは小さく首を振ると、私の手を遮るように言った。

「……というこで、決闘は俺の勝ちでいいな？」

「え……？あ、ええと……」

気持ち切り替えられずばちと瞬きをしているが、セツナはそのまま続けた。

「なら降参してくれ、女を斬るのはあまり好きではない」

そのあまりに気障で無礼で格好つけた言いぐさによく自分の現状を再認識した。つまり左手と喉元の光剣に拘束され、動けないところをほぼ密着状態で覆い被さられている情けない有様と……そしてこの光景がそのまま、待機ドームや総督府ホール、そしてグロツケン中の酒場に生中継されているのだという事実を。

たちまち頬にかあつと血が上るのを意識しながら、セツナから離れ、食いしばった歯の奥から唸るように言った。

「あんたともう一度戦うチャンスがあることを感謝するわ！明日の本戦！私と遭遇するで絶対生き残るのよ！」

そしてセツナに背を向け、リザイン！と大声で叫んだ。

試合時間、18分52秒。

第3回バレット・オブ・バレッツ予選トーナメントFブロック決勝戦、終了。



## 第二十七話 記憶—カコ—

「剎那兄〜♪」

朝食時、俺のたった一人の家族である妹麗奈がとってもニコニコしてこちらを見てくる。俺にはわかる、こいつがこういう顔をしている時は何か俺にとって不都合なことが起こる前兆だということ。

「…なんだ？」

俺は朝食のパンを一口かじり応答した。麗奈は食卓の横に置いてあったタブレット端末を取り俺に見せてきた。

「今朝さ、VRMMOニュース見てたら興味深い記事見つけちゃってさ〜」

小悪魔のように笑いこちらを見てくる麗奈。正直もうこの時点で悪い予感が確信に変わってきている。

「この記事のココさあ…なーんか見覚えある名前があるな〜って思ってた」

タブレット端末には「バレット・オブ・バレット 決勝進出者決定」と表示され、その下には決定進出者のプレイヤーネームが書いてあった。

そして麗奈が指さした場所には「Fブロック  
n」と書かれていた。

Setuna

Sino

「……このシノンというやつと知り合いなのか？」

とりあえずとぼける。別にそんなヤケになって隠すことでもないのだが知られると色々面倒だ。

「違うよ、ココ！」

画面を拡大させてSetunaの部分を強く指さした。

「…似たようなやつがいたもんだな」

「違うでしょ、これ刹那兄でしょ？」

「……………」

どうする…言い訳が思いつかない…正直に話すか？いやそしたら麗奈をまた心配させる…コイツをあの世界の闇…俺の闇に巻き込むわけには…笑う棺桶…ジョニーブラック…死銃……

「刹那兄…？」

気付くと麗奈がとても心配そうにこちらを見てくる。

「なんかすごい怖い顔してたよ…？」

「あ、ああ…すまない、なんでもない…」

少し俯きがちになっていた顔を上げ食事を続ける。顔に出たのか…

「…あのさ、実は私ね…刹那兄がALOからいなくなったの知ってるの…」

麗奈が急に真面目な声で言ってくる。なぜそれを知っているのか…俺はどこかで言ってしまったのか…いや、リズベットかキリトに聞いたのか…？

「なぜそれを？」

考えるよりも聞いた方が速い、そう思い聞いてみた。

「フレンドリストにいなかったから」

そんな理由か…大方メッセでも飛ばそうとしてリストを開いたんだらう…

「それで何かあったのかなーって思ってたけど…もしかして危ないことじゃないよね？」

お国の偉い人からの頼み事…か…まあ間違っては無いが里香のやつ…適当なこと

言ってる…

「ただのバイトだ、ALOからGGOへのコンバートルートを確認しているだけだ。今日中に終わる、だから待っててくれないか」

心配はかけられない。やはり妹に嘘をつくのはいい気分じゃない…でも今回はそれがコイツのためになることだ。

俺は朝食を食べ終わり食器を流しに起いた。

「大丈夫だ、必ずALLOにもこの家にも帰ってくる…」

麗奈の頭に手を置き、ポンポンとする。

「う、うん…わかった」

納得してくれたか…よし、バイトが終わったらまた何か買ってやるか

「そうだ刹那兄！国の偉い人のバイトなんだからたくさんバイト代でるよね！私欲しいものがあるんだけど…」

「ああ、わかつてる、待っててくれたお礼に何か買ってやる」

すると麗奈はニヤツと笑う。

「やった〜♪実は欲しいものいっぱいあったんだよね〜♪」

チツ…コイツは俺のこの発言を待っていたのか…

麗奈は見るからに上機嫌になっていた。その様子を見ているのも悪い気分ではないため自分の使用分を節約すればいいと言いつけさせ、納得した。

私の家からさほど遠くもない公園、そこに私、シノンこと朝田詩乃とシユピーゲルこと新川恭二がいる。

今日は学校が休みなので特にすることもなく、昨日のことを話したいと新川くんからのお誘いがあったので今に至るわけだ。

「ムカつく…ホントにムカつく…」

「ただど話したいと誘ってきた新川くんはほぼ聞き手状態、何故なら途中から私の愚痴大会になってしまったから。」

「お、落ち着いて朝田さん…」

「ずっと公園のブランコに蹴りを入れてた私に新川くんから静止が入る。」

「だってさー！アイツったら最初は女の子のフリして私にシヨップを案内させてたのよ!? しかも男だとバレたら態度を180°変えて一気に小生意気になるし!」

「私は昨日ゲーム内で出会った人物のことを思い出す。少し褐色がかった健康的な肌にし少し癖つ毛の綺麗な黒髪、そして強い意思のこもった大きな瞳…私はその男の強さも弱さも知った…彼も何かに怯えてた私と同じように」

「……見てなさい…今日の本戦で絶対にその頭プチ抜いてやるんだから!」

「私は公園の時計に向かい左手でピストルを作る。」

「…朝田さん?…大丈夫なの?」

「新川くんが心配そうな顔でこちらを見てくる。」

「大丈夫って…あ…」

「私は自分の左手で作ったピストルを見る。」

「あ…なんか大丈夫みたい…テンション上がってたからなのかな…?」

「…そうなんだ」

私は幼少時代のある事件からピストル、銃を見ると強烈な吐き気を伴うことがある。それは私の弱さが現れてるから、だから強くなるためにもあのゲーム、GGOで一番になる必要がある。そのためにもアイツには…負けられなーーーーー

「朝田さん！」

「！」

その思考は急な出来事により遮断されてしまう。新川くんが私の手を握ってきたのだ。

「し、新川くん…？」

震えるように声を絞り出す。

「朝田さん…僕心配で…朝田さんがいつもの朝田さんじゃなくなっちゃうようで…」

「ーーーーーいつもの…私…」

「いつもの朝田さんはそんなことで怒ったりしなくて、冷静で悠然としてて…だからあんな男に惑わされて怒ったりししないでーーーーー」

そこで新川くんの声が途切れた。いや正確には聞くことを放棄したんだ。これ以上聞いてしまうと私のイメージが新川くんの言うものに固まってしまいそうで…私だつて…ずっとずっと昔は普通に怒ったりしてたんだよ…いつもの私って…何…？

「朝田さん！」

そこで新川くんの声が再び聞こえ始める。と同時に体に衝撃が伝わる。

「ぼ、僕が！朝田さんのことを守るから！ずっと…ずっと！」

新川くんが抱きしめて来た。新川くんの声にすがりたくなってしまう…このままでは弱いまま…彼に頼ってしまう…強く…なれないまま…

「おーおー！朝っぱらからお熱いねえ」

公園の入口から陽気な声が聞こえる。

声が聞こえた、誰かに見られたと思っておもわず新川くんを突き飛ばすように扱ってしまった。そして入口のほうを見る、そこにはよく見知った人物がいた。

「ロック…ニール先生…」

「いたた…先生…もうちよつと空気呼んで下さいよ…」

「よう朝田に新川！いやいやこれは俺なりに空気を呼んだ結果なんだけどな、年頃の男が朝っぱらから抱き合ってるのを肯定するほど俺の懐は深くない！」

ニール・デイランデイ。私のもう一人の恩人で、元私と新川くんの学校の教師。そして同じGGOPレイヤーである。プレイヤーネームはロックオン。専門はスナイパー、私にスナイパーを勧めて指導もしてくれたのが何を隠そうこの人である。

「あ、先生。本戦出場おめでとうございます。見てましたよ、ぶっちぎりでしたね」

新川くんにとってもニール先生は恩人ならしい。なんでも彼も今の私と同じように学校でイジメられていたらしく、その時に親身に相談にのっていたのがニール先生らしい。

「どうも、なんならお前も出場すりやあよかったのによ」

「いや、僕なんか今更出場しても勝ち残れませんでした」

斯く言う私もニール先生が学校をやめるまで相談にのってもらっていた。他の生徒たちからの信頼も扱ったらしい。そんな彼が何故学校をやめてしまったのかというと――

「朝田も本戦出場おめでどう、お前もよく頑張ったな。最後の試合はなかなか面白かったぞ」

「んなつ……先生……」

見られていたんだ……そう思うととても恥ずかしくなった。

「アイツ面白そうなやつだな、わざわざ銃の世界に来て剣で戦うなんてよ」

まったくその通りだ、考えられない。

「でもすごく強かったよな、朝田の弾丸をあんな至近距離から斬つちまうんだからよ」

うう……この人はなんでこうも人の傷口に塩を塗るのだろう……でも

「ダメですよ先生、アイツは私の獲物ですから」



「なあに、横取りするつもりはないさ。俺はそこで勝利に酔ったシノンを狙い撃つだけだからな」

宣戦布告……まったくこの人には敵わないな……

「私も先生に一矢報いるように頑張ります」

私がそう言うのと先生はニツと笑って満足そうに去っていく。

「……何しに来たんだろ……先生……」

「じゃ、じゃあ新川くん……私もここからは本戦に集中したいの……本戦には先生ももちろんだけどアイツもいるし他の強敵もいる。全てを出し尽くさないと勝てないと思うから……返事は……終わってからでもいい……?」

この大会で頂点を取れば……気持ちにも余裕が出来るはず……だから彼にも真剣に向き合える……はず……

「うん……じゃあ頑張つてね……」

「……ありがとう」

俺は自宅からダイブ先である病院までバイクで向かっていた。

いつバイクの免許を取ったかだつて?以前和人に誘われ一緒に取りに行った。

バイクの色は青と白を基調とし要所要所に黄緑色が入っている、たしか「GN-00

「というバイクだったな。」

バイクで走って数十分、病院についた。フロントで受付をし、階段を上がりダイブ部屋へとたどり着く。扉を開けるとすでに安岐ナースの姿があった。

「やあ少年！ずいぶんと早く来たね」

「すみません、安岐さん。今日もよろしくお願いします」

頭を下げ壁の時計を見るとまだ全然時間があった。：昨日と同じようにエントリー締め切り寸前にダイブして冷や汗をかくのは嫌だからな：それにあつちでやりたいこともあるし早めにログインしていたほうがいいか：

「本戦は8時からなので心電図をモニターするのはそれからでも」

今から本戦終了まで付き合ってもらうのは流石に気が引ける、だからそうだったのが彼女は大丈夫大丈夫と言いき軽いウイソクを浴びせられた。

ベッドを見るとアミユスフィアが置いてあった。そう：俺達に悪夢を見せたナーヴギアとは違いこの機械は俺やプレイヤーたちに危害を加えられる可能性はゼロ。

だがしかしGGO屈指の有名プレイヤーの二人はこの機械をつけたまま死んでいる。アミユスフィアの制作側はその事実を否定している。設計上不可能なのだ。

犯人である死銃はだが実際にゲーム内からこの二人を殺している。そしてなんと彼はS A O世界のレッド：つまり自らの意思でPKを行う者であった。

ありえない話だがレッドの奴らはVR環境に最適化されたある種デジタルな殺気、怨念を放つようになりそれが狙われた者へアミユスフィアを伝って神経に何らかの信号となつて流れ込み最終的には心臓を止める。

そう考えれば二人の殺人は可能だ。それと同時に俺の剣にもその効果が付与されるということになる。つまりまた俺が誰かを殺してしまうことに…

俺はあの世界で殺したプレイヤーの数を覚えていない。錯乱していたといえればいい言い訳だ。最初に殺した一人しか…思い出せない…

いや、その一人すらつい最近まで忘れてしまつていたほどだ…俺はこの一年、ただ目をそらして見えないふりをしていただけだ。罪を償うこともせず…変わろうと思つたのに変われなかつた…インバイター変革者か…いい皮肉だな…

「どうしたの刹那くん？怖い顔して」

不意に白いスリッパのつま先が俺の膝をつついた。

ビクツと肩をこわばらせ顔を上げると安岐さんが穏やかな視線を向けてきていた。

「…すまない…なんでも…ない…です」

小さく首を振り、つい唇を噛んでしまう。さつきもまったく同じ理由で麗奈を心配させたの…また俺は

すると安岐さんは俺をベッドに座らせ、自分自身も俺の隣に座つた。

「せっかく美人ナースがタダでカウンセリングしてやろうってんだ、吐いちゃいなよ」  
「それは断つたらバチが当たるな……」

俺は視線を床に落とし、どう言おうか迷ってから口を開いた。

「安岐さんは昔は外科にいたんですよね……?」

「ん、そうだよ?」

「無神経な質問だと思いますが……」

俺はいつそう小さな声で訊ねる。

「……死んだ患者のことってどれくらい覚えてますか……それと死んでいった人数を……覚えてますか……?」

叱られる、機嫌を悪くさせた。俺はこの質問をしてそう思った。当然だ、賢いだけの子供が何を言うかと俺ならそう思う。

しかし彼女は穏やかな笑みを崩さずそうだねえと言った。病室の天井を見てゆっくり口を動かす。

「こうして思い出そうとすれば顔も名前も思い出すよ、もちろん全員。ほんの一時間手術室に一緒にいただけの患者さんも……」

これ以上聞いては失礼だ、そう思いながらも俺は吸い込まれるように訊ねてしまう。

「もし自分たちのミスで患者を死なせてしまった、そんな経験あると思います。そのこ

とを忘れてしまいたいと思ったことは？」

俺は何を言っているんだ：最低だ：この人の優しさに甘えている自分が許せない：「うーん：そうだね。これは答えになってるかどうかわからないんだけどさ：人って、それが忘れるべきことなら、ちゃんと忘れてしまいうんじやないかな。忘れたい、と思いつらないで。だってさ、忘れたいと願う回数が多ければ多いほど、むしろその記憶は強く確かなものになっていくでしょう？なら、心の奥底：無意識のなかでは、本当は忘れちゃいけないことだと思ってるんじゃないかな：」

忘れたいと思うほど、本当は忘れられるべきではない：？

「だとしたら俺は本当に最低の人間だな：」

と自傷気味に言う。

どうしてと問いかけてくる彼女の瞳から視線を外し、床に目を落とした。

「：俺はあのゲームで：SAOの中でプレイヤーを殺しているんだ：少なくとも一人は確実に」

彼女は命を救う仕事をしている人、人を助ける仕事をしている人だ。理由はどうであれ命を奪う、人を不幸にした話を聞いていい気分ではないのはわかってる。だが俺の口から零れる言葉は止まらなかった。

「：自分で殺した人数ですら覚えていない：そんな最低の人間なんだ俺は：いや彼を入リボンス

れたら最低二人か……まあは例外として……彼らは全員レッド……殺人者だったけど、殺さずに無力化する選択肢だつてあつた。実際当初の目的は無力化だ。でも俺は彼らを殺しまくつた。怒りや憎しみ……復讐心だけで斬り殺した。そして俺はあの世界から開放されて一年間、奴らのことを綺麗に忘れていた……いやこうして話している今も一人以外は顔も名前も思い出せない……つまり俺は殺した相手ののことを忘れていしまえる……人数すらも……そんなのやつらと何も変わらないじゃないか……」

口を閉じると、固く凝つた静寂が病室を満たす。やがて衣ズレの音と、ヘッドのマットレスが揺れる感覚が伝わつた。彼女が立ち上がり病室を出ていく。俺はそう思った。

だがそうではなかつた。不意に背中ごしに右肩に手が置かれ、ぐいつと力強く引き寄せられた。

「ごめんね、刹那くん。カウンセリングしてあげるなんて偉そうなこと言つたけど私には君の重荷を取り除くことも一緒に背負つてあげることもできない。私はSAOをやつたことがないから君の使つた殺したつて言葉の重さは量れない。でも……これだけはわかるよ。君はそのレッド？殺人者たちとは違うつて。君がそうしたの、そうしなきゃならなかつたのは、誰かを助けるためなんでしょう？」

「……………」

助けるため。確かにその要素は存在したかもしれない。しかし……しかし……しか

し、だからと言って……………

「医療でもね、命を選ばなきゃならない場面があるの。母体を助けるために胎児を諦める。移植待ちの患者さんを助けるために脳死の患者さんを諦める。大規模な事故や災害の現場ではトリアージっていつて、患者さんに優先順位をつけたりもする。……………もちろん、正当な理由があれば殺してもいいってことじゃないよ。失われた命の重みは、どんな事情があろうとも消えることは無い。でもその結果助かった命を考える権利は関わった人間みんなにある。君にもある。君は、自分が助けた人のことを思い浮かべることで自分も助ける権利があるんだよ」

「自分を…たすける…権利？」

掠れ声そう呟いた。そして歯を食いしばりこう叫ぶ。

「でも俺は殺した人数やせいづらのことを忘れた！重荷を！義務を！それら全てを放棄してしまった！だから俺にはそんな…救われる権利なんか…」

「本当に忘れてしまったらそんなに苦しんだりしないよ」

彼女は俺の頬に左手を掛け、自分のほうを向かせた。そして彼女は指で目尻をこしつと擦った。その時俺は初めて自分が涙を滲ませていたことに気付いた。

「君はちゃんと覚えている。思い出す時がきたら全部思い出す。だからね、その時は、一緒に思い出さなきゃダメだよ。君が守り、助けた人がいるってことを」

そう囁き彼女は俺の額に自分の額をこつんとぶつけた。ひんやりとした接触感が、頭の中で渦巻く重苦しい想念を鎮めていくようで俺は肩の力を抜きそつと目を閉じる

-----  
それから数分後

「監視、よろしくお願ひします…そのさつきはありがとうございます」

「なあに、いいってことよ。刹那くんのレアな泣き顔も見れたしね」

「は、はあ…… 8 時からいまで何も無いと思ひますので…では-----リンクスタート!」



## 第二十八話

## 開幕―B O B本戦―

刹那がG G Oにログインするとほぼ同時に朝田詩乃、シノンもG G Oにログインした。

私がログインして真つ先に視界に入ったのはbattle of bullets 3  
という真紅の文字が舞っているネオン街だった。

街全体がこのあと始まるB O B本戦のせいか活気づいている。街の至るところで勝敗予想などの賭け事が起こっているのもその影響であるのは間違いないだろうけど。

その予想をチラツと覗いてみたらあの忌々しい光剣使いのほうが私よりも順位予想が高いのは少しカチンときたわね……

まあ所詮は大会に出る勇気のなかった臆病者と出たけど大した成績も残せず敗退した弱者の予想だからそんなに気にしてないんだけどね

その後武器のチェックをしてあとは開幕を待つだけになった。

「……………」

少し考え事をしながら歩いていると

「シノン！」

と自分と呼ぶ声がしたので振り返る、そこには見慣れた友人がいた。

「もう遅かったじゃないか！心配したよシノン！」

「……………」

「どうかしたの？」

「数時間前まで一緒にいた人とまたこっちでも顔を合わせるなんて変な感じだと思つて」

さつきあんなこと言われた相手と真正面から向き合つて話せるわけないじゃない…  
それでなくても本戦に集中したいのに……

「…ねえシノン…いや朝田さん！」

シユピーゲルがいきなり大声を上げ私を呼んだ。

「この…本戦が終わつたら…僕のものになつてくれるんだよ…ね？」

私はそんなこと一言も言つた覚えがないんだけど……………

「ねえ朝田さん…？」

シユピーゲルが私の手を握ってくる。だけどすぐに私はそれを拒んだ。

「…………ごめん、今は本戦に集中したいの。今回は全力以上の力を出さないと勝ち残れない戦いになると思うから」

「……………うん、わかった。応援してるよ」

「ありがとう、あと終わったあとのやけ酒か祝杯かには付き合つてよね」

「うん……」

私はそう言い彼と別れた。それに彼に言ったことはホントだ。今回の戦いは今まで経験したことのないものになる。ロックオン…彼の狙撃能力は底が見えない。以前相手をしてもらったときは私の最大射程距離よりもずっと遠い場所から狙い撃ちされた。その時はまだ私が始めたばかりだったというのも多少あると思うけどそれでも実力差は相当ある。それに数いる強敵の中でも一番の曲者が光剣使いの彼。超至近距離で私のヘカートの弾を真つ二つにしたやつ…あいつに至っては何を仕掛けて来るのかまったくわからない……………でもあいつと戦えば私も何が…

「……………ちよつとあんた何してんの…？」

そして私は今、その彼と…セツナと一曰ぶりの再開をする。

――――  
俺は昨日と同じミスをしないうため、そしてひとつ大会参加前にやっておくことがあったため今回は余裕のある行動を心がけた。

本戦が始まる5時間前にはGGOにログインし、その後射撃訓練を行った。

そして、俺はその後ある場所に寄った。

そこはアバターの髪を変更できる、現実でいう床屋のような場所だ。

俺はそこで昨日までの長い髪をいつものような長さに切つていつもの、『あのゲーム』の頃と同じような髪型にもらった。

そしてその後軽い食事のようなものを済ませ、会場に余裕を持って向かう。

もうこの段階ではどうあがいても遅刻することはない。たとえ亀のようにのろまに歩いても余裕で間に合ってしまう。

……いや余裕があるのはそれはそれでいいことであるのだがな…

とくだらないことを考えながら歩いていると見知った顔が見えた。シノンだ。

……昨日の今日で気軽に声をかけていいのかと迷った。それに俺は自分から人に声をかけたことが極端に少ない。こういうときにどういうふうにしたらいいのかなどもさっぱり…

と首を傾げながら悩んでいるとシノンが

「……ちよつとあんた何してんの…?」

と声をかけてきた。

「…シノン……昨日はよく眠れたか?」

「…はあ??それよりどうしたのよ、アンタその髪」

「……イメージチェンジというやつだ。あまり気にするな」

馬鹿だ…何が「昨日はよく眠れたか?」だ、普通に髪型を変えたのだからそれを話題すればよかつたんだ…リズや麗奈によく言われてたように積極的に人とコミュニケーションをとっておくべきだった…

「まあなにはともあれ、今日はよろしく頼む」

スタンダードにこれでよかつたか…何を生き急いでたんだ、俺は

「はあ?何よよろしく頼むって」

「………なっ……俺はどうしたらいいんだ…」

「あのね!私たちは敵なの!私はアンタとよろしくするつもりなんてないから!」

「……いやだが俺もお前に聞きたいことが…」

「はあ……?」

なんで俺はこうも責められなければならないのだ…俺が何かしたのか…?(A. しました)

「ようよう、お2人さん!こんな道のど真ん中で痴話喧嘩か?」

俺がシノンに一方的に責められているところにある男が話しかけて来た。身長は180を越えるくらいで長めの茶髪の青年、そう…確かこいつは…

「お前は確か…ロックオン…?」

「お前は確かセツナつつたか、髪型変えてて一瞬わかんなかったぜ。そういえば見たぜ予選決勝のあれ。まさかシノンの弾丸をあんな至近距離で真つ二つとはな」

「うっ…」

ロックオンがシノンのほうをニヤニヤしながら眺めるとシノンはバツの悪そうな顔をした。

「本戦で当たるのが楽しみだぜ、じゃあお2人とも痴話喧嘩しすぎて本戦遅刻すんなよ」

「だから痴話喧嘩じゃないって!!!」

ロックオンが去っていくとシノンはわなわなと震えながら拳を強く握っている。

「すまないシノン、立て続けに悪いのだが情報交換をしたいのだが」

「…あんだこの状況でよくもまあ…はあ…いいわ、どうせ私から一方的に言うことになるんでしょうけど」

「…すまない」

その後シノンとルールの基本的な確認をした。直径10kmのバトルフィールド内にプレイヤー30人がバトルロワイヤル形式で最後の1人になるまで戦う。それは運営から送られてきたメールに書いてあったことだからまあいい、それより本題は

「シノン、これを見てくれ」

俺は大会の参加者名簿をシノンに見せた。

「何よ今更こんなものを見せて…?」

「お前はこのゲームの中でも相当な実力者で古参だ。だから本戦に出るような強者とはだいたい顔見知りなはず………この中に知らない名前はいくつある?」

シノンは眉を細めて俺を見るが俺の真剣な思いが伝わったのか名簿を見て答えてくれた。

「そうね、まったく知らないのはどつかの馬鹿除いて…銃士Xとペイルライダー…とこれは…ステル…いやステイブン、この3人ね」

「そうか、助かる」

俺はこの3人の誰かが死銃…SAO内でレッドプレイヤーたちの集まり、ラフコフの生き残りであることに確信があった。

その3人の名前を頭の中でオウム返しのように呟いているとシノンがこちらを見て言ってくる。

「ちよつとそれがどういうことなのよ、説明しなさいよ」

「……………」

今回のことは説明するべきなのか…彼女の安全のためにも伝えるべきか…なんて?

この試合では本当に死人が出るから自分も死にたくなかったら辞退しろと？冗談も休み休み言え、そんなこと言った瞬間シノンにまた馬鹿にするなど怒鳴られて終わりだ。

と考えているとシノンは

「もしかして昨日あんなの様子が急におかしくなったことと関係あるの…？」

「…そうだ、俺とやつは初戦後に待機ドームで再び遭遇した」

「友達だったの？」

「違う、俺とやつは命をかけて戦った敵同士…だが…くつ…くつ…ここでケジメをつけなければ…」

命をかけて、シノンはその言葉に反応したようにこう言う。

「もしその銃の弾丸が、現実世界のプレイヤーを本当に殺すとしたら…殺さないと自分や誰か大切な人が殺されるとしたら。その状況で、それでもお前は引き金を引くことが出来るか!」…

「…!」

「これって…いや…もしかしてあなたは…「あのゲーム」の…」

「……………」

シノンの問いかけに俺は上手く反応することが出来なかった。そしてシノンは俯いて言った。



「…変なこと聞いてごめん、それにあんたにも事情があることはわかったから…でも」  
シノンは顔をズイッと俺のほうに寄せ、こう言った。

「それと私との約束は別だから、当たったら全力で戦ってね」

「…ああ、もう昨日のような無様な姿は見せられない…」

そしてそろそろ時間だということで俺とシノンは待機ドームに向かった。

そして…扉の向こうの薄闇から鉄と硝煙、紛れもない戦いの匂いが俺を包み込む。

## 第二十九話 死闘―その1―

ロツクオン side

「……………ふう」

俺は細く長く、息を吸い込んだ。仮想の肺を満たした冷たい空気を同じだけ時間をかけて吐き出す。

そしてスコープを覗き込む。視界中央では1人のプレイヤーが身を屈め、茂みの中をじわじわと移動していた。両手で抱えているのはコンパクトな短機関銃、サイドアームの類は見当たらない…その代わりに全身がやけにゴツゴツとしてやがる……

加えて対光学銃防護フィールドと高性能な対実銃複合アーマー……おそらく武器重量のそれを装備につき込んでいるんだろう……しかもご丁寧に頭までフェイスガードつきの分厚いヘルメット……

「これはどうしたもんかねえ……」

立て続けに同じ場所に当てればいけるか？ いや、相手も素人じゃない……すぐに遮蔽

物に隠れてしばらく出てこないだろう……

「ダメだなこりや、諦めるか」

とスコープから眼を外そうとしたところでその右腰にぶら下がるものに気付いた。

……あれはプラズマグレネードか！

俺はすかさず照準をそいつの背中辺りから右下に動かし、ゆらゆらと揺れて俺を誘つてる金属球に照準を合わせた。

「さて……じゃあ、狙い撃つぜー」

予測円が凝集してピンポイントの光点となったその時、トリガーを絞る。

全身を叩く衝撃とマズルフラッシュによって一瞬司会が白く染まった。だがそれはすぐに回復し、色彩を取り戻したスコープの中でそのグレネードのひとつがパツと弾けるのを確認した。

「まあこんなもんかね」

スコープから眼を外し、自分の相棒を担ぎ歩き出す。それとほぼ同時に俺の後ろで遠雷のような爆発音がした。

「まず一人目、このペースでどんどんといかせてもらいますかね」

――

シノン side

本戦が始まりすでに30分くらい過ぎていた。私は木の根本で15分ごとに衛星から送信される各プレイヤーの位置情報を確認する。

自分の周囲1km圏内に存在する光点は3つ。それらを指でタッチして名前を確認した。

その時上空の監視衛生が飛び去ったらしく、端末のマップに表示される光点がてんめつしはじめた。あと少しで位置情報がリセットされる。

私は急いでそれらの点をタッチしていたが指が止まる。ある名前を必死に探していたことに気づいたからだ。

……知るか、あんなやつ……

そして光点が消えたのを確認してその場を離れる。

私が向かったのは川や橋を一望出来る丘の上だった。先程マップを確認した際に、私の感が正しければここを2人のプレイヤーが通るはず。

と思ったその時、木の影から一直線に飛び出す人影が目に入る。

……よし、狙い通り……!

その男、ダインは自分の来た方向へ銃口を向け伏した。

「……どんな時も後ろに注意よ、ダイン君」

レテイクルの交点に無骨な横顔を捉えて眩く。

……ここはペイルライダーとの対決を待たずに撃つてしまってもいいのではないかな  
…中継で見てるギャラリィには悪いけど、ね。

私はヘカートのトリガーにそつと指を添えた、その瞬間。

私の顔の真横を弾丸が通過する。

そこでようやく自分の後ろに人が存在していることに気付く。でも誰もいるはずがない…数分前にサテライトスキャンをチェックしたときは立てこもりの獅子王リツチーだけだったはず…まさかアイツが山の山頂から降りてくるわけがない…しかも重機関銃を抱えた敵の足音に私が気付かないわけがない……

……誰が……

圧倒的な驚愕と疑問を抱えながらそつとサイドアームのMP7に手を伸ばす。

その時私の顔を眩い光が通る。

「動くな」

「つ……!?!」

私はその声のしたほうへ両目を向けた。

首筋まで伸びているボサボサの髪、今にもこの夕暮れの闇にも紛れてしまいそうな浅

黒い肌。そして猫、いや虎や獅子のような鋭い瞳。

仇敵セツナ。そんな彼が私に半ば申し掛るのうに左手に光剣、右手にファイブセブンを握り構えていた。

それを認識した途端、いくつかの感情が複合した炎がばあつと弾けるを感じた。私はその時眼前の銃口を忘れて意識せず、獐猛に歯を剥き出して左手にMP7をのり、セツナに向け斉射しようとする。

「待て、俺に提案がある」

それをセツナが冷静な声で囁き、指にかかった重さをギリギリのところで止めさせた。

「何を今更ツ……！」

私は小さく、だが燃え上がる殺意を込めて言い返す。

「この状況で提案も妥協も有り得ない！どちらかが死ぬ、それだけよ！」

「お前を殺そうと思えば俺はいつでも斬れたし撃てた」

セツナの言葉は静かに、だが何か焦っていると感じた私は思わず口をつぐむ。

「ここで派手に撃ち合い銃声を向こうに聴かれたくない」

セツナの視線が一瞬私の後ろ、今まさにもうひとつの遭遇戦が発生しようとしている鉄橋に向けられる。

「……？？？どういう意味……！」

「あの橋で起きている戦闘を最後まで観たい。それだけだ」

「…観て、それからどうするの？ あらためて撃ち合うなんて間抜けなこと言わないでよ  
ね」

「状況にもよるが俺はここから即離れるつもりだ、お前を攻撃はしない」

「私が後ろから狙撃するかもよ？」

「それならば仕方が無い、もう時間が無い！ 諒解してくれ頼む」

セツナは気が気でないように再び鉄橋のほうを見る。そしてセツナは右手のファイブセブンを降ろす。サブマシンガンを肩間に擬せられたまま。

「……仕切り直せば今度はちゃんと戦ってくれる？」

「もちろんだ」

頷くセツナを半秒ほどじっと凝視してから私は短機関銃を下ろす。

こちらのことなど二の次と言わんばかりのこの男の態度にムカつくやら呆れるやら……そもそもコイツはどこから現れたのか、ほんの数分前にサテライトスキャンを確認した時は周囲一キロにはこの男はいなかった。

しかし私はそれらの疑問を飲み込んで再び両腕でヘカートを抱えスコープを覗き込む。

「……あんたがそうまでして観たがつてきける戦闘、このままじゃ起きないかもよ。ダイ

ンもいつまでも寝つ転がっていないだろうし。もしあいつが立ち上がって移動しようとしたら私もその前に撃つからね」

「その時はそうしてくれ……、いや待て」

応じたセツナの声が鋭く緊張きた。私は反射的にスコープから目を外し、肉眼で鉄橋全体を捉える。向こう岸、深い森の底に伸びる細道の奥から、ゆらりと一人のプレイヤーが姿を表したところだった。

そう、そのプレイヤーこそペイルライダーであった。

橋の反対で伏せるダイーンが両肩を緊張させるを

対照的にペイルライダーの立ち姿には力みがほとんど感じられない。

「……あいつ強い……」

そしてペイルライダーは全身を無防備に晒したまま、滑るような足取りで橋に踏み込んだ。これでもう銃弾を防ぐ地形オブジェクトは何もない。この状況を狙ってきたはずのダイーンすら戸惑いを滲ませる。

だが彼も長いあいだ対人スコードロンのライダーを張っているだけあって踏ん切りも早かった。1秒後ダイーンのSG550アサルトライフルが堅実な作動音を響かせた。

発射された最低でも10発の5.5ミリ弾をペイルライダーはなんと橋を支えるワイヤーに飛びつき、左手だけでぐいぐいと登り始めたのだ。



ダインは慌てて銃口で追おうとするが伏射姿勢は上方を狙いにくい。2度目の射撃は照準が乱れ、その隙をついてペイルライダーはワイヤーの反動を利用してロングジャンプ。橋のかなりダインよりの位置に着地した。

「STR型なのに装備重量を抑えて、3次元機動力をブーストしてるんだわ……しかも、アクロバットスキルがかなり高い」

私がそう言っている間にダインは同じ手は食わないとばかりに膝立ちになり、再びトリガーを引いた。

しかし今度もその攻撃は読まれていたようでそれを軽々とかわし、すでにダインから20mの距離まで達している。

「こんにゃろっ……いー」

私の耳に聞き覚えのある罵り声を上げ、ダインは空になった30連マガジンを素早く交換しようとした。

だが

腹に響くような発射音とともに、ペイルライダーの右手のアーマーライトが火を吐いた。

ダインの体にショットガンの着弾エフェクトが閃き大きく後ろに仰け反る。

だがダインはその手を止めることなくマガジン換装をし、再度頬付けしようとする。

した所で2度目の轟音が響き渡る。更に距離を詰めていたペイルライダーの一撃は、  
またもダインの体勢を大きく崩した。

そして再び仰け反ったダインにペイルライダーの追撃が加わり残りわずかだったH  
Pを完全に吹き飛ばした。

「……あの青いやつ、強いな……あいつがマントの正体なのか……？」

傍らでセツナが声ならぬ声で呟いた。

マント？ そういえばペイルライダーはアイツが気にしてた3つの名前の1つ……以  
前プレイしてたVRMMOの中で敵対し……殺し合った……かもしれない相手。その  
ゲームはもしかしたら……いや、もはや伝説となったあの……

そこで思考を無理矢理にせき止めた。

アイツにもアイツなりに抱えた事情があるのだろう。だけどその重みはアイツだけ  
のもの、他人が背負うものてまはないし、そんなことはすることではない。

「あの男、撃つわよ」

迷いを振り切るかのようにヘカートの安全装置を解除し、返事を待たずトリガーに指  
を添える。

「ああ、わかった。だがもしあいつがああの男ならば……」

「あの男なら？ スナイパー特権の弾道予測線なしの第一射をたつた300m足らずの距

離でしかも背中を向けた状態からかわしてみせるとでも？……冗談じゃないわ」

そして一切のためらいなくトリガーを絞ろうと

したその寸前

ペイルライダーの青白い迷彩服の右肩に小さな着弾エフェクトがひらめき同時に瘦身が弾かれたように左へ倒れ込んだ。

「なっ……………」

私はスコープでみたその光景に驚いた。それは隣で双眼鏡を覗いてたセツナも同時に声を上げた。

「…………聞き逃した…………？」

そう、肝心な発射音が聞こえなかったのだ。どれほど耳を澄まそうと届いてくるのは風邪なりと川のせせらぎだけだった。

「いや、確かに聞こえなかった。……………サイレンサーか」

「そうね、確かにそれをつけたライフルなら相当に発射音を抑えられるわ。命中率や射程にマイナス補正がかかるし、消耗品のくせに馬鹿みたいに高いけどね……………つかアンタよく知ってたわね」

「ああ、少し勉強したんだ。お前に勝つためにな」

セツナはそう言い視線をチラリとシノンの構えるヘカートの先を見る。

そこには大型のマズルブレーキだけが装着され、それがサイレンサーでないことは素人のセツナにもわかる。

「別にお金にケチつけてるわけじゃないわよ。あたしの趣味じゃないだけ」

ふんと鼻を鳴らして再びスコープを覗く。地面に倒れたペイルライダーはそのまま起き上がるうとしない。と言って一撃死してしまったわけではないようだ。

生きているのに、なんで逃げも反撃もしないのかー

それに疑問はまだある。

私は先程サテライトスキャンのマップで周囲1キロ圏に誰もいないのは確認済みだ。

つまり相当の遠距離からペイルライダーを狙ったということ……ということは用いたライフルはかなりの大口径だろう。しかしGGOでは銃器が大きくなればなるほどサイレンサーのメリットは減少し、デメリットばかりが強くなる。

銃声がまるで聞こえなかったのがどうにも腑に落ちない。

そういうえば……

「そういうえばアンタいつたいたいどこから現れたのよ？ さっきのスキャンのときにはこの山の周囲にはいなかったでしょ」

「俺はあのペイルライダーを追っていたんだ。スキャンには映っていると思っただけ……いや……そうか……」

「何よ?」

「ちようどその時俺はあの川を泳いでいたんだ。ずっと潜っていたからそれで衛星にみつからなかったんだ。多分な」

泳いで渡った!!?

加えて質問しようとしてセツナのほうを向くとセツナは何かに気付いていたように目を見開いて、口元に手を持ってきていた。

そして

「……シノン、橋から絶対に目を離さないでくれ…」

「ど、どうして?」

「あのペイルライダーを撃ったヤツも俺と同じように川を渡っていたなら…お前の疑問も解決する」

コイツ……なんで私の考えていたことを…

そんなことを思っただけでセツナのほうを再び見ると。

セツナが今度は驚いた表情で橋のほうを見つめていた。

私も続いて橋のほうをスコープ越しに覗いてみると

ダインの死体とペイルライダーのちようど中間、橋を支える鉄柱の陰から、ゆらりと滲み出した黒いシルエツトがあった。

プレイヤーとは思えなかった。アバターの輪郭が奇妙に暈けているのだ。懸命に注視してようやくその理由を悟る。

全身を覆う濃い灰色のフードマントがボロボロに毛羽立っている上にそれが風になびいてまるで小動物のように不規則に動いているからだ。

「つ……いつからあそこに……いやそれよりもあれは……サイレントアサシン」

そう、それがあのボロマント主武装。

サイレンサーの使用を前提として設計された、私のヘカートに迫る大型のライフル。

正式名はアキュラシー・インターナショナル・L115A3

ヘカートのような対物ライフルではなくサイレンサー標準装備からわかるように人間を狙撃するための銃なのだ。

最大射程2000m以上。撃たれた者は射手の姿を見ることなく死にゆく間際にも銃声を聞くことすらない。ゆえに与えられたとおりが

沈黙の暗殺者サイレント・アサシン

あれが実装されていたのは噂として聞いていたものの実物を見たことはこれまではなかった。

そもそもソロで闘えるスナイパーを自分以外いるとは思わなかった。

だがあのマントは対岸の森の奥深くからペイルライダーを正確に狙い撃った。

ん……マント……？

頭にふとした疑問が浮かんだが、ペイルライダーに近づいたボロマントの行動にかき消される。

そうだ、本来、あの銃であれば軽装のペイルライダーを一撃死させることも可能だったはずだ。

まだ麻痺をさせてから改めて精密狙撃するならわかる。

だがボロマントはスタン弾を当てただけで森から出てきた。

そしてペイルライダーのすぐ目の前まで移動したボロマントはL-115を肩にかけたまま、右手をマントの中に差し込み、ハンドガンを取り出した。

西日の作るコントラストが強すぎるうえに種類までは判別できないが、シルエツトからだけでも何の変哲もない自動拳銃だと断言できる。

加えて今にも麻痺から回復しようとしている。動けるようになったらすぐに右手のシヨツトガンをつっぱなすに違いない。そうなったら即死するのはあのボロマントだ。

そしてそのボロマントは左手をマントから抜き出し、何も持たない左手の指先をフー  
ドの額に当て、次いで胸、さらに左肩、最後に右肩へ。

いわゆる十字を切るといふやつだ。

あまりにも多くの違和感に苛まれ強く唇を噛んだとき、左耳に不意に小さな囁きが飛

び込んだ。

「……シノン、撃て……」

セツナの声だ。その短い一言はこれまでになかったほど強く張り詰めている。

「え……どつちを？」

「あのボロマントだ！頼む、撃つてくれ！早く！手遅れになる前に!!!」



## 第三十話 死闘―その2―

ロックオン side

「さて……と」

順調に相手を撃破していつでももう4人か

「そろそろ歯応えのある大物でも狙いたいもんだねえ」

自分の相棒を肩に担ぎ、その場をあとにする。

-----

そして俺は大きな橋のかかっている場所へと向かい、そこらが一望できる高台に陣取った。

ここならば橋を通るやつをひとりずつ狙い撃ちに出来るからと思つての行動だ。

ざつと……1000mつてどこか

ライフルを地面に起き安定させスコープを覗き込む。

「……なんだあれは？」

スコープ越しに黒いぼろマントが目の前で倒れている相手に向かって銃口を向け十

字を切っている姿が目に入った。

「見た感じあの倒れているやつはスタン状態つてとこか、あのマントのやつはなに考えてんだ……？」

なにか企み、考えがあるのかどうかは知らないが倒すべき相手には変わりない。狙い撃つだけだ。

そしてトリガーに指をかける。引き金を引く指に力が籠る瞬間、あるものが目に止まった。

そう、あれは

シノンと……あれはセツナとかいうやつか

なんで一緒に？一時的に協力関係を結んだのだろう。

あの位置でいったい何を？狙いは俺と同じぼろマントの男だ。

そこまで一瞬。1秒にも満たない僅かな時間。

シノンならばあのマントは撃ち抜く。

その信頼があつたから俺はシノンの後ろの男に狙いを変える。

「協力関係のシノンには悪いがこれも戦いなんですね」

そう言つて俺はその少年に狙いを定めてトリガーを力強く引いた。

弾丸はまつすぐその少年に向かって飛ぶ。

完璧だ。

そう思った。

だが

その弾丸が少年の頭に当たることはなかった。

「……………おいおい嘘だろ」

スコープ越しに見た。

その少年は弾に気付いていなかった。

見られていた？俺がここに居たことがわかってたというのか。

銃声が聞こえた？ありえない、いくらサイレンサーを付けていないとはいえこの距離だ。

「まさか—————」

まさか飛んでくる銃弾を見て斬ったというのか

予選決勝で見せた、超至近距離でシノンの撃った弾を斬るといふ離れ業。

あれは目線が見えていたと本人は言っていたそうだ。

この距離だぞ……………？

ありえない、予測線もなしに……………

そうこうしているうちに向こうにも動きがあった。シノンがあのぼろマントに向

かって発砲したのだ。

俺はスコープよりも視覚の広い双眼鏡を取り出し、その結末を見た。

その弾丸をアイツは横に1歩だけ動いてかわしたのだ。

「はっ、アイツらはバケモンかよ」

思わず笑ってしまふほどの後継だ。スナイパーの腕ならNo.1、2がことごとく必殺の一撃をかわされるなんて。

だが、だけどアイツのそれはあの少年のそれとは違った。

あの少年はギリギリまで気付いていなかった。それを常人離れた反射神経と常人離れた超直感力で反応したのだ。

それと対象にあのぼろマントは多分シノンのことを何かしらのタイミングで認知していたのだ。

—————  
セツナ side

「くっ…この正確な射撃は…誰だ」

「どうしたの？」

シノンは後ろでいきなり抜刀し、思いつきり空を斬った俺に心配の声をかけてきた。

少し前まであのぼろマントに気を取られすぎていた。

今の銃弾のおかげもあり少しだけ冷静になれた気もする。

「なんでもない、はやくアイツを撃つてくれ……!」

すぐに視線をぼろマントに向けた。

ぼろマントは未だカメラに向かって十字を切っていたのでたいした時間ロスにはならなかったようだ。

「わかった、撃つわよ」

そう言つてシノンはスコープを覗き込み、狙いを定め一撃を放った。

彼女の弾丸は男の後頭部を確実に貫くはずだった。

だったのだが、ぼろマントは避けたのだ。

まるで予めどこに弾丸が飛んでくるのかをわかっていたかのように

「んな……」

シノンから驚きの声が聞こえる。

そしてそのぼろマントはゆっくりと、不気味に、こちらを振り向く。

その瞬間、俺は駆け出していた。

「セツナっ!」

目の前は崖だが、崖を走るように下り降り、そのぼろマントに向かう。

そして俺が崖から降り、ぼろマントに向け剣を抜き走り出す瞬間。

It's show time……!

無慈悲の銃声とノイズ混じりの不気味な声が木霊する。

—————  
場所は変わりALLO。

キリトやアスナ、リズにネーナといった御馴染みのメンバーがユグドラシルシティの大型モニターがある酒場に集まっていた。

目的はそう、GGO決勝に出場するセツナの姿を見るためだ。

「うーん……全然セツナ兄い、映らないなーもしかして負けちゃったのかな」

とソファアーにもたれかかりながらセツナの妹であるサラマンダーの少女、ネーナが不満そうに言う。

「そんなわけではないでしょ、あの戦闘バカは多分今頃カメラに映らないくらい縦横無尽に駆け回ってるわよ」

とレプラコーンの少女、SAOで彼と知り合い恋に落ちたりリズベットが答える。

「ああそれは有り得ますね、銃世界なのに剣とか使っちゃったりして」

とリズの意見に賛同する猫耳を携えた少女シリカ。

「うんうん、剣7本揃えて「セブンソード!」とかやってても不思議じゃないよね。どっかの誰かさんと同じで剣大好きだもんねー?」

とウンディーネの少女アスナがカウンターに座っている全身真っ黒な男に言う。「俺はさすがに剣は使わねえよ！銃だって好きだしよ！」

とその男は答える。この男こそセツナと共にあのデスゲームに終幕を下ろした英雄キリトである。

と、そこにリーファ、クラインを加えた7人でB o Bの中継を見守っていた。

—————

中継からしばらくたって、皆がわちやわちやと食事をしながら談笑をしているとカメラにあの男が映される。

骸骨のような面を付け、不気味なぼろマントに身を包んだ男が。

そして十字を切り、こう言う

It's show time

と。

「……つつ!?」

その言葉に反応した2人。

後ろのカウンターで観覧していたクラインとキリトである。

「お、おい！クライン！」

「ああ間違いねえアイツはそう言った！」

2人は目を合わせてそう言う。2人の顔には嫌な汗が溢れ出ていた。「ど、どうしたの2人とも…?」

その様子を不思議に思ったアスナが振り向き声をかける。

「覚えてないのかアスナ、アイツの今の言葉を…?」

「え…? It's show timeって?」

「ああ、ソイツは…」

「『笑う棺桶』ボスのPohの口癖だったんだ…」

クラインに続くようにキリトが言う。

その言葉、『笑う棺桶』に反応してリズ、シリカも反応する。中層プレイヤーである彼女らもその名はよく知っている。あのデスゲームの中で殺人を愉しんでいた連中。殺人集団…と

「そ、そんなはずは…だってPohはリボンズ団長が倒したはずじゃ…」

「ああ、そうだ。たしかにあの大規模討伐作戦によってPohはリボンズさんに倒され死んだ。だが——」

だがその思想を継いで、再びVRMMO世界を闇に落とそうとする者がいる。

「リズ、たしかセツナは菊岡からの依頼って言ったんだよな?」

「え、うん…そうよ。菊岡さんから頼まれたって言ってたわ」



キリトがリズムに確認を取ると、ログアウトして直接確認してくる。と言つてログアウトしていった。

キリトのいないその空間に沈黙が続き、その空気に耐えられなくなったネーナがリーファとクラインやアスナたちに問いかける。

「ねえ、私たちそのラフコフ? 『笑う棺桶』つてのよくわかんないんだけどさ。そんなにヤバい人たちなの?」

「うん……そうだね、私たちがSAOにいた頃――」

とアスナは2人に説明を始めた。

「つつつ……!!」

間に合わなかった。

ただ俺はその事実にも奥歯を噛み締め崖から降りおりそれでもあのボロマント、死銃に向かつて走り出した。

また1人……犠牲が……!俺がもつと早くにシノンに指示を出していれば……!もつと早くに俺が!アイツを倒殺していれば……!!

そういつた後悔に苛まれながら剣を強く握りしめ死銃への距離を詰めていく。

そして、死銃の真後ろ。あと数歩で届くという距離まで走り、死銃の首を刎ねるため

だけに剣を振り上げる。

——捉えたッ!!

剣を死銃の首元に振り下ろした瞬間。剣を持った右腕にダメージエフェクトが現れ、剣を放してしまふ。

「っ……!?!」

咄嗟に手放した剣を拾い上げ死銃と距離を取る。

「はあ……はあ……（死銃が何かをしたのか……いや、だがこれはもつと——）」

そうしていると次々に予測線が見え、俺の頭を正確に狙ってくる射撃が吹き荒れる。

見えているのならば簡単だ!

反応出来るものは極力避けた。理由は2つ。まずは剣で銃弾を打ち落としておくとどうしても隙が大きくなり死銃に狙われやすい。ならまだ避け続けたほうがヤツの攻撃にも反応しやすい。そしてこのスナイパーは恐らく俺の剣の動きのパターンから無意識に苦手なところに撃ち込んでくるほどの腕はある。

この大会にそんな芸当が出来るやつは1人しかいない……

「ロックオンか……」

目に見える予測線をすべて避けスナイパーのいるほうに睨みを効かせる。

—————

「おいおい、いくら予測線が見えてるからってすべて避けきるのかよ」  
苦笑いの表情でセツナを見る。

「まあたしかにヤツは銃弾を剣で斬る変態だからな」

マガジンの半分を使ってしまったか…

「これ以上は無駄撃ちってことか」

よつこらしよつと溜め息まじりに相棒を担ぎ上げ、その場を離れる。

「……………Sterbenねえ…」

立ち去ったか…問題は……………

横目でボロマントのほうを見るとボロマントはまっすぐとこちらを見ていた。まるで品定めをしていたかのように

『雪崩』、ロックオン、シノン…お前らは、まだ、はい……………」

ヤツは不気味にそう言い姿を消した。

「待てっ!! 貴様は何者だ! 何を求めてここに来た! 答えろおおおおお!!」

血液が沸騰するほどの怒りを混じえた俺の叫びに返答はなく虚しく大橋に響いただけであった。

## 第三十一話 邂逅

刹那 side

「はあ……はあ……」

「アンタ……」

地面に座り込んだ俺の元にシノンがやってくる。

横目でシノンを見て

「俺は……やはり戦うことしかできない破壊者……誰かを救うことなんて……できっこない……」

虚しく笑う俺の肩にシノンの手が触れる。

「まだ詳しい事情はわからないけど……私にはアンタが必死だったことはわかったよ」

「必死にやった結果がこれではな……」

「……ちつ……クヨクヨするな!!」

シノンが俺の胸倉を掴み、怒鳴り散らす。

「それでも昨日私に説教垂れた男!? 私の弾丸を斬り落とした男!? さっき先生の狙撃を躲したことで確信したアンタは強い、私よりも。アンタには多分この大会を剣だけで戦い

抜くことも出来る！だから胸を張れ！アンタはあのマント男になんか負けない！」

シノンスイド

ああ、偉そうに言っちゃった。私は彼に偉そうに言える立場じゃないのに……ホントは私の方が臆病で——

「……ああ……すまないシノン、おかげで目が覚めた」

彼の胸ぐらを掴んでいた手は彼が立ち上がると外れてしまい、私が彼を見上げる形に。彼の目はもう迷いなどない。予選から彼の目にあつた闇は取り払われていたようだ。

「さあシノン、行くぞ。あの男を倒しに……！」

「ちよつと！……なんで協力する感じになつてんの!?!私は協力するなんて一言も——」

その瞬間、目の前にいたセツナが抜刀して私の向かつて駆けてくる。

斬られる！と思ひ咄嗟に腰のハンドガンに手を伸ばすが間に合わず、目を瞑る。しばらくして何も起こらないので目を開けるとセツナの姿は目の前になかった。

キンキンと自分の後方で銃弾が弾かれる音とジュツと熱で鉛を溶かす音がし、振り返ると大口径のガトリング砲を持った男の大雨のような弾幕を一本の光剣で全て捌いているセツナの姿が目に入る。

勝負は一瞬だった、ガトリング砲の男が見せた僅かな隙にセツナは駆け出しその男の首を跳ね飛ばした。

「さあ行くぞ、他の奴らにも今の音でここにいることはバレた。出来るだけ奴との戦闘まで体力を使いたくはない」

「あーちよ………ちよつと待ちなさいってば!!」

彼はそう言つて私の返事を待たずに歩き出した。

私もそれに付いて行くあたりどうかしてしまったのだろうか……?」

ロックオン side

「それにしてもあのボウヤには参つたな……まさか俺の弾丸をあんな簡単に」

俺はあの時の愚痴を言いながら森の中を移動していた。

まさか自分の弾が弾かれるとは思ひもしなかった、このゲームの中でも俺はトップレベルのスナイパーだと自負していたんだが

「まだまだ上には上がいるんだねえこれが」

不意に足を止め、進んできた方へと目を向ける

「例えば、お前とかな、ぼろマントさんよお」

さつきから背中当たる視線が痛え

「よく……わかったな……ロックオン……」

「そんな殺気ガンガン飛ばされたら素人ですらわかるわ」

はあと肩でため息をし

「撃つてこなかったことにはわけがあつたんだろ？」

「さすが………だな」

俺はハンドガンを抜き、ぼろマントの頭部に向ける。

そしてぼろマントはゆっくりと不気味な蒸気音と共に告げた。

「仲間に……なれ………ロックオン。」

「………」

「シノン………倒す<sup>殺</sup>ために………あの男が………邪魔だ。………だから………協力………しろ」

「………くっ」

「それに………あなたは………殺したく………ない………」

「………くっ………くくくく………」

「………なにが………おかしい………?」

「くっはははははははははは！面白いに決まつてんじやねえか、俺にあのボウヤを倒せ？お

前がシノンを殺すために？ツツコミどころが多すぎて笑えちまうぜ」

腹を抱え笑っていたが、スツとぼろマントのほうを見て

「馬鹿野郎、協力するわけねえだろ。シノン教え子は俺の弟子だ。あの引っ付いてるボウヤも、アイツも、俺が自分の手で倒す」

再びぼろマントにハンドガンを向ける。

「それにお前、最近話題の『死銃』だろ。さっきの大橋での一件といい、お前はホントにプレイヤーを殺すらしい……そんなやつ、ますますシノンと闘わせるわけにはいかねえなあ」

「……俺を……倒せるとでも……?」

「倒せないとでも……? いいぜ、テメエはここで狙い撃たさせてもらう!!」



## 第三十二話

## 死銃―デス・ガン―

ロツクオン side

「…俺を……倒せるとでも……?」

「倒せないとでも……? いいぜ、テメエはここで狙い撃たさせてもらう!!」

俺はやつの頭に向けていたハンドガンのトリガーを躊躇う様子を見せずに引く。

だがボロマントの男はまるでそうすることがわかっていたかのように避ける。そしてそのまま移動していることが足音から察せられる。

「ちよろちよると、そのステルス迷彩がなきや行動出来ねえのかよ!」

ザツザツと足音のしたほうへ振り向き、再びトリガーを引く。しかし弾は虚空を切つていった。

「クソっ……見えなきや当たんねえじゃねえか……ッ!!」

後ろからの殺気。咄嗟に身を屈めると自分の上でブンとなにかが振るわれる。

(まさか、アイツも……近接武器を使ってるのか……?)

急いで身を起こし、ボロマントがいるであろう位置から離れる。

「なるほど、こりゃあ俺もやり方を変える必要がありそうだな」

耳を凝らして集中した。姿形は消せても、気配は消せない。どんな微弱なものでもいい、アイツを感じるんだ……

沈黙が続いた。もうアイツは自分から離れて他のターゲットの元に向かったのかとも思った。だがそれはないと言わんばかりに相手に動きがあった。今までとは違う素早い動き、それが足音からわかる。

俺はそれに2丁のハンドガンを使い応戦した。

2丁のハンドガンペースをズラして連射する。

あまり好まないが、下手な鉄砲数撃ちや当たるといふやつだ。

さながら狙い撃つ。ではなく

「ああ、この状況はこうだな……乱れ撃つぜ!!!」

撃ち方も変えた。腕の位置や自分の立ち位置も変更しながらマガジンが空になるような勢いで乱れ撃った。

あのボロマントの位置はそんな中でも把握出来ている。次第にダメージエフェクトの赤いラインが見えて場所がわかりやすくなる。

そしてついに左のハンドガンの弾が切れる。リロードしようと左のハンドガンを下げた瞬間、あのボロマントは俺の左側から迫ってくる。

そしてボロマントは隙ありといわんばかりの大振りで俺の頭部を狙った。だがその一撃はキン！という金属音に遮られる。

ボロマントはさぞ驚いたであろう。

そう、俺の左手で逆手に持ったビームサーベルがボロマントの一撃を防いだのだから。

「備えあればなんとやらってやつだ。わざと左のハンドガンを多く撃って左側に誘導する、それをわからなくするために腕を入れ替えたりもしたし体制を変えた………経験の差だな………殺されたヤツらとは俺は直接の関係はないが………メエみたいなやつは絶対に許せねえ!!」

止めだ。

だが右手のハンドガンのトリガーを引く瞬間に悪寒が走る。

どこからか狙撃が飛んでくる。予測線なしの一撃、咄嗟に身をひねり致命傷は避けるが左肩に被弾してしまう。

「ぐっ……!!?!!しまっつ……!!」

トリガーを引けなかった……あのボロマントは邪悪に赤い目を光らせザッザッとどこかへ去ってしまった。

「クソ、邪魔しやがってッ!!」

俺は肩からスナイパーライフルをおろし、咄嗟に狙いを定めてその狙撃手の頭を一撃で撃ち抜く。

「ッ！あの野郎、逃げやがって……」

もう周りには完全にヤツの気配はない。

取り逃した、この大会の危険因子を……

悔みを残したまま、俺とヤツのファーストコンタクトは終わった。

—————

シノン side

ジュツジュツと熱によつて鉛が溶かされる音が近くで絶え間なく聞こえる。

その音は私の前方、ある男から聞こえてくる。

「撃て、シノン！」

その男の後ろで伏せた状態でライフルを構えている私にその男は声をかけた。

「————ッ！」

私はその男のさらに向こうにいるプレイヤーの足元に向けて発砲。撃たれたプレイヤーは足元から崩れて無防備になった。

「流石だな。いい腕をしている」

その男はその瞬間に崩れていくプレイヤーの胸に光剣を突き刺し引き抜いた。

それをやられたプレイヤーはGAME OVERの表示が出る。

「だいぶ時間が経ったな。そろそろ脱落したプレイヤーも多いのでは？」

その男は光剣をしまつてこちらに歩いてきた。

先程は百にも及ぶ弾丸を1個も私のほうに飛んでこないように捌いていたのに息一つ上がっていない。

……恐ろしい。

それが正直な感想だ。以前予選のときに私の弾丸を至近距離で真つ二つにしたときよりも今は鮮明に恐怖を感じる。

この男の底が……見えない……

「シノン、どうかしたのか？」

「え、？ああ……いいえ、なんでもないわ。……次のスキャンまであと少しね、それまでは隠れながら移動しましょうか」

私は時計を見てそう言った。

その男は「ああ」と短く言つて先に進んで行つた。

その男の名はセツナ。あるボロマントのプレイヤーを倒すまで協力関係にある。

だが倒したあとは敵同士……私に倒せるのだろうか……いや、倒さなければ。

「何をしている。遅いぞシノン」

「あー待ちなさいよ！」

セツナ side

「で、今私たちはどこに向かってるわけ？」

「やつは恐らく川を北側に進んだ。そしてやつの装備を見るに基本は狙撃タイプ、つまり遮蔽物などが多いあの廃墟に行つたに違いない」

「……たしかに…アンタ、もう私より戦況読むの上手くなつたんじゃないの？」

「そんなことはない。俺は基本的な現状把握、解析とそこから考えられる最適解を言つただけだ。いざ銃撃戦が始まつたらシノンの経験による推測と判断による行動が俺にとつても最優先の行動になる」

「そこまで言われるとプレッシャーなんだけど…」

そんな会話をしながら歩いていく。互いに基本的には無口なので会話があまり弾まない。

場を和ませようと俺が洒落たことを言うのだいたい場が凍りつく。

「……あー、その…シノン」

「なに、どうかしたの？」

「いや、今更なんだが……なんで俺についてきた…？」

それを聞いてシノン鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする。

「い、いや…自分で言っておいてアレなんだが…：…今回の相手は本当に人を殺せる力を持つているかもしれない相手だ」

「なによ、危険だから無理に付き合わなくてもいいって?」

「よくわかったな。もしかしてシノンもイノベイターか?」

「わけわからないこと言わないで。危険なんて今更どこにいたって変わらないもの。それだったらあなたの近くにおいて、あなたの強さを知りたい」

シノンはまっすぐと俺の目を見て言った。

こいつは引かないなと思ひ、俺もそれ以上この件に関して言うのをやめた。

「さあ次のスキャンまでもう時間もあまりないから走りましょ」

「ああ、そうだな」

シノン side

夕暮れ時。その廃墟街は夕日に照らされて眩しく光る。

そして衛星スキャンの時間がやってくる。

「セツナ、あなたは北から確認して」

「わかった。銃士Xかステイブンのうちこの廃墟街にいるほうが死銃だな。両方いた

場合、銃士Xのほうを優先度高の作戦プランで」

「わかったわ」

お互いに衛星スキヤンのデバイスから出たマップ、その上にあるプレイヤーマークをタツチして確かめる。

「見つけた、銃士Xだ。ステイブンはこの近辺にはいない。よって銃士Xを予定通り攻撃対象とする。なお攻撃対象の近辺にプレイヤーの姿もある。交戦するのは時間の問題だ。そして場所はあの大きなコロシウム付近」

「うん、じゃあその人と交戦し始める前に行きましょう」

私とセツナはそのコロシウムに急ぎ向かった。

「見つけた。多分交戦し始めるところ。銃士Xはコロシウムの上で待ち伏せしている」  
「了解した。俺が前衛でシノンが後衛からの援護。それともし俺がスタンした場合、落ち着いてやつを撃ってほしい」

「……アンタのほうを先に撃つかもよ?」

「シノンはそんなことしないはずだ。お前が後衛で援護してくれるおかげで俺は躊躇わずに前で剣を振れるんだ」

セツナは軽く笑ってそう言った。



「よし、作戦開始は俺がシノンと離れてから30秒後だ。……楽勝だろ？」  
セツナが私の前に拳を出してきてそう言った。

私は大きく息を吸って

「……アンタ誰にモノ言ってるの、あつたりまえでしょ！」

そう言つてグータッチするとセツナは颯爽と行つてしまう。

「……………」

私はその手に残つた彼の余韻を感じつつ、セツナが1番居て欲しいであろう位置に向かう。

…あいつとはこれで終わり。死銃を倒して、あいつと戦つて…それで忘れる。そう、もうあいつとは2度と会うことがないんだから……

ツ

—————

ツ……………こ、これは……………？あれ、なんで私地面に寝てるの……………？あ、れ？身体が…動かない……………？

私は気が付いたら地面に横になつて身体が動かなくなっていた。そこでなんとか顔と目を使って自分の身体を試してみる。

すると右肩のあたりに違和感。

私の肩に先程、ペイルライダーがスタンさせられていたのと同様のスタン状態を付与する釘のような弾丸が刺さっていた。

あ、れ？なん、で……だって……やつの相手は、セツナが……

その釘を撃ってきたであろう位置に目をやる。

その位置からザツザツと足音が近づいてくるのがわかる。

そしてゆつくりと、まるで魔法でも使っていたかのように徐々に姿を現す。

そうその男、死銃が